GANN

Band X. Juni 1916. Heft 2.

Kurze Inhaltsangabe der Originalaufsätze.

(Aus dem patholog. Institut der kaiserl. Universität zu Kyoto.)

Über die Statistik des Magenkrebses.

Von

Dr. **Nobuyoshi Suzuki.**

Verf. hielt diese Arbeit für interessant und bemerkenswert, weil einmal Rasse, Sitte und Nahrung in Japan von denen mancher europäischen Länder verschieden sind und weil zum anderen an solchen statistischen Arbeiten noch grosser Mangel herrscht.

Da die Arbeit noch nicht vollendet ist, kann Verf. vorläufig nur einen Teil derselben mitteilen. Sie stammt aus dem Journale des pathologischen Instituts (1.1901–6.1913).

1) Was das Verhältnis der Geschlechter anlangt, so fand Verf., dass die Männer fast doppelt so häufig wie die Frauen vertreten sind. So nehmen Männer am Magenkrebse etwas häufiger als Frauen.

2) Beim Magencarcinom liegt das Maximum zwischen dem 41. und 60., bzw. 40. und 50. Lebensjahre.

3) Was nun den Sitz des Magencarcinoms anlangt, so ergibt sich, dass am häufigsten die Gegend des Pylorus betroffen

ist, worauf der Sitz an der kleinen Kurvatur folgt. Bei der makroskopischen Untersuchung der Tumoren steht die geschwürige Form an erster Stelle.

4) Das Magencarcinom beginnt, an welcher Stelle auch immer es seinen Sitz haben mag, in der grossen Mehrzahl der Fälle schleichend, und zwar meistens mit leichtesten dyspeptischen Beschwerden.

Die Kranken bemerken zunächst Magensymptome, am häufigsten Magenschmerz. Verhältnismässig häufig zeigen sich bei der Krankheit Uebelkeit und Erbrechen, Magenschmerz, Appetitmangel und Abmagerung, usw. Kaffeesatzartiges Erbrechen stellt sich bei 13.7% ein.

Knotige Tumoren sind am leichtesten, diffus infiltrierende am schwersten abtastbar.

5) Weiter zeigte sich, dass Magencarzinom am häufigsten in den Lymphdrüsen an der kleinen und grossen Kurvatur metastasiert. Was nun die Metastasen in den Organen anbetrifft, so fand Verf. am häufigsten Metastasen in der Leber.

6) Fälle von multiplen primären Carcinomen wurden gefunden: 3 doppelte primäre Krebse in Magen und Oesophagus.

Was die Kombination von Magenkrebs mit Tuberculose anlangt, so fand sich 23,81%, aber wenn man Obsolete ausschliesst, so fand sich nur 8,57%.

7) 52,5% der Magenkrebskranken starben an ihrer Krankheit ohne weitere schwere Komplikationen, 23,8% derselben an Komplikationen, die in engem Zusammenhang mit dem Krebs stehen, 12,5% derselben an Komplikationen, welche nur indirekt durch den Krebs veranlasst werden, und 11,2% derselben an

Komplikationen, welche in gar keinem Zusammenhang mit dem Krebse stehen. (*Autor.*)

(Aus dem pathologischen Institute der Kaiserlichen Universität zu Kyoto.)

Über die Transplantation der Geschwülste in den Vogelembryonen.

Von

Priv. Doz. Dr. **Kenzi Kiyono** und Priv. Doz. Dr. **J. Kawakami.**

(Iste Mitteilung)

Über die Transplantation der Myxosarkome von Hühnern (Geschwülste *A. Fujinamis*, *K. Inamotos* und *T. Katōs*), des Chondroms von Hühnern (*A. Fujinami-* und *T. Katōs*), des Fibroms von Hühnern (*A. Fujinami-* und *T. Katōs*) und des Hühner karzinoms, sowie des Rattensarkoms (*Jensen-* und *K. Fujinawas*), des Mauskarzinoms (*T. Kikuchis*) in den Embryonen der Hühner, der Enten und der Truthennen.

Eine genaue Inhaltsangabe folgt in weiteren Mitteilungen.

(*Autor.*)

癌　第十年第二册　大正五年六月刊行

原著

胃癌ノ統計的研究

京都醫科大學病理學教室
醫學士　鈴木信義

惡性腫瘍ニ關シ研究スベキ方面ハ甚ダ多ク、諸家ニ依テ種々ノ方面ヨリ熱心ニ攻究セラレツヽアルナリ、我國ニ於テハ惡性腫瘍ニ關スル統計的研究甚少ク、且亦歐洲諸國ト風俗人種及ビ飮食物ノ異ルニヨリ此種ノ研究ハ甚ダ興味アルヲ以テ余ハ我京都病理學教室、外科學教室及ビ婦人科學教室ニ於ケル記錄材料ヨリ統計的研究ヲ試ミタリ然レドモ此研究ハ其方面甚ダ多樣ニシテ未ダ完成スルニ至ラザルヲ以テ茲ニハ只胃癌ニ關シ其一部ヲ報告シ餘ハ後日詳述スル所アルベシ。

胃癌ノ頻度

京都病理學教室

自明治三十四年一月
至大正二年六月

總解體數　二二四、
未成年者ヲ除ク　一六四八

胃癌腫（實數）　一〇五

%
四・七
六・四

癌腫總數ニ對スル%
三七・一（癌腫總數二八三）

等ニヨリ種々ノ狀態ヲ將來スルモノナリ。

今左ニ余ノ(九十五)例ニ付テ統計的觀察ヲ試ミンカ。

(一)、他ノ症狀現ハレザルニ先チ最初ニ現ハレタル症狀

	實數	
一、胃症	六〇(六三・二%)	六、腰痛 三
(一)胃痛二五(食後 飲食ニ關係ナキモノ 一一〇 空腹時 一三) (二)嘔氣嘔吐二〇 (三)呑酸嘈囃八 (四)胃部不快ノ感一 (五)停滯ノ感、膨滿ノ感一二		七、下痢 六
		八、衰弱、全身怠慢、羸痩 六
		九、嚥下困難、食物胸內停滯感 七
二、食思缺損	一一	十、鎖骨上窩腺腫大自覺 二
三、腹痛(一般)	八	十一、四肢ノ勁直及ビ顫震 一
四、腹部腫瘍自覺	三	十二、貧血 一
五、腹痛(下腹部)	二	十三、病的饑餓 一

(二)、主ナル徵候

主トシテ現ハレ來タリシ徵候ニ付キ觀察センカ。

一、嘔氣及ビ嘔吐七四(七七・九%)

多數ノモノハ同時ニ現ハレ來ルモ少數ノモノニアリテハ主トシテ嘔吐ヲナシ嘔氣ヲ缺クモノアリ。

此內咖啡殘渣樣ノ嘔吐ヲナスモノ一三例卽チ一三・七%ナリトス。

卽チ癌腫ノ內約三分ノ一强ハ胃癌タルコトヲ知ル。

胃癌ト男女

性	鈴木 剖檢數	鈴木 % 男女各解剖總數ニ對スル%	山極氏 剖檢數	山極氏 %	Feilchenfeld 剖檢數	Redlich 剖檢數	Riechelmann 剖檢數
男	七二	六八・六	五・四	九〇	八四・一	一〇一	一一三	一六九
女	三三	三一・四	四・一	一七	一五・九	六四	六三	一一九

我國ニテハ男性ノ胃癌ハ女性ニ比シ多數ヲ占ムレドモ、之ヲ歐洲諸家ノ報告ニ徵スルニ獨逸國ニ於テハ我國ニ於ケルヨリハ女性ノ%比較的多數ヲ示シ Erler 氏ノ如キハ寧ロ女性ニ多シト云ヘリ。

胃癌ト年齡

	二十歲以下	自二十一歲至三十歲	自三十一歲至四十歲	自四十一歲自五十歲	自五十一歲至六十歲	自六十一歲至七十歲	自七十一歲至八十歲	八十歲以上
實數	○	六	二〇	四〇	二七	一一	一	○
%	○	五・七一	一九・〇四	三八・一	二五・七四	一〇・五	〇・九一	○

卽チ自四十一歲至五十歲間最モ多數ヲ占メ、次デ自五十一歲至六十歲間トス、而シテ最高年齡ハ七十六歲ニシテ最低年齡ハ二十一歲ナリキ。

胃癌ノ臨牀的徵候

一、癌發生ノ部位、時期及ビ癌ノ性質竝ニ其廣延

二、癌轉移ノ方面、大小及ビ廣延

幽門部一二　小彎部一　大彎部一　後壁一　前壁一

(二)他覺的ニ腫瘍ヲ觸診セシモノ、六〇例即チ六四・五%此ノ内

腫瘍トシテ觸知セシモノ五一　即チ五四・八%

抵抗トシテ觸知セシモノ九　即チ　九・七%

今之ヲ腫瘍ノ性狀ニ依テ分テバ

	限局結節狀	潰瘍狀	瀰蔓性	記載不明	計
腫瘍トシテ觸知セルモノ	一七	二七	六	一	五一
抵抗トシテ觸知セルモノ	三	四	二	〇	九

又之ヲ部位ニ依テ分テバ

	幽門部	小彎部	大彎部	噴門部	後壁	前壁	全壁	底部	記載不詳	計
腫瘍トシテ觸知セルモノ	二九	五	三	二	二	四	五	〇	一	五一
抵抗トシテ觸知セルモノ	四	三	〇	〇	〇	〇	一	一	〇	九

次ニ觸知シ得ザリシモノハ三三例即チ三五・五%ナリ、此ノ内限局結節狀四、潰瘍性二一及ビ瀰蔓性八ナリ、而シテ幽門部二〇、小彎部七及ビ噴門部六ナリ。

以上ノ觸知シ得ザリシ四例ノ限局結節狀腫瘍ハ

噴門部ニ占居スルモノ一　小ナル多發性腺腫一　扁平ナル硬結二

之ニ依テ其ノ觸知シ得ザリシヲ知ル。

二、胃痛　四八（五〇・五%）
三、腹痛（一般）　二六（二七・四%）
四、胃部壓痛　二一（二二・一%）
五、呑酸　一九（一九・九五%）
　嘈雜　一四（一四・七%）
六、胃部停滯感　一八（一八・九%）
　胃部膨滿　二七（二八・三五%）

(三)、自覺的竝ニ他覺的ニ腫瘍ヲ觸診スル頻度ト病理解剖上所見トノ比較（九十三例）

（一）自覺的ニ腫瘍ヲ認メタルモノ一九例卽チ二〇・四%此ノ內

（イ）限局結節狀　一二　（ロ）潰瘍性　六　（ハ）瀰蔓性　一

以上六例ノ潰瘍性ノ內

潰瘍ノ邊緣著シク肥厚ヲ呈スルモノ　四
小彎部淋巴腺ノ著明ナル腫大　一
胃後壁「ポリープ」狀筋腫　一

又瀰蔓性ノモノニテハ大彎部淋巴腺ノ腫大セルヲ認ム。

卽チ以上ノ理由ニ依テ外部ヨリ自覺的ニ觸レタルヲ知ル。

次ニ之ヲ癌腫占居ノ部位ニ依リ分ツ時ハ（「ポリープ」及ビ淋巴腺腫大ノ三例ヲ除キ他ノ十六例）

七、吃逆　九（九・四五%）
八、嚥下困難　七（七・三五%）
　頸部狹窄感　二（二・一%）
九、食思缺損　四六（四八・三%）
十、羸痩　四二（四四・二%）
十一、顏面及ビ下肢等浮腫　二〇（二一・一%）
十二、病的饑餓　一（一・〇五%）

次ニ、胃液中乳酸ノ存在ハ遊離鹽酸缺乏ヨリハ更ニ重要ニシテ甚ダ屢〻證明セラルヽモノナリ、余ノ調査ニヨレバ之ヲ證明スルモノ四十六例、卽チ八五・二%、證明セザルモノ八例、卽チ一四・八%ナリトス。

之ニ依テ見ルモ、既ニポアス及ビ其他ノ諸家ノ唱道セル如ク、乳酸ヲ證明セル胃液ヲ有スル患者ニ胃癌ヲ除外スルハ最モ愼重ナラザルベカラズ。

胃癌ノ解剖的所見

(一)、胃癌占居ノ部位

(著者)		幽門部	噴門部	小彎部	大彎部	(瀰蔓性)	殘餘	計
伯林	實數	一二八	二六	二三	一一	六	一	一九五
イスラヘル氏	%	六五・六四	一三・三三	一一・七九	五・六四	三・〇八	〇・五二	一〇〇
東京	實數	六三	八	一五	一		二〇 所屬不明	一〇七
山極氏	%	五八・九	七・五	一四・〇	〇・九		一八・七	一〇〇

		幽門	小彎	噴門	大彎	全壁	底部	後壁	前壁	小彎兩側壁	記載不明	計
伯林 レードリッヒ氏	實	七一	三四 幽門及ビ小彎	二一	一〇	五	五	四	一	—	一三	一七六
伯林 リーヘルマン氏	數	一二五	五一	三一	二八	三一	—	七	一	—	一四	二八八
京都 鈴木氏		三五 幽門附近	二一 中央 一三	二 噴門附近	五	三 幽門附近	二 中央	一〇	一	四	—	五 一〇五

以上表示セルガ如ク、胃癌占居ノ部位ハ幽門及ビ其附近ヲ以テ最多數ナリトス之レニ次グヲ小彎、噴

卽チ腫瘍ノ性狀ニテハ限局結節狀ノモノハ最モ觸知スルコト易ク瀰蔓性ノモノハ最モ難キヲ知ル、而シテ占居ノ部位ニテハ最モ觸知シ易キハ前壁、全壁及ビ大彎部等ニシテ次デ幽門部等ニシテ觸知シ難キハ噴門部及ビ小彎部等ナリトス。

(四)、便通、西書ニハ一般ニ始メニ便祕ヲ來シ後ニ下痢ヲ起シ來ルト雖モ余ノ調査セシ七十六例ニ依レバ

	便祕	變化ナキモノ	下痢
比較的初期	五六	一三	七
末期	四一	八	二七

卽チ初期及ビ末期共ニ便祕スルモノ最多數ニシテ、下痢ハ初期ニハ甚ダ少數ナレドモ末期ニハ著シク增加スルヲ知ル。

(五)、胃液ニ就テ

胃癌ニテハ消化機能著シク障碍セラル Kussmaul 及ビ Von den Velden 兩氏ガ胃液ニ遊離鹽酸ノ缺如スルハ診斷上甚ダ價値アルヲ唱道セシ以來諸家ノ注意ヲ喚起シ、其ノ調査ノ結果今日ニテハ胃癌診斷上必要ナル一徵候トナレリ Eichhorst 氏ニヨレバ二百十一名ノ胃癌患者中百八十一名卽チ八五・〇%ハ遊離鹽酸ヲ認メズト云ヘリ。

余ガ詳細ニ記錄セラレタル五十四例ノ胃癌患者ニテ調査スル所ニ依レバ、遊離鹽酸ヲ證明セザルモノ四十六例、卽チ八五・二%ニシテ、之ヲ證明スルモノ八例、卽チ一四・八%ナリ、而シテコノ內普通量ノモノ四例ニシテ、他ノ四例ハ其ノ量普通以下ナリ。

（一）胃壁漿膜面ヨリ腹腔内ヘ癌細胞ノ散種状ニ擴ガルコト。

（二）淋巴系ニ介シテ諸所ノ淋巴腺時トシテ諸臓器組織ニ轉移ヲ生ズルコト。

（三）血行ニ介シテ全身諸臓器ニ轉移スルコト。

左ニ余ノ調査ノ諸家ノ報告トヲ比較センカ。

臓器	鈴木（京都）（一〇五例）		山極氏（東京）（一四五例）		トルノー氏（伯林）（一五五例）		ミエレッキ氏（伯林）（一五六例）	
	實數	%	實數	%	實數	%		
胃淋巴腺 小彎部	五四	五一・四三	四六（上腹部淋巴腺）	三一・七二	三八（胃淋巴腺）	一五・〇	部位	
胃淋巴腺 大彎部（幽門部ヲ含ム）	四五	四二・八六	—	—	一九	七・六	淋巴腺 六六	四二・三
肝門腺	三八	三六・一九	一六	一一・〇三	—	—	—	—
中隔腺	一四	一三・三三	六	四・一四	—	—	—	—
氣管枝腺	三三	三一・四三	二六	一七・九三	二五	一〇・〇	一八	一一・五
大網部淋巴腺	三五	三三・三三（胃間膜ニ八、膵若部五）	八	五・五二	一八	七・〇	—	—
腸間膜（腺）	一三	一二・三八	五	三・四五	—	—	—	—
鎖骨上窩腺	五	四・七六	一	〇・六九	—	—	—	—
腋下腺	一一	一〇・四八	—	—	三	一・一八	—	—
後腹膜外腺	三	二・九	二〇	一三・七九	五一	二〇・〇	—	—
頸腺	二	一・九〇	—	—	—	—	—	—
鎖骨下窩腺								

○胃癌ノ統計的研究（鈴木）

門及ビ其ノ附近ナリトス、卽チ胃癌ノ六〇・〇%以上ハ幽門部ニシテ、而カモ幽門輪ヨリ一乃至二糎以上ノ個所ニシテ小彎線又ハ其前後ニ占居スルモノ最多シ。噴門部ト小彎部トノ多少ハ少ク一致セザルモノアリ、余ニアリテハ小彎部ノ中央ニ位スルモノハ噴門部ノ約二倍以上トナル、卽チオルト氏及ビ山極氏ノ報告ニ略ゝ一致ス、又イスラヘル氏ニ依レバ殆ンド同數ニシテ而カモ噴門部稍ゝ多キガ如シ此等ノ差異ハ小彎部癌ト幽門部癌トノ區域ヲ定ムルニ際シ確乎タル標準ヲ有セザルニ因スルナラン。

(二)、胃癌ノ種類

左ニ肉眼的性狀ニ依テ分ツ時ハ（剖檢錄ニヨル）

（著者）		潰瘍性	限局結節狀	瀰蔓性	記載不輸	計
山極氏	實數	六八	二〇	一三	六	一〇七
	%	六三・六	一八・七	一二・一	五・六	
鈴木氏	實數	五六	二七	一六	六	一〇五
	%	五三・三	二五・七	一五・二	五・八	

以上表示セルガ如ク潰瘍性最多數ニシテ限局結節狀ノモノハ約四分ノ一乃至五分ノ一ナルヲ知ル、然レドモ臨牀上外部ヨリ觸診シ得タルハ五四・八%ナリ、是レ潰瘍性ニシテハ其邊緣著シク肥厚ヲ呈シ、又ハ其周圍ノ淋巴腺癒著スルモノアルベク、又瀰蔓性ニテモ或ル一個所特ニ强ク肥厚スル場合等ニ依テ腫瘍ヲ觸知シ得ルノ機會甚ダ多クナルノ理ナリ。

(三)、轉移散種ノ方向

胃癌ガ胃腑以外ノ諸臟ニ傳播スルノ方法ニ大體左ノ三樣ノ別アル事ハ人ノ知悉スル所ナリ、卽チ

| | | |

| | | |

(イ) 肺炎	六		(四) 全ク關係ナキ併合症ニ依テ死セルモノ		
(ロ) 慢性腸加答兒	一		(イ) 結核	六	
(ハ) 壞死性大腸加答兒	一		(ロ) 心筋炎	一	
(ニ) 膿毒症	一		(ハ) 腎臟炎	一	
(ホ) 脊髓膿瘍	一		計	八	一一・二
計	一〇	一二・五			

是ニ由テ見ル如ク惡液質及ビ一般癌病ニ依テ死セルモノ約半數ニシテ全ク關係ナキ合併症ニ依テ死セルモノハ最モ少數トナル今之ヲシモン氏ノ報告ニ比較スル時ハ多少ノ差異ハ之ヲ認ムレドモ大體ニ於テ一致スルガ如シ。

孵化鳥卵内ニ於ケル腫瘍移植ノ實驗的研究 (第一回概括的略報)

京都醫科大學病理學教室ニ於テ
醫學博士 清野謙次
醫學士 川上漸

實驗病理學ガ生物ノ「フィロゲニー」ニ屬セル成熟動物ニ就キテ行ハレ、「オントゲニー」ノ範圍ニ屬セル

○孵化鳥卵内ニ於ケル腫瘍移植ノ實驗的研究 (清野、川上)

(四)、合併症

(イ)惡性腫瘍　一〇五例ノ內原發性食道癌ノ合併スルモノ三例卽チ二・八六%アリ。

(ロ)結核　稀レナル合併症ニ屬スト一般ニ認メラル。

(一)肺結核一五（此ノ內陳舊性、石灰化性ノモノ九）

(二)淋巴腺結核一八（此ノ內陳舊性石灰化性ノモノ一一）

(三)腸結核三

(四)其他臟器結核

肝臟	二	腎臟	一	子宮	一
肝臟周圍	二	心包	一	大網	一
肋膜	二				
腹膜	一				

而シテ一〇五例ノ胃癌患者中結核竈アルモノ二五例卽チ二三・八一%ニシテ、此ノ內陳舊性石灰化性ヲ除ク時ハ九例卽チ僅カニ八・五七%トナル。

(五)、胃癌腫患者ノ直接死因

手術ニ起因セシト思ハルヽモノハ之ヲ省略シタル殘餘ノ八十例ニ就テ調査ス。

(一)他ニ合併症ナクシテ癌腫自己ニ依テ死セル者

	實數	%
惡液質及ビ一般癌病	四二	五二・五
(ロ)食道周圍膿瘍（穿孔）	一	
(ハ)膿毒病	四	
計	一九	二三・八

(二)癌腫ト直接關係アル合併症ニ依テ死セルモノ

(イ)腹膜炎　一四

(二)癌腫ハ間接關係アル併合症ニ依テ死セルモノ

無精卵卽チ受精セザル鳥卵ハ加溫セラルヽトモ「エムブリオ」ヲ生ゼズ。斯カル鳥卵內ニ腫瘍ヲ移植スルトモ移植腫瘍片ハ發育增殖セズ。是レ卵白及卵黃ハ其生理的濃度ニ於テ腫瘍細胞ヲ榮養スルニ適セズ。又腫瘍細胞ハ生理的濃度ノ卵白及卵黃ヲ同化シテ自家ノ榮養素ト爲スコト能ハザレバナリ。

不熟卵トハ孵化シテ一定度迄「エムブリオ」ガ發育シタル後死滅セシ鳥卵ヲ意味ス。此種鳥卵ニ移植セラレタル腫瘍中鷄粘液肉腫ノ如ク抵抗力强大ニシテ發育旺盛ナル腫瘍ハ插入後兩三日間僅カニ增殖スルコトアレド、其他ノ腫瘍ハ全然增殖スルコト無ク、漸次退行性變化ニ陷ル。其他生活セル「エムブリオ」ニ移植セラレテ一度旺盛ナル發育ヲ營ミ居リタル腫瘍モ一朝「エムブリオ」ガ死滅スルニ及ベバ其發育ヲ停止シ自家融解ニ陷ル。又「エムブリオ」及卵膜ニ移植セラレタル腫瘍ハ或一部ニ於テ「エムブリオ」或ハ卵膜ト結合シ、此等胎胚組織ヨリ血液或ハ體液ノ供給ヲ受ク。反之「エムブリオ」ガ生活シ居レル鳥卵內ニ於テ「エムブリオ」或ハ卵膜組織ト連絡スルコト無ク發育スル腫瘍無シ。例外トシテ稀レニ卵膜腔內ニ遊離セル腫瘍塊アレド、コハ通常卵膜ニ生ゼシ腫瘍ガ「エムブリオ」ノ運動ニヨリテ卵膜ヨリ遊離セシモノナリ。

サレバ移植腫瘍ガ孵化鳥卵內ニ於テ旺盛ナル發育ヲ營ム爲ニハ「エムブリオ」ノ生活スルヲ要シ、更ラニ腫瘍組織ハ其一部ニ於テ生活セル「エムブリオ」或ハ卵膜ト連絡シ、之レヨリ榮養素ノ供給ヲ受クルヲ要ス。反之「エムブリオ」ノ死滅セル鳥卵內或ハ「エムブリオ」ヲ生ジ得ザル無精卵內ニハ腫瘍ノ顯著ナル發育無シ。又生活セル「エムブリオ」或ハ卵膜ニ移植セラレテ發育シ居リタル腫瘍モ「エムブリオ」

實驗胎生學ガ今日迄單ニ實驗畸形學タルノ觀アルハ余等ノ甚遺憾トスル所ナリ。サレバ比較病理學ヲ完成スル爲ニハ單ニ異種族成熟動物ニ就キテ比較研究ヲ行フノミナラズ更ラニ進ンデ各種動物ノ「オントゲニー」ニ屬セル範圍ヲ研究スルヲ要ス。而シテ此方面ニ於ケル余等ガ研究ノ第一歩トシテ最モ得易キ「エムブリオ」ニ就キ最モ簡單ナル研究ヲ行ヘリ。

腫瘍細胞ハ其未分化性ナルコトニ於テ生物學的機能上胎胚細胞ニ類似セリ。サレバ胎胚細胞及腫瘍細胞ヲ特殊境遇ノ下ニ置キ之レヲ未分化性固體タル「エムブリオ」ニ移植スルコトハ、分化ノ度進ミタル成熟細胞若クハ分化ノ度進マザル腫瘍細胞及胎胚細胞ヲ既分化固體タル成熟動物ニ移植スルト異ナル所アリ。之ヤガテ廣義ニ於ケル「細胞ノ移植」ト「微生物傳染」ノ意義ト範圍トヲ決定スル上ニ必要ナリ。

本報告ニハ余等下記ノ動物腫瘍ヲ諸種孵化鳥卵内ニ移植セリ。移植結果左ノ如シ。

腫瘍ノ種類	成熟動物移植	鷄「エムブリオ」移植	家鴨「エムブリオ」移植	吐綬鷄「エムブリオ」移植
鷄粘液肉腫第一種	鷄ニ陽性	陽性	陽性	陽性
同第二種	同上	陽性	陽性	陽性
鷄軟骨腫	同上	陽性	陽性	陽性
鷄纖維腫	同上	陽性	陽性	陽性
鷄腺性腫瘍	鷄ニ陰性	陰性	陰性	試ミズ
甘口鼠癌腫	甘口鼠ニ陽性	弱陽性	弱陽性	試ミズ
大黒鼠肉腫	大黒鼠ニ陽性	陽性	陽性	陽性

組織ノ一部ニ壞死ヲ生ズルコトニ原因セルコト多キモ、亦腫瘍ガ卵膜ニ生ジ「エムブリオ」ノ運動ニヨリテ牽引セラレタル結果ナルコトモアリ。

鷄粘液肉腫第二種ニテモ「エムブリオ」移植例ハ成熟鷄移植ト略〻同一ナル組織像ヲ呈シ、一般ニ壞死ヲ生ズルコト少ナク、且腫瘍組織ハ到ル處略〻同一形狀ノ細胞ヨリ成ル。又本腫瘍ハ上記粘液肉腫第一種ヨリモ出血ヲ生ズルコト少ナシ。コハ本腫瘍ニ壞疽ヲ生ズルコト少ナキニ原因セルコト强シ。

鷄軟骨腫ニハ「エムブリオ」移植ニ於テモ成熟鷄移植例ニ於ケルガ如ク、軟骨基質ガ現ハル。近時成熟鷄移植例ニ於テ本腫瘍ニ軟骨基質ノ發現スルコト少ナクナリ、紡錘狀細胞肉腫或ハ粘液肉腫ノ像ヲ呈スルニ至レリ。斯カル腫瘍ヲ「エムブリオ」ニ移植スルニ同性狀ノ腫瘍ヲ生ズ。

鷄纖維腫ハ之レヲ「エムブリオ」ニ移植スルモ成熟鷄移植ト同ジク、少數ノ細長ナル腫瘍細胞ヲ生ジ、間質ニ於ケル結締織纖維ノ生ズルコト著明ナリ。

大黑鼠肉腫ハ「エムブリオ」ニ移植セラレタル時ニモ成熟大黑鼠移植ト同性狀ノ腫瘍ヲ生ジ、腫瘍細胞ハ主トシテ大形ノ紡錘形細胞ヨリ成レリ。

以上鳥類「エムブリオ」ニ移植陽性ナル腫瘍ハ同種族「エムブリオ」ノミナラズ、異種族「エムブリオ」ニ於テ恰モ同種族成熟動物ニ移植セラレタル如キ旺盛ナル發育ヲ呈ス。而シテ被移植「エムブリオ」ガ腫瘍細胞ト同種族ナルト異種族ナルトヲ問ハズ、腫瘍ニ對シ周邊組織ノ反應極メテ輕微ナリ。サレバ組織學的所見ヨリ推シテ腫瘍ガ同種族「エムブリオ」ニ移植セラレシヤ或ハ異種族「エムブリオ」ニ移植セラレシヤヲ鑑別スルコト能ハズ。

ノ死滅スルニ及ベバ其發育ヲ停止シ、自家融解ニ陷ル。從テ孵化鳥卵内ニ於ケル腫瘍移植ハ「エムブリオ」及卵膜（廣義ノ「エムブリオ」）ニ對スル腫瘍移植ニシテ生活組織體外培養ト異ナレルモノナリ。

三

本報告ハ孵化初期（第四乃至第九日）ノ鳥類「エムブリオ」ニ腫瘍ヲ移植シタル後、更ラニ孵化ヲ繼續シ、該鳥卵ノ破殼時期ニ至ル迄ノ種々ノ時間ニ於テ腫瘍ノ運命ヲ研究シタルモノナリ。孵化最初（最第一乃至第四日）ニ腫瘍ヲ移植スルコトハ「エムブリオ」ヲ死滅セシムルコト多ク、且何等特殊ノ利益無キヲ以テ之レヲ行ハザリキ。孵化後期ノ「エムブリオ」ニ腫瘍ヲ移植スルコトハ特殊ノ技術ヲ要ス。コハ改メテ他日報告ス可シ。

移植腫瘍ノ組織學的所見ハ「エムブリオ」ニ於テモ成熟動物移植ニ於ケル所見ト大體ニ於テ異ナルコト無シ。

鷄粘液肉腫第一種ハ「エムブリオ」ニ生ジタルモノモ、成熟鷄ニ生ジタルモノト略ゝ同樣ナル組織像ヲ有シ「エムブリオ」ヨリ「エムブリオ」ニ移植世代ヲ重ヌル時ニモ其組織學的所見ニ大差無シ。但時トシテ纖維性基質ノ出現強クナリ或ハ基質ガ強ク粘液性ヲ呈スルコトアレド、コハ成熟鷄相互間ニ移植スル時ニモ認メ得ラル、程度ノ變化ニ過ギズ。

其他本腫瘍ヲ「エムブリオ」ニ移植スル時ニモ成熟鷄移植ト同ジク、腫瘍組織ニ屢ゝ退行性變化ガ現ハル。卽(1)組織ノ一部ニ壞死ヲ生ズルコト多シ。(2)組織ノ一部強ク粘液性ヲ呈スルコトアリ。(3)腫瘍ノ新生減少シ退縮ニ陷ルコトアリ。(4)腫瘍周邊母組織及腫瘍組織内ニ出血ヲ生ズルコト多シ。コハ腫瘍

處ニヨリテハ同性狀ノ細胞ガ疊積シテ數層ヲ成セリ。連續截片ヲ作リテ之レヲ檢スルニ、此等細胞管或ハ細胞索ハ迂曲シテ被移植腫瘍片周緣部ノ癌胞巢ニ連續セリ。然レドモ移植十日以上ヲ經タル諸例ニ在リテハ癌細胞ハ全然退行性變化ニ陷レルヲ以テ見レバ癌細胞ノ增殖ハ少數例ニ於テ移植後數日間行ハルヽモ、移植地ノ不適當ナル爲早晩死滅スルヲ免カレズ。

鷄腺性腫瘍ノ移植後ニ於テハ毫モ上皮細胞ノ增殖セル形迹無シ。被移植腫瘍片ハ移植後數日ニシテ既ニ母組織ヨリセル多量ノ肉芽組織ノ包圍スル處トナリ、腺細胞ハ速カニ崩壞シ機化吸收セラル。肉芽組織中ニ多核巨態細胞ヲ見ルコト多シ。

一般ニ移植陰性ノ腫瘍ハ移植陽性ナル腫瘍ヨリモ周邊母組織反應ヲ生ズルコト强シ。然レドモ母組織反應ノ强弱ハ直チニ腫瘍ノ移植ヲシテ陰性或ハ陽性ナラシムル所以ノ原因ト見ルコト能ハズ。腫瘍移植陰性ノ原因ハ寧ロ腫瘍細胞抵抗力ノ微弱ニシテ、發育能力ノ劣弱ナルコト及ビ直接認メ難キ原因ニヨリテ被移植動物ガ該腫瘍ノ發育榮養ニ不適當ナルコト等ニ重キヲ置ク可シ。勿論周邊母組織反應ノ著シク高度ナル時ハ腫瘍細胞ノ增殖ヲシテ困難ナルニ至ラシム可キモ、之レヲ以テ徹頭徹尾腫瘍ノ發育ヲ妨害スルモノナリトスルハ非ナリ。是レ母組織ノ血管及結締織細胞ノ一部ガ腫瘍組織內ニ進入シテ腫瘍構成分ノ一部ヲ成セルコト Goldmann ガ成熟動物腫瘍移植ニ認メタル如ク、周邊母組織反應ノ强盛ナル部位ハ榮養供給佳良ニシテ腫瘍ノ發育良好ナルコト、藤浪氏等ノ研究ニヨレバ移植前局所ニ炎症ヲ生ゼシメタル後、此部ニ腫瘍ヲ移植スレバ其發育良好ナルコト等ノ事實ニ徵スレバ、周邊母組織ノ反應ハ之レヲ直チニ免疫ノ本態ト見ルコト能ハズシテ、一定度迄ハ却テ腫瘍ノ發育ヲ良好ナラシ

此等移植陽性腫瘍ノ發生狀態ヲ觀察スルニ、增殖シテ新生腫瘍ノ主成分トナルモノハ被移植腫瘍片ノ細胞就中其周緣部ニ位セル榮養良好ナル細胞ナリ。母組織ノ結締織細胞亦少許ノ增殖ヲ示シ、血管ヲ伴ヒテ腫瘍組織中ニ進入スルモ、是レ決シテ主要ナルモノニ非ラズ。但後者ノ細胞ノ一部ハ其形狀ニ於テ腫瘍細胞ノ一部ト酷似シ、兩者區別シ難キモノアリ。被移植腫瘍片中心部ノ細胞ハ多クノ場合退行性變化ニ陷ル。

被移植腫瘍片ヨリ腫瘍細胞ノ增殖新生スル狀態ハ「エムブリオ」ヨリセル榮養供給ノ良否ニヨリテ、必ズシモ四周ニ向ヒテ平等ナル發育ヲ營マズ。卽被移植腫瘍片ノ一側ニ於ケル組織細胞ノ增殖スルコトアリ（單極性增殖）被移植腫瘍片ノ相對セル兩側ヨリ組織ノ增殖アルコトアリ（雙極性增殖）被移植腫瘍片ノ一側ノミ組織ノ增殖無ク、爾餘各側ヨリ腫瘍細胞ノ發育アルコトアリ（三極性增殖）或ハ被移植腫瘍片ノ各側ニ於テ組織ノ增殖アルコトアリ（多極性增殖）後者ニ於テハ被移植腫瘍片ヲ中心トシ新生腫瘍組織ハ之レヲ包圍シ、此新生層ノ厚サ凡テノ方向ニ同一ナルコトアリ（同心性增殖）或方向ニ厚ク或方向ニ薄キコトアリ（偏心性增殖）但此等狀態ハ漸次移行スル者ニシテ、單極性及雙極性增殖モ、腫瘍組織ノ增殖スルニ從ヒ、次第ニ被移植腫瘍片ヲ包圍シ、三極性或ハ多極性增殖ノ觀ヲ呈スルコトアリ。

甘口鼠癌腫ハ移植ノ全然陰性ナル例乏シカラズ。被移植腫瘍片ノ大部分ハ通常鳥卵內插入後三日ニシテ既ニ著シキ退行性變化ニ陷リ、七乃至九日ニ及ベバ癌細胞ハ崩壞シ胞巢ノ狀不分明トナル。被移植腫瘍片周ニハ插入後三日ニシテ既ニ著明ナル肉芽組織ヲ生ズ。少數例ニ於テハ此肉芽組織中ニ少數ノ上皮細胞增殖アリ。其形狀癌細胞ニ等シク、腺管腔ノ不明瞭ナルモノアリ又之レヲ認メ得ルモノアリ。

j 蛋白嚢ニ生ジタルモノ

k 臍部卵膜ニ生ジタルモノ

第二種、「エムブリオ」ニ移植セラレタル腫瘍

a′「エムブリオ」ノ一部ニ移植セラレタルモノ

b′「エムブリオ」ノ一部ニ移植セラレ且此部ニ於テ卵膜モ腫瘍ト癒著セルモノ

移植腫瘍ガ「エムブリオ」ノ榮養素ヲ奪ヒ「エムブリオ」ヲシテ全身ノ榮養障碍ノ爲死ニ至ラシムルコトハ孵化第七日前後ノ移植ニ於テハ之レヲ見ルコト少ナシ。是レ此時期ニハ「エムブリオ」ハ既ニ發育シテ比較的大トナレルヲ以テナリ。サレバ移植後「エムブリオ」ノ死滅スル原因ハ移植ニ因スル直接障碍ヲ除クバ、主トシテ移植腫瘍ニ因スル局所性障碍ノ結果ニシテ、コハ移植部位ノ異ナルニヨリ又腫瘍發育ノ強弱ニヨリ異ナレル結果ヲ生ズルモ凡ソ次ノ如ク細分シ得可シ。

(a)腫瘍移植ノ爲「エムブリオ」ノ死ヲ來スコトアリ。コハ移植ニ際シ直接ニ「エムブリオ」ノ一部ヲ障碍シ其生存ニ必要ナル臟器ヲ損傷スル場合ヲ除キ移植腫瘍ガ漸次發育スル爲ニ生ズル危害アリ。卽腫瘍ガ發育シテ「エムブリオ」ノ生存ニ必要ナル臟器ヲ侵掠スルコトアリ。移植腫瘍ガ漸次周邊組織就中大血管ヲ壓迫シテ「エムブリオ」ヲ死ニ致スコトアリ。コハ殊ニ屢〻臍部ニ腫瘍ノ移植セラレタル時之レヲ認メ得。或ハ卵膜ニ生ジタル腫瘍ノ爲「エムブリオ」ハ異常固定ノ位置ヲ取リテ死スルコトアリ。破殼ニ際シ「エムブリオ」ハ移植腫瘍ノ爲卵膜ニ癒著セラレテ之レヨリ分離シ得ザルカ或ハ分離シ得タル時ニモ大出血ヲ來シテ死スルコトアリ。

ム。尙此反應ハ被移植腫瘍細胞ノ退行性變化ニ陷ル程度及其數量ノ異ナルニヨリテ影響ヲ受クルコト大ナリ。

四

余等ノ移植方法ニテハ腫瘍ハ多ク卵膜ニ生ジ「エムブリオ」ニ移植セラレタルモノ稀ナリ。サレバ移植部位ハ之レヲ卵膜ニ生ジタルモノト「エムブリオ」ニ生ゼシモノトニ大別シ、之レヲ更ラニ左記ノ如ク細分シ得可シ。而シテ此等移植部位ハ孵化時期ノ異ナルニヨリテ差異ヲ生ジ、又一定部ニ移植セラレタル腫瘍ハ孵化時期ノ進ムニ從ヒテ、移植部ニ移動ヲ來スコトアリ。

第一種、卵膜ニ移植セラレテ「エムブリオ」ニ及バザル腫瘍

a 漿膜ニ移植セラレタルモノ及羊膜ニ移植セラレタルモノ

b 漿膜及羊膜ニ亙リテ生ジタルモノ

c 漿膜羊膜ニ生ジ且尿膜嚢ノ遊離端ニ生ジタルモノ

d 漿尿膜ニ生ジタルモノ

e 尿羊膜ニ生ジタルモノ

f 漿尿膜ト尿羊膜トニ亙リテ生ジタルモノ

g 尿羊膜ト卵黄嚢移行部ニ生ジタルモノ

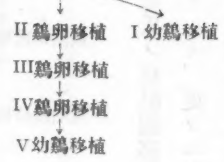
h 尿羊膜ト卵黄嚢移行部ニ生ジ且此部ニ於テ漿尿膜ト癒著セルモノ

i 漿尿膜ト尿膜内葉及卵黄嚢ニ亙リテ生ジタルモノ

從ヒ、移植力不良トナルコト多シ。大黒鼠肉腫ノ移植能率ハ成熟鼠間ニテモ時ニヨリテ大差アリ、鳥類「エムブリオ」ニテモ略ゝ同様ナル成績ヲ示セリ。甘日鼠癌腫ノ鳥卵移植ハ陰性ノモノ多ク、假令陽性ナルモノモ其發育甚微弱ナリ。

此等鳥卵ニ移植陽性ナル各種鳥類及哺乳類腫瘍ハ鳥類「エムブリオ」ニ移植セラレテ少ナクトモ當初一乃至二世代間ハ同種成熟動物移植ニ於ケルガ如キ旺盛ナル發育ヲ呈ス。然レドモ之レガ總括的記載ヲ行フ迄ニハ尚研究ノ續行ヲ要スルヲ以テ、茲ニ二三主要ナル所見ニ就キテ個々敍述ス可シ。

鷄粘液肉腫第一種。發育不良ナル腫瘍ニ就キテA表ノ如キ移植ヲ行ヘリ。



本腫瘍ハI幼鷄ニ移植スルモ發育不良ナルモノ多ク、IIIIIIVノ如ク鷄「エムブリオ」ヨリ鷄「エムブリオ」ヘ移植スルコト三代ニ及ビ又之レヲV幼鷄ニ移植セシモ依然トシテ發育不良ナル腫瘍ヲ出スコト多カリキ。

發育良好ナル腫瘍系ニ就キテ次ノ實驗ヲ行ヘリ。

(b)移植腫瘍ノ爲「エムブリオ」ハ死セズシテ破殻後幼鳥トナリ、此幼鳥ニ腫瘍ノ移植セラレタルモノアリ。卽「エムブリオ」ニ直接腫瘍ガ移植セラレタル場合及此部ニ同時ニ卵膜ノ癒合アリトモ「エムブリオ」ガ卵膜ヨリ分離シ得ル時ハ孰レモ移植部ニ腫瘍ノ存在セル幼鳥ヲ生ズ。其他腑部卵膜ニ移植セラレタル腫瘍及卵黄嚢ニ移植セラレ、卵黄嚢ト他卵膜トノ癒著ガ剝離シ得ラル、時ニハ腫瘍ガ腹壁或ハ腹腔中ニ移植セラレタル幼鳥ヲ生ズ。

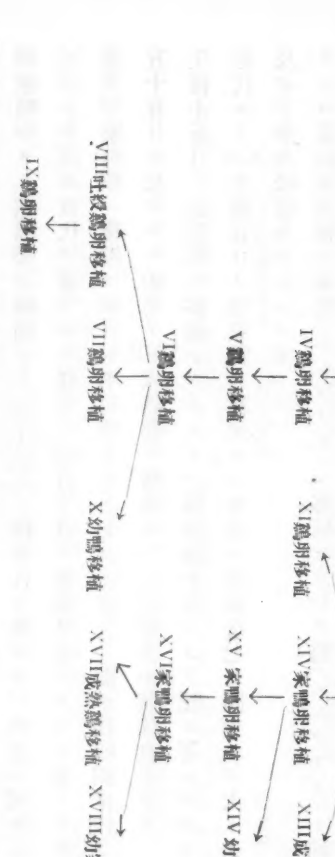
(c)腫瘍ガ卵内ニ發育セルニ拘ラズ毫モ腫瘍ノ移植セラレザル幼鳥ヲ生ズル場合多シ。卽腫瘍ガ漿尿膜及尿羊膜ニ生ジ居レル時、或ハ孵化初期ニ卵黄嚢ニ移植セラルヽトモ孵化末期ニ及ビテ卵黄嚢ト無關係トナルモノ之レナリコハ破殻ニ際シ此等卵膜ノ大部分ハ卵殻ト共ニ殘留シ、「エムブリオ」ト無關係トナルニ至ルヲ以テナリ。此他孵化後期ニ於テモ卵黄嚢ニ存シ、或ハ「エムブリオ」ニ生ジテ卵膜ニ癒著セル腫瘍ガ破殻ニ際シ、卵膜ガ「エムブリオ」ヨリ剝離スル時、幸ニシテ腫瘍組織ノ全部ガ卵膜ニ殘留シ「エムブリオ」ト無關係トナルコト、又之レアル可シ。

五

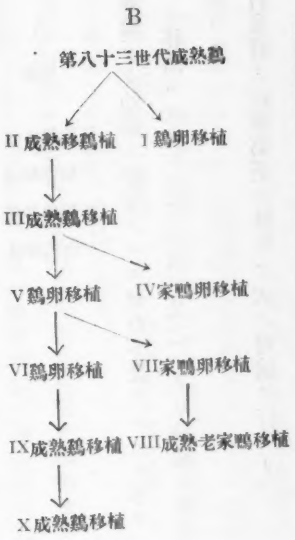
以上余等ガ實驗ニ使用シタル各種動物腫瘍ノ移植能率ハ鷄粘液肉腫第一種及第二種ガ最大ニシテ各種鳥類「エムブリオ」ニ於テ殆ンド一〇〇%ニ近ク陽性ナリ。鷄軟骨腫之レニ次ギ大多數ニ於テ移植陽性ノ成績ヲ示セリ。成熟鷄ニ於テモ移植能率ノ大ナラザル鷄纖維腫ハ各種鳥卵ニテモ往々陰性ノ移植成績ヲ示セリ。而テ此等鷄腫瘍ハ鷄「エムブリオ」ヨリ鷄「エムブリオ」ニ移植スル時ニモ移植能率ニ大差無キコト多ケレドモ、異種族タル家鴨「エムブリオ」ヨリ家鴨「エムブリオ」ヘ移植シテ世代ヲ重ヌルニ

腫瘍ノ性質ガ如何ニ變化スルヤヲ研究シタリ。余等ハ先ヅC表ノ如ク成熟鷄ヨリ腫瘍ノ一片ヲ取リ、之レヲI吐綬鷄卵II鷄卵及III家鴨卵ニ移植シテ孰レモ佳良ナル發育ヲ營ムコトヲ知レリ。

C



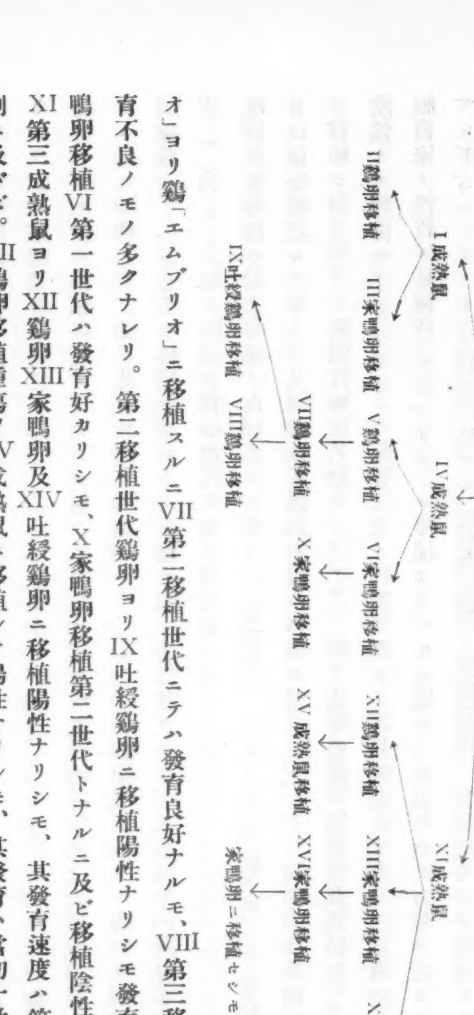
II鷄卵ニ移植セラレタル腫瘍ヲ更ラニ五世代(III IV V VI VII)ニ亙リテ鷄卵ニ移植セシニ毎常良好ナル發育ヲ呈シ、其增大速度ハ第一移植世代ノ鷄卵ト大差無シ。鷄卵移植第四世代ヨリVII吐綬鷄卵ニ移植シタル腫瘍モ發育佳良ナリ。之レヲ再ビ鷄卵ニ移植シ又發育良好ナル腫瘍ヲ得タリ。然レドモ鷄卵內ニ



即藤浪、加藤氏ノ成熟鶏移植第八十三世代ノ腫瘍ヨリI鶏卵移植ヲ行ヒシニ既ニ旺盛ナル發育ヲ呈セルモノ多カリシモ、更ラニ本腫瘍ノ他ノ小片ヲII及III成熟鶏ニ移植スルニ及ビ發育甚佳良トナレリ。之レヲV鶏卵ニ移植スルモ亦之レヲIV家鴨卵ニ移植スルモ強大ナル發育ヲ呈セルモノ多シ。鶏「エムブリオ」ヨリ再ビVII家鴨「エムブリオ」ニ移植シテ發育良好ナル腫瘍ヲ得タリ。家鴨「エムブリオ」ヨリVIII老成家鴨ニ移植スルモ腫瘍ノ發育ヲ見ザレドモ、鶏「エムブリオ」ヨリIX X成熟鶏ニ移植セラレシ腫瘍ハ發育良好ナリキ。

サレバ成熟鶏移植ニ於テ粘液肉腫ノ發育不良ナルモノハ之レヲ「エムブリオ」ニ移植スルモ、又「エムブリオ」ヨリ成熟鶏ニ移植スルモ概シテ發育不良ナル腫瘍ヲ出ス。反之成熟鶏ニ於テ發育ノ佳良ナル腫瘍ハ之レヲ「エムブリオ」ニ移植シ、又之レヲ成熟鶏ニ移植スルモ概シテ發育良好ナル腫瘍ヲ生ズ。

鶏粘液肉腫第二種。本腫瘍ノ發育良好ナルモノヲ選ビ、之レヲ「エムブリオ」ニ移植シテ世代ヲ重子、



オ」ヨリ鶏「エムブリオ」ニ移植スルニVII第二移植世代ニテハ發育良好ナルモ、VIII第三移植世代ニテハ發育不良ノモノ多クナレリ。第二移植世代鶏卵ヨリIX吐綬鶏卵ニ移植陽性ナリシモ發育旺盛ナラズ又家鴨卵移植VI第一世代ハ發育好カリシモ、X家鴨卵移植第二世代トナルニ及ビ移植陰性ナル者多カリキ。XI第三成熟鼠ヨリXII鶏卵XIII家鴨卵及XIV吐綬鶏卵ニ移植陽性ナリシモ、其發育速度ハ第二成熟鼠ノ移植例ニ及バズ。XII鶏卵移植腫瘍ヲXV成熟鼠ニ移植シテ陽性ナリシモ、其發育ハ當初十數日間ハ極メテ緩徐ナリキ。家鴨卵ヨリXVI家鴨卵ニ移植シテ發育佳良ノ腫瘍ヲ得タリ。然レドモ第三世代家鴨卵移植ハ腐敗ノ爲其結果ヲ審ラカニシ得ザリキ。

從テ異種族鳥卵ニ移植セラレテ世代ヲ重ヌル爲其發育ノ緩徐トナルコトハ大黒鼠肉腫ニ於テ鶏粘液肉

テ四世代ヲ經タル腫瘍ヲX生後十五日ノ幼家鴨ニ移植セシモ、殆ンド發育スルコト無カリキ。III家鴨卵ニ移植シタル腫瘍ハ其第一移植世代ヨリXI鶏卵ニ移植セシニ發育良好ナリキ。又VII生後二十日ノ幼家鴨ニ移植セシモ僅カニ發育セシノミナリ。然レドモXIII成熟鶏移植ニテハ良好ナル發育ヲ呈ス尚家鴨卵ヨリ家鴨卵ニ移植シテ（III XIV XV XVI）四世代ニ及ベリ。注意ス可キハ鶏粘液肉腫ガ家鴨卵ニ移植セラレテ漸次世代ヲ重ヌルニ從ヒ、發育不良ノ腫瘍ヲ生ズルコト多クナリ、遂ニハXVI第四世代ニテハ更ラニ家鴨卵ニ移植スルコト不可能トナリシコトナリ。而テ移植四世代ヲ重子家鴨卵内ニ在リシコト五十五日ニ及ビタル腫瘍ヲXVII成熟鶏ニ移植セシニ其發育ノ狀佳良ナラズ。然レドモ同樣ノ腫瘍片ヲXVIII生後十五日ノ幼家鴨ニ移植シタルモノハ移植後十日ニシテ既ニ著シク小トナレリ。尚家鴨卵移植第二世代ヨリXIX生後五日ノ幼家鴨ニ移植セシ腫瘍ハ移植後七日間少シク大トナリシモ、一〇乃至二〇日ニ及ビテ漸次吸收セラル、ニ至レリ。

サレバ鶏粘液肉腫ハ家鴨「エムブリオ」ニ移植セラレテ鶏「エムブリオ」ト同樣ナル良好ノ發育ヲ營メドモ、家鴨「エムブリオ」相互間ニ移植世代ヲ重ヌルニ從ヒテ發育力漸次減少スルモノ、如シ。然レドモコハ今後尚多數例ニ就キテ研究スルヲ要ス。

鶏軟骨腫及鶏纖維腫ニ就キテ余等ノ研究ハ尚未ダ移植世代ヲ重ヌルニ至ラズ。

大黒鼠肉腫ニ就キテ余等ハD表ノ如キ移植研究ヲ行ヘリ。

I第一成熟鼠ヨリ得タル腫瘍ハII鶏卵及家鴨卵ニ移植セラル、モ發育極メテ不良ニシテ移植成績多クハ陰性ニ終レリ。IV第二成熟鼠ノ腫瘍ハV鶏卵及VI家鴨卵ニ移植セラレテ發育良好ナリ。鶏「エムブリ

種族腫瘍モ「エムブリオ」ヲ使用スル時ハ移植可能トナル。

余等ハ一種ノ原始細胞卽動物ノ卵子ト精蟲トニ於テ既ニ一定度迄種族的差異ノ存在セルコトヲ疑フモノニ非ラズ。是レ血族的關係ノ遠キ二種族ニ於ケル生殖細胞ハ受胎シテ新生固體ヲ生ズルコト無クレバナリ。然レドモ生殖細胞ノ受胎ニヨリテ生ジタル新生物ハ分化ノ度尙未ダ進マザル「エムブリオ」ノ時期ニハ異種族細胞ヲ包容スル性質ニ富ミ、異種族腫瘍ヲシテ恰モ同種族腫瘍細胞ノ如キ態度ヲ以テ發育セシム。而テ「エムブリオ」ニ於ケル分化漸ク進ムニ從ヒ細胞ハ漸次特異性ヲ有スルコト强クナリ、遂ニ成熟動物トナルニ至レバ種族特異性ハ儼然トシテ存在スルニ至ル。

余等ハ上記腫瘍免疫ニ關スル假說ヲ確定センガ爲ニハ、更ラニ多數ノ腫瘍ニ就キテ深ク研究スル必要アリ。然レドモ今日迄鷄粘液肉腫ト家鴨トノ關係ニ就キテ知リ得タル結果ヲ述ベンニ、破殼後數日ノ幼家鴨ニテハ粘液肉腫ハ移植後數日間ハ發育シテ約二倍大トナルモノアリ。然レドモ爾後漸次退縮スルニ至ル。破殼後二十乃至三十日ノ幼家鴨ニテハ腫瘍免疫現象漸ク强ク、此時期以後ニ移植セラレタル粘液肉腫ハ著シキ發育ヲ營マズシテ、機化吸收セラル。

斯クノ如ク異種族腫瘍ニ對シ「エムブリオ」ノ免疫性ノ微弱ナルヲ利用シ、余等ハ「種ノ適合」ナル法則ヲ利用シ、一定腫瘍ヲ異種族動物ノ腫瘍タラシメント試ミタリ。是レ前章記述セシ如ク、「エムブリオ」ニ移植セラレタル被移植腫瘍片ノ細胞ノ大部分ハ退行性變化ニ陷リ、唯一部ノ細胞ノミ「エムブリオ」ヨリ榮養素ノ供給ヲ受ケテ分割發育シタルモノニシテ、二代以上異種族「エムブリオ」ニ於テ移植世代ヲ重ヌタル腫瘍細胞ノ大分部分乃至全部ハ異種族「エムブリオ」ナル異常ノ境遇ノ下ニ發育セシモノナ

腫ヨリモ著明ナリ。是レ鳥類ト大黒鼠トノ血族的關係ハ鷄ト家鴨ヨリモ更ラニ遠隔セルガ爲ナラン。

六

以上記述セシ處ニヨリテ明ラカナル如ク、鷄ニ原發シテ成熟鷄ニ移植セラレ、然モ成熟家鴨ニ移植セラレザル各種鷄腫瘍ハ鷄「エムブリオ」ニ移植セラレテ成熟鷄ニ於ケルガ如ク良好ナル發育ヲ遂グルノミナラズ、家鴨及吐綬鷄「エムブリオ」ニ移植セラレテ鷄「エムブリオ」ニ於ケルガ如キ良好ナル發育ヲ呈ス。コハ曾ニ鳥類腫瘍ノミナラズ更ラニ血緣ノ遠キ哺乳動物腫瘍例之大黒鼠肉腫ガ鳥卵ニ移植セラルヽ時モ同樣ナリ。而テ此等腫瘍ハ異種族「エムブリオ」ニ移植セラレタル時ニモ同種族ノ成熟動物及同種族「エムブリオ」ニ移植セラレタル腫瘍ト同一ノ性狀ヲ有シ、其組織學的所見亦同一ニシテ、異種族「エムブリオ」間ニ腫瘍ノ移植世代ヲ重子得可シ。

唯同種動物間ニ於テ移植ノ良好ナルニ拘ラズ、異種族「エムブリオ」ニ於テ殆ンド發育セザル腫瘍アリ、甘口鼠癌腫之レニ屬ス。又同種族成熟動物間ニ移植シ得ラレズシテ、同種族及異種族「エムブリオ」ニモ移植シ得ラレザル鷄腺性腫瘍ノ如キモノアリ。而テ此等腫瘍ガ同種族及異種族「エムブリオ」ニ移植陰性ナル理由ハ「エムブリオ」ガ此等二三ノ腫瘍ニ對シテ特異性免疫ヲ有スト思考スルヨリモ、腫瘍細胞自家ノ性質ガ異種族「エムブリオ」ニ移植セラザルニ適セリト思考スル方眞ニ近カキガ如シ。

サレド「フィロゲニー」ノ範圍ニ於ケル成熟動物間ノ腫瘍移植ハ其範圍著シク狹小ニシテ、假令二三ノ例外アリトシテモ同種族或ハ血緣ノ近カキ動物間ニ一定腫瘍ノ移植ガ可能ナルニ拘ラズ、「オントゲニー」ニ屬セル「エムブリオ」ニ於テハ腫瘍ノ移植性著シク廣ク、成熟動物間ニ於テ移植全然不可能ナル異

リ。而テ生物學者ノ云フ處ノ「種ノ適應」ガ生物界進化ノ法則タル以上、一定ノ腫瘍細胞ハ必シモ自家ノ原始細胞タル生殖細胞ニ復歸スルコト無クトモ、單ニ移植世代ヲ代ユルコトニヨリテ異種族動物體内ニ適合スルコト無シト限ラザレバナリ。

サレド此研究ハ多大ノ材料ト長年月トヲ要シ、余等ガ今日迄此方面ニ擧ゲ得タル所見ハ陰性ニ近カキヲ遺憾トス。卽鷄粘液肉腫ハ鷄「エムブリオ」ニ移植セラレテ世代ヲ重ヌルニ從ヒ又大黒鼠肉腫ハ鷄及家鴨「エムブリオ」ニ移植セラレテ世代ヲ經ルニ從ヒ漸次發育微弱トナレリ。又此等異種族鳥卵ニ移植セラレタル腫瘍ヲ此鳥卵ト同種族ナル成熟鳥ニ移植スルモ特ニ旺盛ナル發育ヲ營マズ。然レドモ如上ノ所見ヨリ直ニ「種ノ適應」ガ異種族腫瘍細胞ニ行ハレ得ズト斷定スルハ早計ニ失ス。是レ異常境遇ニ適合スルモノハ常ニ種族ノ一部固體ニシテ、生活力ノ旺盛ナルモノニ就キテ「種ノ選擇」ヲ行フ必要アレバナリ。サレバ余等ハ更ラニ廣キ範圍ニ就キ方法ヲ改良シテ研究ヲ續行スル必要アリ。

（大正五年三月中完脫稿）

圖解

第一圖　鷄粘液肉腫第一種鷄「エムブリオ」移植第四十號。
孵化第六日移植、移植後第八日檢。
肉腫ハ「エムブリオ」ノ背部ニ生ジ此部ニ於テ羊膜及尿膜ト癒著セリ。

第二圖　鷄粘液肉腫第一種家鴨「エムブリオ」移植第五號。
孵化第六日移植、移植後第十三日檢。
肉腫ハ「エムブリオ」ノ頸部ニ移植セラレタリ。

第三圖　鷄粘液肉腫第一腫鷄「エムブリオ」移植第四十號。
移植後八日。
兩極性增殖ヲ示シ、腫瘍細胞ハ卵膜及「エムブリオ」ノ背部ニ侵入セリ。

第四圖　鷄粘液肉腫第一種鷄卵膜移植第二十四號。
移植後十八時間ニ於ケル尿羊膜ト腫瘍トノ融合。

第五圖　鷄粘液肉腫第二腫鷄「エムブリオ」移植第二十七號。
孵化第七日移植、移植後第十一日檢。

Tafel I.

第一表　清野、川上論文附圖

Fig. 1.

第一圖

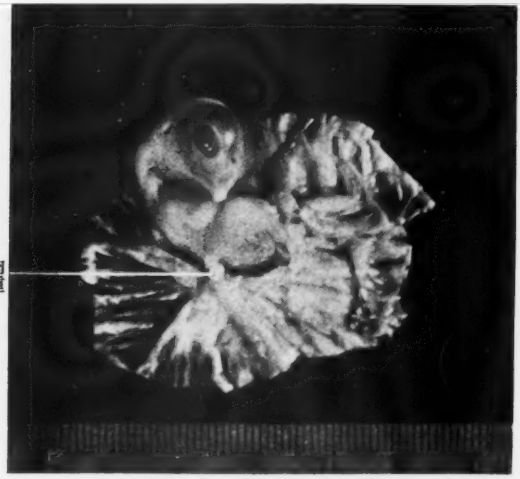
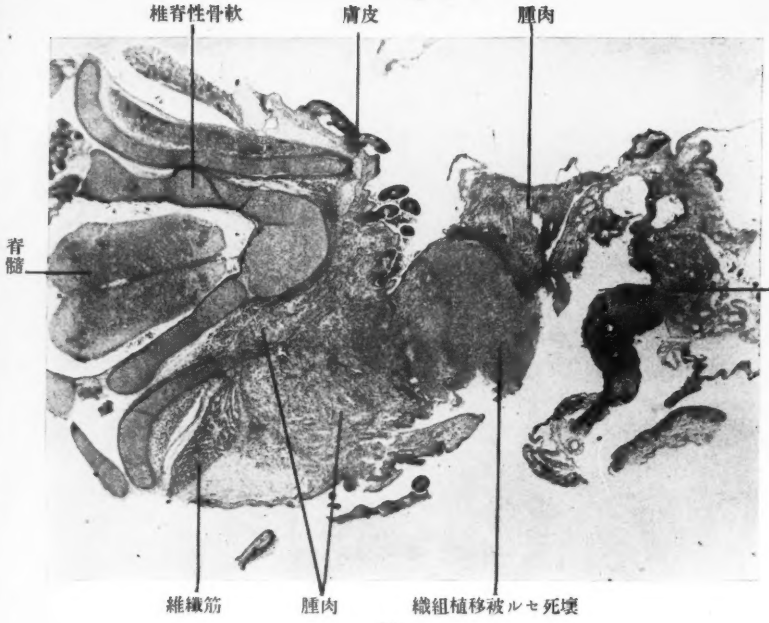


Fig. 2.

第二圖

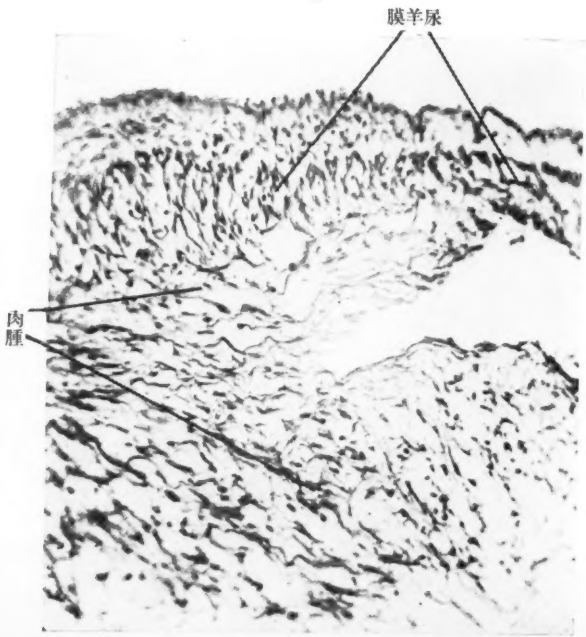
Kiyono u. Kawakami: Geschwulsttransplantation in Vogelembryo.

Fig. 3.



第三圖

Fig. 4.



第四圖

Kiyono u. Kawakami: Geschwnlsttransplantation in Vogelembryo.

第二表　清野、川上論文附圖

Tafel III.

第三表　清野、川上論文附圖

Fig. 5.

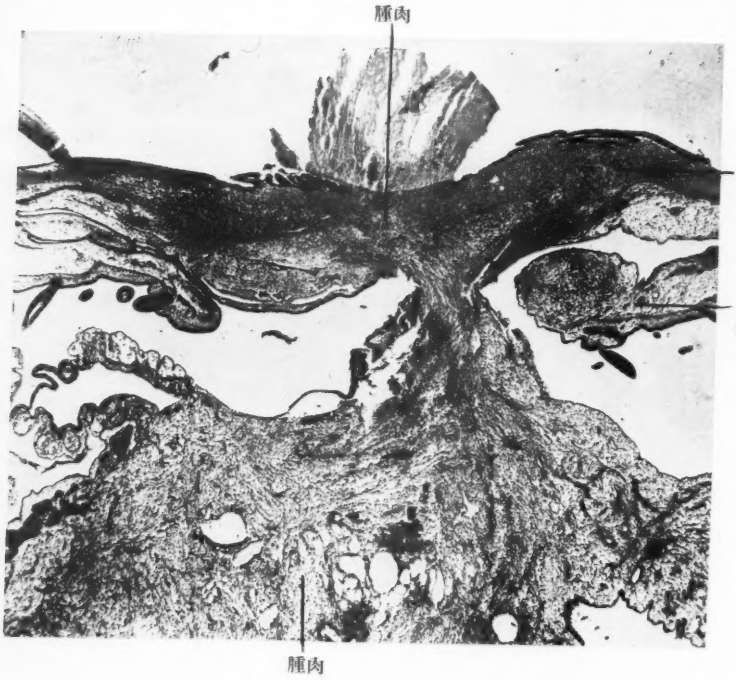
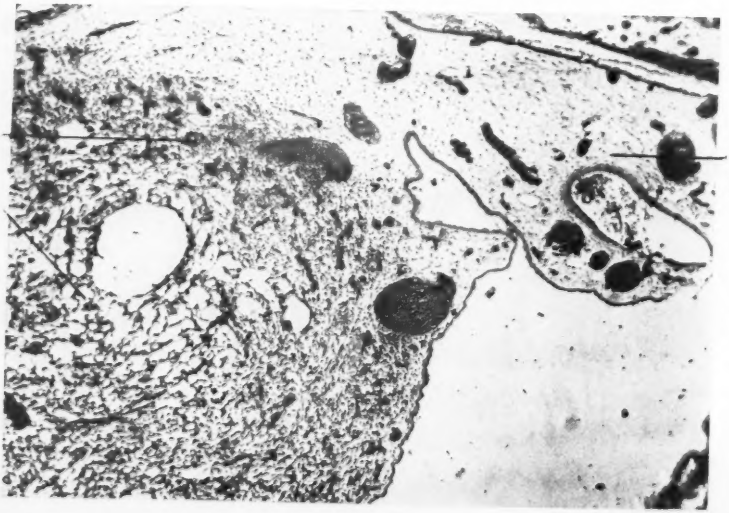


Fig. 6.



Kiyono u. Kawakami: Geschwulsttransplantation in Vogelembryo.

腫瘍ハ羣膜及眼瞼内ニ蔓延シ卵膜ハ腫瘍ニヨリテ羣膜ト癒著セリ。

第六圖　大黒鼠肉腫家鴨卵膜移植第六號。

移植後十日。

附圖寫眞版ハ凡テ菊池武熊氏ノ撮影ニ係レリ記シテ感謝ノ意ヲ表ス。

◎前號（第十年第一冊）所載高橋論文（腫瘍轉移ニ關スル實驗的研究）中正誤

	正	誤
四九頁　十行	不明ニ屬スル	不明ニ附スル
五二頁　第一表癌腫ノ内下段ヨリ四行	繊維性肉腫	繊維性肉腫
五二頁　第一表癌腫ノ内	胞巣癌	癌巣胞
五四頁　第二表ノ内中等度ノ下	緩漫	緩慢
五四頁　十二行	卽一般ニ之ヲ曰ハバ	卽一般ニ之ヲ曰ハズ
同　十四行	肺臟毛細管内	肺臟毛細管内
五五頁　七行	皮下移植後轉	皮下移植轉
五六頁　十行	一週ノ間毎日數匹宛	一週ノ間毎數匹宛
六一頁　七行	卽チ玆ニ於テ余ハ余ガ	卽チ玆ニ於テ餘リ余ガ
六六頁　附圖説明　第四圖ノ内四行	空胞形成ヲ呈シ	腔胞形成ヲ呈シ

○鰐鳥卵内ニ於ケル腫瘍移植ノ實驗的研究（清野，川上）

移植腫瘍ノ性狀ハ「エムブリオ」ニ移植セラレタルモノモ、成熟動物ニ移植セラレタルモノト大體ニ於テ異ナル處無シ而テ移植後新生腫瘍ノ主成分タルモノハ被移植腫瘍片ノ細胞就中其周邊部ニ位セル榮養良好ナル細胞ナリ、移植弱陽性ナル甘口鼠癌腫及陰性ナル鷄腺性腫瘍ニテハ腫瘍細胞ノ發育極メテ微弱ナルカ或ハ全然之ヲ缺キ被移植腫瘍細胞ハ漸次退行性變化ニ陷リ周邊母組織細胞ニヨリ機化吸收セラル而テ母組織細胞ノ反應ハ移植陽性腫瘍ヨリモ移植陰性腫瘍ニ强キモ之ヲ直ニ腫瘍免疫ノ本態ト見ルコト能ハズ之レ母組織反應ハ一定度迄腫瘍ノ增殖ヲ良好ナラシム

孵化初期(第四—九日)ニ移植セシ腫瘍ハ多ク卵膜ニ生ジ「エムブリオ」ニ生ズルコト稀ナリ、著者等ハ移植部位ヲ種々細分シ腫瘍ノ運命ニ就キテ論ジタリ而テ腫瘍移植後「エムブリオ」ハ(a)死亡スルコトアリ(b)破殼後幼鳥トナリ此幼鳥ニ腫瘍ノ移植セラルヽモノアリ(c)幼鳥ヲ生ゼルモ腫瘍ハ卵膜ト共ニ卵殼ニ殘留シ幼鳥ニ腫瘍ノ移植ヲ見ザルコトアリ

上記移植陽性ナル四種ノ鷄腫瘍及大黑鼠肉腫ハ各種鳥類「エムブリオ」ニ移植セラレテ發育スル速度ハ成熟動物移植ニ於ケルト略〻相同ジク又各鳥卵ヨリ各種鳥卵ニ腫瘍ヲ移植シテ世代ヲ重ヌ得可シ如斯異種族成熟動物間ニ移植シ得ラレザル腫瘍モ「エムブリオ」ヲ使用スル時ハ異種族動物ニ移植シ得ルヲ以テ、著者等ハ腫瘍免疫ハ動物ノ「オントゲニー」ノ進ムト共ニ進化發達スルモノナリトシ一假說ヲ樹立シテ之ガ說明ヲ試ミタリ

尙著者等ハ「種ノ適應」ナル法則ニヨリ「エムブリオ」ノ腫瘍免疫性ガ微弱ナルコトヲ利用シ「エムブリオ」移植ニヨリテ腫瘍ヲ異種族動物ノ腫瘍ニ變化セシメント試ミタリ然レドモ此研究ハ未ダ完結スルニ至ラズ

(自抄)

學會演說

第八回癌研究會學術集談會抄錄

第一　孵化鳥卵内ニ於ケル動物腫瘍ノ移植實驗（第一報告）

京都醫科大學病理學教室
醫學博士　清野謙次君
醫學士　川上漸君

著者等ハ次ノ各種動物腫瘍ヲ諸種鳥卵内ニ移植シテ下記ノ如キ成績ヲ得タリ

腫瘍ノ種類	成熟動物移植	鶏「エムブリオ」移植
鶏粘液肉腫第一種	鶏ニ陽性	陽性
同　第二種	同上	陽性
鶏軟骨腫	同上	陽性
鶏纖維腫	同上	陽性
鶏腺性腫瘍	鶏ニ陰性	陰性
甘口鼠癌腫	甘口鼠ニ陽性	弱陽性
大黒鼠肉腫	大黒鼠ニ陽性	陽性

腫瘍ノ種類	家鴨「エムブリオ」移植	吐綬鶏「エムブリオ」移植
鶏粘液肉腫第一種	陽性	陽性
同　第二種	陽性	陽性
鶏軟骨腫	陽性	陽性
鶏纖維腫	陽性	陽性
鶏腺性腫瘍	陰性	試ミズ
甘日鼠癌腫	弱陽性	試ミズ
大黒鼠肉腫	陽性	陽性

無精卵及不熟卵内ニ移植スル𠮟腫瘍ハ發育セズ又「エムブリオ」ニ移植セラレタル腫瘍ガ増殖スル爲ニハ胎胚組織ノ一部ニ連絡スルヲ要シ「エムブリオ」ノ死滅スル時ニハ腫瘍ノ發育停止ス。從テ孵化鳥卵内ニ於ケル腫瘍移植ハ「エムブリオ」及卵膜（廣義ニ於ケル「エムブリオ」）ニ對スル腫瘍ノ移植ナリ

一寸申上ゲタイコトハ清野博士ノ御實驗ニヨルト家鷄肉腫ノ孵化鳥卵内移植ノ場合ニ其腫瘍ノ增大ハ單ニ肉腫細胞ノ增殖ノミニヨルト云フコトハ私共ニ取ツテハ前ニ申上ゲタ樣ナ疑ヲ一層深カラシムルモノデアリマシテ肉腫細胞以外ニ結締織細胞ヲ刺戟シテ腫瘍化セシムル一種不明ノ物質ガアレバ斯樣ナ場合デモ幾分カ其レガ現ハレテモヨカラウト思ハレルノデアリマス（自抄）

二

村田宮吉君

清野博士及川上學士等ノ熱心周到ナル實驗竝ビニ之レヲマルフヒー等ノ研究成績ニ徵スルニ異種動物ノ腫瘍ト雖モ其ノ胎生時ニ於テハ之レヲ移植シ得ルノ可能ナルハ動カス可カラザル事實トナレリ其等ノ成績ニヨレバ從來生理的組織乃至腫瘍組織ノ移植ニ於テ、又血清學的研究ニヨリテ得タル事實ト牴觸シ種ノ特種性ナル者ノ威嚴ハ一部動搖ヲ來セルニアラザルカヲ思ハシム清野博士等モ此事實ヲ以テ胎生組織ノ間ニ於テハ種々ナル者ノ特種性未ダ確立セザルガ爲メナル可シトノ假定說ヲ陳述セラレタリ然レドモ亦退イテ之レヲ觀察スレバ必ズシモ然ラザルヲ覺ユ卽チ鷄卵ナル者ハ血清學上著明ニ他動物ノ卵ト相違ヲ有シ異種動物ノ精蟲竝ビニ卵ノ間ニ受精作用ノ行ハザルニ見異種ナル動物ノ卵ナル者ニ於テ已ニ當然タル差異アルコト明ナリ個體發生ノ出發點タル卵子ノ間ニ已ニ嚴然タル所謂種屬ノ差異ナル者ニ區別ヲ存スル以上之レヨリ發育セル胎生組織ヲ以テ尙其差別明ナラズトナスハ一種ノ矛盾タルヲ免レズ

唯種ノ異ナルテウ事實ハ玆ニ一個ノ原因ヲ生ジ此ノ原因ノ存在スルト否ニヨリテ異種動物間ノ腫瘍ト雖モ或ハ移植シ得可ク或ハ移植シ難キ結果ヲ生ズ可シエールリッヒハ其ノ原因ヲX成分ノ存在スルト否トニ歸セシメタリエ氏ノ「アトレプチッシェイムムニテート」說卽チ之レナリ然レドモ清野博

演說第一ニ對スル附議

緒方知三郎君

清野博士ノ孵化鳥卵内ニ於ケル動物腫瘍ノ移植實驗ニ關スル御報告ヲ非常ナル興味ヲ以テ拜聽致シマシタ、私ハ石橋君ト共ニ家鷄肉腫ノ本態ヲ究メル爲メニ色々ト苦心致シテ居リマス殊ニ家鷄肉腫組織ヲ乾燥シタリ「グリセリン」ニ浸漬シタリシタモノヲ移植シタ場合ニ其移植シタ肉腫組織中ニハ生活シテ居ル增殖力ヲ幾分デモ保ッテ居ル腫瘍細胞ガ全ク無クナッテ居ッテ只其肉腫組織ノ中ニハ其周圍ニアル結締織細胞ヲ刺戟シテ之レヲ腫瘍化セシムル一種不明ノ物質ガアル爲メニ同種ノ腫瘍ガ新シク發生スルノダト說明セラレ、其事實ヲ組織像ノ上デ證明セラレテ居ルノニ對シテ私共ハマダ疑ヒヲ有ッテ居リマス、其レハ斯樣ナ肉腫組織ヲ移植スルト其周圍ニハ極メテ盛ンニ肉芽組織ガ出來マシテ實際此肉芽組織ガ腫瘍化スルノカ又ハ移植シタ肉腫組織ノ一部カラ腫瘍ガ出來ルノカ區別ガ困難デアルカラデ有リマス其レデ此場合ノ肉芽組織ト腫瘍ノ發生トノ關係ニハ未ダ研究スル餘地ガアルト考ヘマス、只今承リマシタ處ニヨリマスト孵化鳥卵内ニ新鮮ナ肉腫組織ヲ移植シタ場合ニハ其周圍ニ於ケル反應ガ極メテ微弱デ腫瘍細胞自身ノ增殖ニヨリテ腫瘍ノ大キクナッテ行クコトガ明カニワカルト云フコトデ有リマス丁度我々ガ行ッテ見タ體外培養法ニヨル場合ノ樣ニ腫瘍細胞自身ノ增殖ガ其ノ主ナモノデアルコトガ此方法ニヨルト明瞭ニ證明シ得ルモノデアレバ此方法ヲ乾燥シタモノヤ、「グリセリン」ニ漬ケタルモノニモ應用シテ見レバ腫瘍發生ノ關係ハ一層明カニナルデアラウト思ハレマス私共ハ是非共清野博士ニ御敎ヘヲ願ッテ實驗致シタイノデ有リマス

(二) 速水氏法ト異ナリ準備ニ手數ヲ要セズ且ツ少シノ熟練ナクトモ簡單ニ行ヒ得ルコト

(三) コノ裝置ノ最モ特長トスル處ハ培養中ニ於テ組織ニ何等危險ヲ與ヘズシテ其周圍ノ氣體「メヂーム」ヲ變更セメシ得且ツ速水氏法ノ如キ濕度ヲ保ツ爲メ含水脫脂綿ヲ置クノ要ナク唯蒸餾水ヲ硝子房ニ注入シ置ケバ足レリ

(四) 費用ノ點ニ於テモコレハ特殊ノ硝子模型ヲ用ヒズ「インク」壺ヲ代用シ得レバ極メテ安價ニ作ルコトヲ得

二、培養基　今日一般ニ用ヒラルヽハ各動物ノ血漿ヲ根本基トナシコレニ組織抽出液ヲ加ヘ又ハ蒸餾水ヲ加ヘテ滲透壓ヲ適宜ニ變ジ或ハリンゲル氏液ヲ與ヘテ血漿ヲ稀薄トシ發育ニ便ナラシムル等ノ方法ニヨリ培養ス

斯ノ如キ培養基ニヨリ鷄孵化時期ノ組織培養ハ最モ容易ニ培養シ得ルモノニシテ心臟又ハ脾臟ノ如キ特ニ然リトス然レドモ普通動物組織特ニ腫瘍組織ハ之ヲ發育セシメ又ハ生活狀態ヲ維持セシムルニ胎生期ノ組織ニ比シ稍〻困難ノ感アリ予等ハ其兩者培養上發育ノ差異ハ血漿ノ榮養物又ハ滲透壓ノ關係以外ニ酸素物質代謝ノ差異アリテ普通動物組織ハ胎生期ノモノヨリモ多量ニ酸素供給ノ要アリ卽チ Oxydation ガ比較旺盛ナルニ因スルニアラザルカトノ假定ノ下ノ次ノ如キ處置ヲ施スニ至レリ

第一、硝子房內ノ酸素量ヲ一定法ニヨリ增加セシメタリ此場合ハ血漿其物中ノ酸素量ノ增減ノ如何ハ不明ナレトモ其方法ニヨリテ更ニ有害ヲ認メズ稍〻有利ノ結果ヲ呈セリ然シ玆ニ注意スベキハカレル氏法ノ凹載物硝子ノ場合ヨリモ一般ニ培養數%ハ余等ノ方式硝子器ヲ用ヒタル場合ニ於テ一般ニ好良ナルガ故ニ直接酸素量ヲ增加スル要ナシトスルモ硝子房ノ大ナルガ爲メニ酸素量ガ幾分カ

士等ノ證明セラレタル事實ハエ氏ノ「アトレプチッシェイムニテート」ノ存在ニ根本ノ動搖ヲ與ヘタル者ナリト云ハザル可カラズ惟フニ生物界ヲ通ジテ所謂生存競爭ノ存スルアリ其ノ一端ハ所謂生物間ノ防禦裝置トナリテ現出ス異種動物胎生時ニ腫瘍ヲ移植シ得ルハ胎生時ニハ未ダ此ノ防禦裝置ノ完成セザルト及ビ腫瘍其物ノ發育「エチルギー」ノ異常ニ强盛ナルニヨルト見ルヲ至當トハセザル可キカ敢テ一言ス　（自抄）

第二　家鷄組織（家鷄肉腫）體外培養法

東京醫科大學病理學教室
醫學博士　緒方知三郎君
醫學士　石橋松藏君

生體組織體外培養法ノ理想トスル處ハ其個體自然的發育ノ狀態ト成ベク同一ノ條約ヲ供ヘタル裝置ヲ以テナスコトナリカレル氏培養法ハ大體ニ於テ細菌培養法ノ考案ニ基ヅキタルモノナリ溫度ハ一定ノ孵卵器ヲ用フレバ自然的ノモノト殆ド同一ニ調節シ得ベキモ培養基ニ至リテハ自然的ノ狀態ニ近カラシムルコト甚ダ困難ナリ何レニシテモ人工ニテハ自然其モノト同一ノ方法ヲ行フコトハ不可能ナルヲ以テ種々ノ手術ヲ施シ自然ニ近カラシムルニアリ今余等考案ニヨル培養裝置及一二ノ培養法ニ對スル知見ヲ述ベントス

一、培養裝置（示說）　余等ノ使用シツヽアル裝置ハ廣ク用ヒラルヽカレル氏ノ方法又ハ京都速水博士ノ硝子環法ト大體ノ意義ハ同一ナレドモ種々ノ便宜ノ點ヲ有スルモノナリ

（一）カレル氏方法ト異ナリ硝子房ノ容積大ナルヲ以テ血漿滴ノ取扱ヒニ關シ載物硝子ト覆蓋硝子トヲ接觸ノ危險ヲ防グコトヲ得（コレハ速水氏法ト同價値ナリ）

驗ニ供シ次ノ如キ成績ヲ得タリ

(一)藤浪稻本種ハ其新鮮ナル組織片ヲ以テセル移植ニ於ケル移植率ハ今日ニ於テモ以前ト何等ノ相異ヲ認メ得ザルニ反シテ「グリセリン」浸漬竝ニ乾燥ニ對スル抵抗力著ルシク減退セリ

(二)腫瘍乳劑ベルケフェルド濾過液ノ注射ニヨリテ未ダ陽性成績ヲ得タルモノナシ

(三)ルース氏ノ實驗ニ基キテ同上濾過液ニ硅土末ヲ混ジタル者ヲ以テセル場合ニハ腫瘍ノ發生ヲ見タリ此等動物ハ尙ホ生活セシメ其發育經過ヲ觀察シ居リ從ツテ未ダ組織的檢査ヲ行ハザルガ故ニ原腫瘍ト其組織構造ヲ同ジクセルヤ否ヤハ知ルヲ得ザルナリ

シロコグロフ氏ハ硅土末ヲ家兎ニ注射シテ肉腫(巨大細胞肉腫)ヲ發生セシメ得タリト報告セリ、演者等ノ場合ニ於テ硅土末ガ如何ナル意味ニ於テ腫瘍ノ發生ヲ促シタルヤ演者等ハ其組織的構造ヲ檢シタル後ニ決スル所アラント欲ス

(四)演者等ハ第一報告ニ於テ肉腫乳劑ニ遠心器ヲ作用セシムル時ニハ其上層ノ透明ナル液體ヲ注射スルモ腫瘍ノ發生ヲ見ザリシニ依リテ腫瘍發生ノ原因ヲナス物質ハ容易ニ沈澱セシメ得ルモノナラント論ジタリ然ルニ濾過液ニ硅土末ヲ混ジテ腫瘍ノ發生ヲ見タルモノハ濾過液ニ遠心器ヲ作用セシメタル上層ノ部ニモ有リタリ、硅土末ガ單ニ腫瘍ノ發生ヲ容易ナラシメタルニ止マルモノトセバ腫瘍發生ノ原因ヲナス物質ハ必ズシモ容易ニ沈澱セザルヲ示セルニアラザルカ

(五)腫瘍發生期ニ於ケル組織的檢査ノ必要ナルハ藤浪敎授ノ夙ニ主張セラル、所ナリ演者等モ亦其必要ヲ認メテ研究スル所アリタリ「グリセリン」浸漬腫瘍片、乾燥腫瘍末ノ移植ヲ試ミ之レヲ組織的ニ研究セシガ前述ノ如ク腫瘍ノ抵抗力ノ減退セシ爲メカ其何レノモノニ於テモ腫瘍發生ノ像ヲ認ム

多キ爲メニ好結果ヲ得タルガ如シ

第二、赤血球ノ附加　赤血球ヲ有スル血漿即チ普通血液ニテハ組織檢査不便ナリ、然シ自然ノ血液狀態ニアラシムルニハ赤血球ノ存在ヲ要トシ又酸素ヲ供給スベキ媒介者トシテ該細胞ノ存在ガ血漿ノミヨリモ好良ナルカヲ考ヘ普通ノ血漿培養基外ニ組織ノ周圍ニ新鮮ノ赤血球ヲ附加セリ、コハ胎生組織培養ニハ何等影響ヲ見ザルモ腫瘍培養ニ際シ稍〻良ナリ、必ズシモ赤血球ヲ附加セシ際全テ陽性ヲ見ルニアラザレドモ培養ガ陽性ノ場合ニハ%數又其發育ノ程度共ニ單純血漿ノ場合ヨリ大ナリ

三、光線ノ影響　孵卵器中ニ電氣燈ヲ備ヘ白色其他赤紫青黃等ノ諸光線ヲ直接培養上ニ放射セシメ其影響ヲ注意セリ而シコレハ目下精密ナル試驗中ナルヲ以テ數量的ニ表ハスコト能ハズ唯白色ノ場合ニハ稍〻有害ノ影響ヲ見全ク暗室中ニ置キシモノヨリ發育ノ程度及ビ%不良ナリ　（自抄）

第二　家鷄肉腫ノ研究（第二報告）

東京醫科大學病理學教室
醫學博士　緒方知三郎君
醫學士　石橋松藏君

演者等ハ昨年四月本學會ニ於テ報告セシ家鷄肉腫ニ關スル研究ヲ繼續シ爾來一年間ニ行ヒシ成績ヲ述ベタリ

家鷄肉腫ノ本態ヲ究メンガ爲ニ行ヒタル數多ノ實驗ガ不成功ニ終リシ爲メ演者等ノ研究ガ著ルシキ進歩ヲ認メ得ルニ至タラザリシハ演者等ノ極メテ遺憾トスル處ナリ既ニ述ベタル家鷄肉腫組織體外培養ニ關スル研究モ本問題ヲ解決センガ爲ニ行ヒシモ未ダ完成ノ域ニ達セザリキ

演者等ハ一昨年來家鷄肉腫研究材料トシテ使用セル藤浪教授ノ惠與ニカヽル藤浪稻本種ヲ引續キ實

肉腫材料ノ移植ニヨリ或ハ其造組織細胞ト同一ナル腫瘍ヲ發生セシメ得ベキニアラズヤヲ考ヘタリ而シテ余ハ昨年來此考案ノ下ニ鷄ニ豫メ骨折ヲ起サシメ一定時日後腫瘍ノ乾燥粉末ヲ食鹽水ニ浸出シ其液ヲ注射シタリ、蓋シ骨折ノ場合ニ於テハ其治癒現像トシテ、内骨膜骨膜ノ細胞ハ盛ニ分裂增殖スルヲ常規トスルヲ以テ如斯狀態ニアルモノニ腫瘍原因體ヲ作用セシメタランニハ又腫瘍トシテ其組織細胞ガ發育增生ヲ來スナラント想像シタレバナリ、余ハ主トシテ翼骨ヲ用ヒ其左右兩側共ニ之ヲ骨折シ其一側ハ對照トシテ試驗經過ノ觀察ニ便シタリ、其概況ハ次ノ如シ

(イ)肉眼的所見　如上ノ材料ヲ注射シタルモノハ其膨大ノ度ハ其對照ニ比シテ著シク大ナリ、今一試驗例ノ約五十日ヲ經タルモノヽ大サヲ表示スルバ次ノ如シ

鷄番號	骨折部ニ注射シタル翼部ノ周圍徑	同上對照トシテ反對側ノ翼部ノ周圍徑
一號	一〇・五仙迷	四・〇仙迷
二號	一〇・〇仙迷	五・〇仙迷
三號	六・〇仙迷	僅ニ膨大
四號	一二・〇仙迷	僅ニ膨大

此表ニ由リテ之ヲ觀レバ試驗側ハ第一乃至第四號共ニ其對照側ニ比シ著シク大トナレルハ明ニ知ラレル所ナリトス

(ロ)顯微鏡的所見　他試驗例ニ於テ五十日後ニ死亡シタルモノヨリ其對照ノモノト共ニ切片標本ヲ作成シテ檢スルニ既ニ肉眼的ニ兩者其大サヲ異ニシ試驗側ノモノハ其對照ノ數倍大ナリ檢鏡スルニ既存骨質ト骨膜組織トノ間ニハ厚キ新生骨梁及新生軟骨細胞アリ而シテ其分量ハ對照ノソレニ比シ數倍セリ既存骨質ニ近キ部ニ於テハ新生骨梁多ク尙ホ遂次形成セラレル狀態ニアリ其レヨリ遠ザカルニ從テ軟骨細胞トナリ尙ホ細胞ハ幼弱トナリ骨

ルニ至タラザリキ、故ニ又新鮮ナル肉腫組織片ヲ羽二重ニ包ミ（一重及三重）前後二回十羽ノ家鶏ノ皮下ニ多數ニ移植シテ三週乃至五週ノ後ニ之ヲ組織的ニ檢セシモ同ジク腫瘍ノ發生ヲ認ムルヲ得ザリシナリ

演者等ハ今後尚同樣ナル試驗ヲ重ヌテ研究ス可シ

（一八）演者等ハ從來行ハレタルガ如キ濾過「グリセリン」浸漬乾燥試驗竝ニ組織的檢査法ノ如キ研究方法ノミニヨリテ本問題ノ解決容易ナラザルヲ知リ、各方面ニ向ツテ新シキ檢査法ヲ試ミツヽアリ其多クハ陰性成績ヲ得タルモ一二ノ者ニハ今後研究ノ餘地アルヲ認メ得タリ　（自抄）

第四　移植シ得可キ鶏腫瘍（武藤系）ニ就テ（第二報告）

愛知醫學專門學校病理學教室
武藤昌知君

本年玆ニ第二報告トシテ述ベントスル要旨ハ武藤系腫瘍ヲ材料トシテ之ヲ（甲）鶏骨折部ヘノ腫瘍移植試驗（乙）ベルケフェルド濾過器ニヨル其濾過液ノ靜脈內注射試驗（丙）武藤系鶏腫瘍其後ニ於ケル移植ノ經過ノ三項ニ就テナリ、本研究ハ癌研究ヨリ支給セラレタル研究費補助ノ一部ニヨリテ行ヒタルモノナリ

（甲）余ハ（一）鶏肉腫瘍組織ノ無細胞性濾過液及生活細胞ナキモノト信ズベキ同乾燥粉末等ノ移植ニヨリテハ被移植鶏ノ造結締織細胞ヨリ腫瘍ヲ發生スルモノナリト云フ事實（二）武藤系鶏腫瘍ハ原種ガ骨軟骨肉腫ナリシニ拘ハラズ其第三世代ヨリハ尋常ノ肉腫ノ像ヲ呈スルモノニナリタルコト（三）余等ノ行ヘル尋常移植試驗ニ於テ移植部又ハ鶏固有體質ノ異ナルニヨリ其腫瘍組織像ハ常ニ不動性ナルコト等ヲ基礎トシテ余ハ鶏ニ於テハ其移植部ニ豫メ一定ノ造組織細胞ノ存在スルトキニ於テハ

茲ニ報告セル所ナリトス

(乙) 余等ハ武藤系鷄肉腫組織ヲ細剪磨碎シテ乳劑様トナシ七倍容量ノ生理的食鹽水ヲ加ヘ其内ニ靈菌一〇「エーゼ」ヲ加ヘヨク攪拌シタルモノヲベルケフェルド濾過器ニテ濾過シタル液ヲ鷄十六羽ノ翼靜脈内ニ各二・〇立方仙迷ヲ注射シ又其三・〇立方仙迷ヲ四羽ノ鷄皮下ニ注射シタリ(濾過液ハ是ヲ尋常培養基上ニ培養スルモ靈菌其他雜菌ハ發育セズ)而シテ十六日目ニ於テ皮下注射ノモノ四羽中一羽ハ明ニ陽性ヲ示セリ、又靜脈内注射ノモノハ同日ノ檢査ニ於テ注射部少シク水腫狀ヲ呈セルモノアリタルヲ以テ其内三羽ヲ絞殺シテ檢シタルニ内一羽ノ肺臟肝臟腎臟ニ於テ米粒大ノ腫瘍ヲ認ムルヲ得タリ、他二羽ニ於テハ肉眼上極メテ微細ナル灰白色ノ小點ヲ肝臟ニ於テ認メタリ而シテ顯微鏡的檢査ニテ其肝臟腎臟ニ於テ腫瘍ノ初發狀況ト見ルベキ、圓形細胞ノ集積スル所散在性ニ存スルヲ見ル然シ鷄ニ於テハ尋常鷄ト見ルベキモノニ於テモ如斯所見ハ屢〻認ムル所ナルモ其細胞ノ狀態其他ヨリ觀レバ明ニ腫瘍發生初期ノモノナルベシト信ゼラル

肉眼的ニ明ニ腫瘍ト認ムベキモノヲ其肺臟、肝臟、腎臟ニ存スル一例ニ就テ檢鏡スルニ當該部ハ圓形細胞ノ集簇性ニ新生增殖セルヲ認メ明ニ圓形細胞肉腫ノ像ヲ呈セリ

(丙) 余ハ昨年本會ニ於テハ武藤系鷄腫瘍第七世代マデ移植シ得タルコトヲ報告シタリシガ此モノ目下ハ第二十二世代マデ移植スルヲ得テ今日ニ及ベリ其移植ハ毎世代三羽ノ鷄ニ行ヒタルニ悉ク陽性ナリ又移植陽性ヲ呈スル日數ハ七乃至八日ニシテ昨年ノ報告ト大差ナシ只老鷄ニシテ癌腫ヲ有スル鷄ニ移植シタルモノハ少シク遲レテ陽性ヲ呈シタリ(顯微鏡標本供覽)

(自抄)

膜組織ト見ルベキモノニ相連リ紡錘形骨膜細胞ニ移行スルヲ見ル是等狀態ヨリ觀レバ此紡錘形骨膜細胞ノ化生ニヨリテ軟骨細胞ヲ生ズルヤ明ナリ其外圍ハ骨膜新生細胞層ニシテ尙增殖ノ傾向ヲ有スルコトハ明ニ窺ヒ知ラル又是等新生組織ハ對照ノモノト異ナリ毫モ退行變性等ノ狀況ナク、軟骨細胞ノ內ニハ核分割像ヲ有スルモノアリテ尙ホ明ニ軟骨細胞自身ニ於テモ增殖ノ傾向ヲ有ス

骨髓腔ニ於テハ軟骨ノ新生等ハ認メラレズシテ只一部分骨梁ノ存スルヲ見ル而シテ大部分ハ血液ヲ充滿セル血管及骨髓樣組織ヲ以テ充サレ是等ノ所見ハ寧ロ新生骨ノ吸收ト見ルベキモノナリ

對照試驗ノモノハ外見已ニ前者ニ比シ著シク小ナリ而シテ異存骨質ノ外圍ニ於テハ軟骨細胞少ナク且ツ其增殖及ビ骨膜細胞ヨリ化生スルガ如キ狀況無之新生骨ハ新生血管及骨髓樣細胞ニヨリテ遂次吸收セラレルヲ見ル骨髓腔內ニハ新生骨及軟骨無ク骨髓樣組織ニヨリテ充サル

次ニ骨折後前者ト同一材料ヲ注射シタルモノニテ且ツ軟組織共ニ增大セルモノヽ骨ノ周圍ヨリ、其長軸ニ直角ナル一片ヲトリ同一平面ノ切片標本ヲ製作シテ檢スルニ骨膜組織ト見ルベキ部ノ外圍ハ主トシテ肉腫像ヲ呈スレドモ特ニ其內ニ纖維性ヲナセル部分アリテ其處ニハ軟骨細胞アリ而シテ其周圍ハ幼弱ナル軟骨細胞ト見ルベキモノアリ前記紡錘形骨膜細胞ノ所見ニ一致ス

以上ハ大體ニ過ギザレドモ要スルニ余ノ想像ニヨリ骨折後ニ武藤系腫瘍組織乾燥粉末ノ食鹽水浸出液ヲ注射シタルモノハ其組織像ニ於テハ骨折治癒現像ニ比シテ多量ニ骨、軟骨組織共ニ增殖スルコトハ斷言シ得ル所ナリ而シ余ハ此事實ヲ以テ直ニ骨軟骨肉腫ナリトハセズ乍併余ノ上記材料ハ明ニ骨折ニヨル骨膜細胞ノ尋常ノ場合以上ニ增殖セシムルノ事實ハ余ノ本實驗ニ於テ特ニ興味ヲ惹キ、

三

生活細胞無キ濾過液ノ注射ニヨリテ同一ノ家鶏肉腫ヲ發生セシメ得可キコトハ腫瘍學上甚重要ノ意義ヲ有シ頗興趣アルモノナリ、此試驗ハ前年ニ於ケル如ク今年度モ之ヲ反復シテ行ヒ確ニ細菌（靈菌）ヲ通過セザル濾過器ニヨリテ得タル濾液中確ニ細胞ノ存在セザリシモノヲ用ヒ確ニ陽性成績ヲ得タリシ例決シテ稀ナラザリシナリ

此成績ハ最早ヤ疑無キ事實ト見做シテ可ナリ、余等ノ軟骨腫（性質變化ノ以前ノ試驗）ニ於テモ亦陽性成績ヲ得タリシコトアリ

四

肉腫ノ乾燥粉末ヲ用ヒル試驗ハ今年度モ之ヲ行ヒ前年ニ於ケルガ如ク肉腫ヲ發生セシメタルモノ亦稀ナラズ、軟骨腫ニ於テモ亦成功セシモノアリ、此際移植材料中生活細胞ハ果シテ一個ダモ殘存スルコト無キヤ今之ヲ組織的ニ絕對的ニ證明スルコト能ハズ是ハ現今ノ處止ムヲ得ズトスルモ移植材料ヲ組織的ニ他ニ對シテ見分ケ易カラシムル手段アラバ、此興趣多キ乾燥粉末接種ニモ增シテ移植腫瘍組織發生ヲ檢スルニ利便多カル可シ

五

是ニ於テ新キ左ノ試驗ヲ企テタリ

余等ハ濃厚「リチオン・カルミン」液或ハ「アラウン・カルミン」液中ニ新鮮ナル粘液肉腫ノ細小片ヲ浸漬スルコト二十四時間或ハ四十八時間ノ後或ハ其儘或ハ二十餘時間、流水ニテ洗ヒテ之ヲ移植ス、此時移植片ノ細胞ハ盡ク染色シ、核モ色著キタリ、其他此著色片ヲ吉野紙ニテ包ミ絲ニテ括リ之ヲ移植シタルコトアリ又著色片ヲ乾燥シタルモノヲ移植シタルコトアリ、斯カルモノハ亦其細胞各個ノ生命ヲ廢絕セシメタルモノト見做シテ可ナルガ如シ但之レトテモ一々ノ細胞ニ就キ直接ニ組織的ニ之ヲ確證スルハ尙ホ困難或ハ不可能ナリ、サレド

第五　移植シ得可キ鷄腫瘍ニ就テ

（第六報告）

京都醫科大學病理學教室
醫學博士　藤浪鑑君
醫學士　加藤竹男君

一

從來ノ可移植性家鷄肉腫（粘液肉腫）及纖維腫ノ外ニ昨年來一種ノ軟骨腫ト稱シ得可キ可移植性腫瘍ヲ有セリ此軟骨腫ニ就テ腫瘍學上注意ス可キ現象ハ初メ多クノ移植世代ニ亙テ常ニ同一性狀ヲ示シタリシガ、後徐ニ變化ヲ來タシ纖維肉腫、紡錘細胞肉腫、終ニ粘液肉腫等組織形態ヲ示スニ至リシコトアリ

而テ此變化ガ敢テ特殊ノ作用ヲ加フルニ因ラズ唯移植ニ依ル增殖ノ世代ノ重ナルニ從テ現出シタルコト此變化ノ現出ガ緩徐ニシテ敢テ急激ニ非リシコト、又同一種ノ組織成分ガ次第ニ變化シタリト認メルラシコト又特殊的（軟骨性）性質ノ漸ク消失シテ特殊的ナルコト少キ性質ガ跋扈スルニ至リシコトハ腫瘍組織ノ生物學的性質ノ研究ニ於テ興趣アル所見ナリ

二

從來ノ肉腫（粘液肉腫）ハ、今ヤ余等ハ其二種（舊來ノモノト新キモノト）ヲ有セリ、其組織形態ハ全然同一ナリ此兩者ノ研究ニ據テ腫瘍學上吾人ノ注意ヲ惹キタル同一種ノ組織成分ヨリ成レル同一種ノ腫瘍ニシテ且、同一組織形態ヲ有スルモノト雖其生物學的性質ニ若干ノ差異ヲ生ジ得ト云フコトナリ現在ノ狀ニ於テハ舊來ノ肉腫ガ移植毎ニ旺盛ノ壞死竈ヲ爲スコト甚屢〻ナルニ反シ新キ肉腫ハ壞死ヲナスコト殆ド無ク若クハ頗ル僅微ナリ蓋シ斯カル性質ハ移植ノ世代ニツレテ若干ノ遷變推移アルモノト考ヘラル

蓋シ之ガ充分徹底セル解決ハ之ヲ本腫瘍ノ細胞學的知見ノ更ニ精緻ニ闡明セラルヽヲ待タザル可カラズ（蓋シ此腫瘍ノ移植試驗ニ於ラ普通ノ方法ヲ以テシテハ移植片ノ細胞其物ノ增殖ガ常ナルコトハ明ナリ、然レドモ常ニ全然之レノミニ非ズシテ、吾人ノ未ダ其機密ヲ充分明確精細ニ捉ヘ得ザル移植腫瘍發生方法アルコトハ上述濾過液試驗及其他ニヨリテ知リ得可シ）（自抄）

第六　動物腫瘍ニ就テ二三新實驗

愛知醫學專門學校病理學教室
醫學博士　林　直　助　君
向　山　孝　之　君

本報告ハ癌研究費ノ補助ニ浴シ謹シタリ謹ミメテ謝意ヲ表ス

（實驗第一）鷄肉腫移植試驗陽成績ヲ得ル事明トナリシ以來鷄ニ存在セル癌腫モ亦移植シ得ベキ性質ヲ有スルモノナランカトハ先ヅ胸臆ニ浮ブ所ニシテ余等ハ之ガ移植試驗ヲ試ミント企圖シタル處ナリトス勿論此問題ニ關シテノ研究ハ余ガ京都大學奉職中藤浪博士ノ下ニテ試ミタリシガ成功ノ域ニ達セザリキ之レ畢竟鷄數ノ僅少ナリシト、移植部位一定所ノミヲ選ビタルガ故ナラント思ハル、所アリシヲ以テ余ハ今回ノ新實驗ニテハ試驗鷄數ヲ須ク多數ニ用ヒ同時ニ移植部位ヲ能フ限リ多クヲ選擇スル事トナシタリ

余ガ用ヒタル鷄數ハ、三十四羽ニシテ內三羽ヲ一組トシ之ニ皮下或ハ盲腸又ハ卵巢內又ハ盲腸ト皮下組織等ヲ選ビ原種材料ハ主トシテ鷄卵巢癌ヲ以テ移植ヲ行ヘリ

經過及ビ肉眼的所見トシテハ移植部多クハ一旦多少增大セルガ如ク見ユルモ十五乃至十六日後ニハ殆ド吸收セラル只盲腸內ニ移植セシモノヽ一羽ガ二十七日目ニ達シ豌豆大ニ發育セルモノヲ見タリ

モ「リチオン・カルミン」ガ決シテ無害性ノモノニ非ルコトハ他ノ經驗ニ徴シテモ首肯セラルヽナリ。而シテ其ノ移植片ハ其細胞ノ著色ニ依リテ明カニ四周ヨリ區別シ得ラルヽナリ、如斯試驗ヲ十六回ニ五十頭足ラズノ家鷄ニ約百五十ケ所ニ於テ施シ其中十二回二十五頭五十五ケ所ニ陽性成績ヲ得タリ、其他軟骨腫ニ於テモ能ク成功シタルモノ亦稀ナラズ、纖維腫ニテモ陽性ノモノアリ、斯カル陽性例中、適當ノモノニ就テ其病理解剖學的形像ヲ察スルニ移植片ノ內層ヨリ自己ノ細胞ノ自由ニ增殖スルニ至ルコト決シテ無シ而シテ著色移植片ヲ繞テ結締織細胞・淋巴細胞・白血球ノ增殖乃至集簇アリ、是レ亦染色片（壞死崩壞ニ陷レル）內ニモ進入ス而テ斯カル移植染色片ノ外圍部ニ於テ腫瘍組織竈ハ漸ク發現スルニ至ル且ツ往々腫瘍竈ト移植染色片トノ境界頗明白銳利ナルモノアリ、此ノ今回始メテ行ヒタル新キ試驗ハ余等ガ多クノ興感ヲ懷キテ更ニ之ヲ恢宏セムト欲スル所ノモノナリ、蓋シ移植セラルヽ腫瘍材料無クテハ新生腫瘍組織發現スルコト無キヲ以テ後者ノ起源的要件ガ前者ニ由來セルヤ疑無シ而テ組織像ニ就テ之ヲ察スルニ移植片ニ起源セル何等カノ物質ニヨリテ周圍部ノ結締織增生ノ裡ニ若クハ之ト伴テ、最初ノ腫瘍組織生成スルモノナルヲ推測セシム、但此物質ガ移植片ノ細胞ト密接關係アルモノナルヤハ想像ニ難カラズト雖、之レガ果シテ么徴生體ナリヤ或ハ細胞內ノ成分ニ屬スルモノナリヤ、吾人ハ未ダ之ヲ直接ニ捉フル事能ハズ。（將又斯ク長時間濃厚「カルミン」液ニ侵漬シタル細小片ノ裡ニモ尙ホ自由ニ增殖ヲ營ミ得ヲ迄ニ生活ヲ保續セル個々ノ細胞ガ或ハ——特ニ移植片ノ周緣部ニ——殘留スルコトアリテ此者自個ガ上述ノ所謂物質タル場合無キヤ斯カル想像ニ對シテモ之ヲ全然否認ス可キ絕對的ノ組織的證明ハ亦之ヲ立ツルニ由無シ。）

性成績ト認ムベキモノハ一モ之アル認メズ
結果　本試驗成績ハ全ク陰性ニ終リタルモノトス
（實驗第三）異種動物ニ於ケル腫瘍移植試驗ニシテ
昨年野口博士歸朝セラレロックフェーラー研究所ニ
於テハ動物脾臟ノ剔出ヲナシ之ニX光線ヲ放射セ
ルモノヲ用フ卽チ白血球減少ノ狀態ニ於テハ鷄腫
瘍ハ甚ダシク良ク移植セラルト演說セラル果シテ
如斯事ガ成功スルトセバ腫瘍學上興味アル事ナリ
ト信ジテ之ガ試驗ヲ行ヘリ
余等ハ試驗動物トシテ白鼠二十七頭、家兎十四頭、
海猽五頭、四國猿一頭ヲ用ヒ先ヅ脾臟剔出ヲ行ヒ
テ後X光線ヲ放射シタリ卽X光線放射回數ハ一乃
至二回分量ハ十五H乃至四十二Hトス而シテ之ニ
「ベンッオール」注射ヲ併セ行ヒテ強度ノ白血球減
少ヲ起サシム斯シテ後ニ三乃至五日ニ於テ武藤系
肉腫ヲ胸部及上腿ニ移植ヲ行ヘリ而シテ試驗途中
ニテ動物斃レタルモノ多數アリタリ此殘部尙生存
シ完全ニ一定日數ヲ經過セルモノニ於テハ結果陰
性確實ニ陽性ト認ムベキモノハ一頭モ之レ無シ。
但シ兎一頭、白鼠一頭ハ皮下ニ大ナル腫脹部形成
ヲ見タリシ故、或ハ腫瘍ナランカトシテ大ニ望ミ
ヲ囑セシガ之ヲ剔出セントスルニ際シテ全部乾酪
化セル泥狀物、又ハ膿瘍ニテ腫瘍組織ト見ル可キ
所ハ何レニモ存在セズ
サレバ、本實驗ノ結果ハ今日ニテハ未ダ陰性ニ終
レルモノトス
（實驗第四）鷄癌移植試驗ガ上說第一、第二、第三ニ
テ全ク陰性ナリシ故ニ余等ハ鷄癌腫、細片ヲ鷄卵
內ニ移植シテ果シテ內ニ新生組織ヲ來セバ後ニ之
レヲ成長鷄ニ移植シテ腫瘍ノ發育スル處アランカ
ヲ試ミントシタリ
余等ハ先ヅ鷄肉腫ハ鷄卵內ニテハ如何ナル發育ヲ
呈スルカヲ試ミタリ、此肉腫鷄卵內移植法ハ旣ニ
清野博士ノ著手セラレタル處ナル故ニ余ハ之ニ關

組織學的檢査トシテ如此組織ヨリ顯微鏡標本ヲ作リテ檢セシニ多クハ其部ハ壞死トナリ乾酪化シテ其周圍ニ結締織細胞ノ多少ノ浸潤ヲ呈セルモ之レガ後ニハ纖維性トナリテ、瘢痕組織トナルヲ通例トシタリ、又盲腸ノ豌豆大結節モ鏡檢上組織壞死ニ陷リ、其周圍ハ肉芽組織ヲ形成シ特ニ著シキ上皮成分ノ增殖ヲ來セルハ之レヲ見ズ、左レバ本試驗ノ成績ハ今日ノ所ニテハ全ク陰性ニ終レルモノトス

（實驗第二）鷄癌ノ移植ニ於テ第一試驗陽性ナラザリシ爲ニ余等ハ更ニ光學的竝ビニ化學的ニ刺戟方法ヲ用ヒテ、或ハ癌腫ノ組織增殖スルアランカヲ試ミタリ之ニハ鷄數十二羽ヲ用ヒテ之ヲ四組トナシ其一組ノ鷄ニハ胸部兩側ニ各々相對性ニ三個所ニ鷄卵巢癌ヲ移植セリ而シテ此一側移植部位ノ第一ニハ水銀石英燈放射ヲナシ第二ニハ「シャルラッハロート」油ヲ注入シ第三ニハ「テール」ヲ塗リ之ヲ一定ノ時日ヲ隔テテ反復シ刺戟ヲ加フルコトナシ而シテ他ノ半側ハ對照トシテ全ク移植ノマヽ放置セリ

經過及肉眼的所見ハ此ノ移植部位ニ於テ刺戟方法ヲ行ヘルモノハ對照ノ者ヨリ多少大トナル就中「シャルラッハロート」油注射セルモノハ移植後初ノ間ハ次第ニ增大シ來リ著シキモノハ約拇指頭大新生物ヲ形成セルモノモアリタリ他ノ水銀石英燈放射竝ニ「テール」塗布ノモノハ對照ニ比シテ著明ノ膨大ヲ來セルガ如キハ之レアルヲ見ズ

組織學的檢査ニテ「シャルラッハロート」油注射セルモノハ腺管上皮增殖ヲナシ其周圍ニ結締織盛ニ茂生シテ一見、纖維腺腫ノ狀態ヲ呈シタリ其ノ他水銀石英燈及ビ「テール」等ヲ用ヒタルモノニハカクノ如キニ至レルモノヲ見ズ然ルニ之ガ經過ヲ見ル時ニハ膨大部ハ漸々吸收セラレテ其部全ク壞死トナリ乾酪化ニ陷リタル塊トナリ終リ其等ノ內ニ陽

ス可シ

次デ鷄ノ癌腫ノ卵内移植ハ余等ノ報告セントスル主要事項ニ屬ス余等ハ癌組織鷄卵内移植ハ九回卵數三百六十四個ヲ用ヒ移植材料ハ鷄卵巢癌ノ細片ヲ採用シ又人類乳癌片ヲモ試ミタリ（但シ乳癌ノ成績ノミハ今日（十二）ト稱ス可シ）而シテ移植後十日乃至十一日乃至十五日ニテ卵殻ヲ破リテ檢査ヲセシニ鷄卵巢癌ヲ移植セルモノ植内其數十五個ハ明ニ陽性ニシテ肉眼上小結節形成ヲ認メ、十八個ハ（十二）ノ成績ヲ得タリ是等結節ノ内最大ナルハ米粒大ナルアリ又之ヨリ小ナルモノモアリ結節ノ形成ハ何レモ移植部ニテ移植組織片ヲ中心トシテ其周圍ニ灰白色ノ組織形成ヲ見タリ

顯微鏡的檢査ニテハ、先ヅ移植セル腫瘍片自己ハ、概シテ壞死ニ陷リ、無造構ノモノトナルカ若クハ同ク纖維性ニ化シ其レニ索狀ノ痕跡ヲ止ムル上皮細胞核ノ僅カニ遺殘存在セルヲ見ルノミ、然シテ此壞死組織周圍ニ於テ新生結節ノ組織形成セラル、其關係ハ恰モ鷄肉腫ノ乾燥粉末ヲ皮下ニ移植セル場合ニ見ル所ノ如シ

新生結節ノ組織ハ極メテ初期ニハ核濃厚ニ染色スル圓形細胞ガ卵膜絨毛ノ上皮下ニ多數、表ハレ之ガ速ニ增殖ヲ營ミ、此部著シク細胞ニ富ミ來ル、此細胞ハ主トシテ上皮樣細胞ニシテ中央ニ圓形ノ核ヲ備ヘ周圍ニ稍〻多量ノ原形質ヲ有ス此細胞ハ速ニ形態ヲ變ジテ方錐形トナリ後ニ及ビテ著明ノ結締織纖維ヲ形成ス斯ク纖維形成セル部ノ絨毛ハ著シク厚徑ヲ增シテ全然肉腫組織ト同一樣トナル此肉腫樣組織發生ト共ニ上皮細胞ガ刺戟興奮ノ態度ヲ以テ增殖ス初ハ其上皮細胞ハ卵膜ノ扁平單層ヲナセル型ノ上皮ナリシモノガ深ク肉腫ノ組織内ニ入リ來リ、然シテ其處ニ枝別ヲ生ジ、續デ尙ホ結締織ノ增殖ニ伴ヒテ細長ナル上皮索ヲナシ若クハソレガ多數ノ小ナル上皮索ヲ形成セルモノ又著明

シテハ深ク立入ルヲ好マズシテ單ニ癌腫トノ比較試驗ノ爲ニ行フヲ目的トス余ノ肉腫試驗ハ六回ニテ卵個數ハ百九十個原種腫瘍材料ハ武藤系肉腫ヲ用フ此等ノ試驗ニテ初ノ間ハ成績不良ナリシガ第六回試驗ニテ陽性トナリ、九個卵中三個ハ明ニ陽性トナリテ肉眼上、小結節ヲ形成セリ次ニ顯微鏡檢査ヲナセルニ清野博士ノ前席演說セラレタル所ト略同樣ナル肉腫組織像ヲ呈セシモ余ノ特ニ一言セントスルハ肉腫組織周圍又ハ其移行部等ニハ往往上皮增殖ヲナシ、之ガ乳嘴狀又ハ角化セル眞珠球ヲ認ムルノ事實ナリ然シテ之ガ對照試驗トシテ尋常鷄卵巢片ヲ同一方法ニテ處置セルモノニテハ十個鷄卵中只一個ニ小結節形成ヲ見タリト雖顯微鏡的檢査ニハソレガ全部壞死トナリテ特ニ增殖性ヲ有セルモノハ一モ之ヲ認メズ

次ニ肉腫ノベルケフェルド濾過液ヲ鷄卵中ニ注射スル試驗施行ハ亦大ニ必要アリ此方法ハ曩ニ米國ラウス氏ニヨリテ報告セラレテ既ニ周知ノ事實ナレバナリ

余ハ如法ベルケフェルド濾過液一滴宛ヲ鷄卵八十個ニ注射シ十六日ヲ經過セルモノヲ檢査セシニ內五個ハ確ニ肉眼的ニ認ムベキ次粟粒大結節ヲ卵膜處々ニ認メタリ（標本供覽）其外二個ノ卵膜ニ於テモ漫蔓性ニ肥厚ヲ呈セルモノアリタリ如斯結節ヲ顯微鏡的檢査ヲ行ヘルニ、組織ハ何レモ主トシテ圓形ナル上皮樣細胞ヨリ成リ又ハソレニ多少ノ方錐形細胞モ混在ス此結締織ハ特ニ周圍トノ境界明ニ且ツ其處ニ出入ノ血管擴張、若クハ新生等ヲ顯ハセリ此結節ハ尋常肉腫片移植ノ場合ニ比スルニ細胞ハ多少幼若ニシテ形態圓形ニ屬スルモノモアリト雖一般ノ性狀ガ肉腫ノ場合ト同一ナル事ハ明ニ認メタル所ナリトス、其他ベルケフェルド濾過液注射卵內ノ胎兒ニ於テ下腿關節腫脹等ノ存在セルモノアリタリト雖詳細ナル檢査ニ就テハ後日ヲ期

癒著ヲ營ミテ之ヲ壓迫シ後方ハ脊柱ニ及ビ上方ハ頭蓋底ニ達セリ然レドモ口腔トハ全然交通セズ腫瘍ハ左側外方ニ向テ半球形ヲ呈シテ膨隆ス而シテ皮膚ト密ニ癒著ヲ營ミ腫瘍實質ハ猶裸出セズシテ表面ハ羽毛ヲ以テ被レ一般ニ平滑ナリ、腫瘍ノ基底ハ固ク癒著シテ移動セズ硬度ハ比較的柔軟ニシテ且靭ナリ、周圍トノ境界ハ明瞭ニ區劃セラレ輕度ノ癒著アリト雖モ容易ニ剝離剔出シ得、其脊椎骨及頭蓋底ノ諸骨ハ一部腫瘍ノ爲ニ蠶蝕セラレテ其質甚ダ脆弱トナレリ

腫瘍ノ表面ハ塊磊狀ヲ呈シ、斷面ハ帶黃灰白色ニシテ實質性ヲ現シ其內部ニハ鬆粗ニシテ又走セル網狀ノ結締織ヲ介在シ、且各部ニ細小血管ヲ有シ又或部分ニ於テハ髓樣ニシテ軟化セル壞死竈アリ或ハ赤色ノ斑紋ヲ呈セル出血竈ヲ認ム認ム

諸多ノ內臟各部ヲ檢査スルモ轉移病竈ヲ發見セズ

顯微鏡的所見　顯微鏡的標本ハ腫瘍組織片ヲ「ホルマリン」ニテ固定シ「アルコホール」ニテ硬化シ「チェロイヂン」包埋法、「パラフィン」包埋法等ヲ行テ切片ヲ製作シ「ヘマトキシリン、エオジン」重複染色法ワンギーソン氏染色法其他必要ニ應ジテ種種ノ方法ヲ應用シタリ

腫瘍樣新生物ハ實質性ニシテ小圓形細胞ノ多數ヨリ構成セラレ其小圓形細胞ハ大部分單核ニシテ「クロマチン」ニ乏シク淡染スル核ト微量ノ原形質ヨリナレル細胞ナリ、然レドモ此間又小數ノ多核或ハ多形核ノ小圓形細胞ヲ混有セリ、而シテ此等腫瘍細胞間ニハ各自微量ノ細纖維或ハ微細ノ顆粒狀物質ヲ介在シ、又或部分ニ於テハ比較的多量ノ纖維樣結締ヲ存シ多クハ有血管性ナリ、猶毛細血管ハ微量ノ結締織ニ圍繞セラレテ各所ニ存在シ壞死病竈ハ全ク無染色無構造ニシテ頹廢物質或ハ褐色ノ色素顆粒ヲ殘存シ此附近ニアリテハ必ズ多少ノ出血竈ヲ認ムルモノナリ、猶腫瘍周邊ニ於テ周

ニ增殖セル上皮ハ明ニ角化シテ眞珠ヲ形成セルアリ又增殖セル上皮ガ扁平ノ性質ヲ變ジテ柱狀上皮ノ性狀ニ化シ、一部ニ於テ多數ノ枝別ヲナシテ腺管ヲ形成セル處モアリタリ、是等ノ肉腫組織ト上皮組織ノ發生トヲ綜合シテ考フルニ初メ肉腫樣組織增殖シテ同時ニ上皮樣組織ハ肉腫樣組織ノ增殖ニ伴ヒ肉腫組織ノ間ニ嵌在スルニ至ル、サレバ肉腫組織增殖ガ原發ニテ上皮組織ノ增殖ハ續發ナリ斯ク上皮組織ノ增殖狀態ハリッペルト氏ガ癌腫ノ組織發生說ト著シク一致シテ大ニ余等ノ興味ヲ惹キタル處ナリトス

敍上ノ所見ニ據リテ見ルニ余等ガ此鷄卵內肉腫癌腫ノ移植ニ際シ其組織像ヲ比較シ之レヲ綜合スレバ肉腫移植ヲナセル場合ニモ上皮ハ多少增殖シ癌腫移植ニ際シテモ亦上皮ノミナラズ結締織先ヅ增殖ヲナス此上皮ト結締織ノ增殖ノ關係ハ單ニ分量上ノ差アルノミニテ一般性質上ニハ何等ノ差アルヲ見ズ若シ肉腫ニシテ其刺戟ヲ與ヘ組織增殖シ得可キ原因體存セザルベカラズ語ヲ換フレバ癌腫ニモ亦原因體トシテXナルモノヽ存在ヲ主張セントスル者ナリ（肉眼的竝ニ鏡檢的標本供覽）（自抄）

第七　家鳩ノ腫瘍樣新生物ノ移植ニ就テ

京都醫學專門學校病理學教室
梅原信正君

大正四年八月六日偶然ニ我教室試驗用トシテ飼養セル家鳩ノ一羽ニ胡桃大ノ腫瘍樣新生物ノ發生セルヲ發見シ直ニ之ヲ捕獲シテ諸種ノ試驗ヲ施行シタルヲ以テ其大略ヲ茲ニ報告スベシ

腫瘍樣新生物ノ發生セシ鳩ハ家鳩種（鴿）ニシテ孵化後約四十餘日ヲ經過セル幼稚ナルモノナリ

解剖的所見　左側頸部皮下組織內ニ約胡桃大ノ腫瘍樣新生物ヲ發生シ（以下腫瘍ト稱スルモノハ此腫瘍樣新生物ノ略ナリ）前方ハ食道及氣管ト密ニ

死亡ス他ノ二羽ハ陰性ニ終レリ

(b)家鳩ノ胸壁皮下組織内ニ三羽脊部中央ノ皮下組織内ニ三羽注射シタルモノハ悉ク陰性成績ニ終レリ

第三世代　前述試驗ノモノヽ一羽未ダ斃死セザルモノニシテ移植後二十二日間ヲ經過シ腫瘍胡桃大ニ發育セルヲ外部皮膚ヲ消毒シ切開シテ大部分ヲ剔出シ其跡ハ縫合ス、此採取材料ヲ前述方法ト同一ニヨリテ移植ス、頸部皮下組織内ニ組織片移植ヲ試ミシ四羽ノ家鳩ハ全部陽性成績ヲ呈シ脊部中央皮下組織内ニ二羽及ビ胸壁皮下組織内ニ移植シタル二羽ハ全部陰性成績ヲ呈セリ、次ニ乳劑注射ニ依ル九羽ノ内頸部皮下組織内ニ注射セシ一羽ニ於テノミ陽性ヲ認メ他ハ(頸部皮下組織内二羽、翼肢裏面下組織内二羽、胸壁皮下組織内二羽、脊部中央皮下組織内二羽)全部陰性成績ニ終レリ

第四代　第三世代移植試驗ニ於テ陽性成績ヲ呈シ

移植後二十四日間ヲ經過シテ胡桃大以上ニ遠セル一羽ヲ絞殺シ、死後十時間冷室内ニ貯藏シ之ヲ前試驗ト同一ノ方法ニヨリテ移植シタルニ組織片移植ニ於テ頸部皮下組織内ニ移植シタル四羽ハ全部陽性成績ヲ得タリ、其他ノ身體部分及乳劑注射(皮下組織内)ノモノハ全部陰性ニ終レリ

第五世代　第四世代移植試驗ニヨリ陽性成績ヲ得タルモノニシテ移植後十八日ヲ經過シ雀卵大以上ニ遠セル一羽ヲ絞殺シ直ニ四羽ノ家鳩ノ頸部皮下組織内ニ移植セシモノハ全部陽性ヲ呈シ其他ノ身體部位ニ移植セシモノハ陰性ナリ次ニ乳劑狀トナシタル材料ヲ更ニ二重「ガーゼ」ニテ濾過シ、此濾液ヲ翼靜脈内ニ二・〇ヲ注射セシ四羽ノ家鳩ノ内一羽ニ於テ腸間膜内ニ小豆大乃至蠶豆大ノモノ合セテ三個發生セルヲ發見セリ(移植注射後三十四日目ニ死亡ス)他ノ三羽ハ健康ニシテ猶生存セリ

第六世代　第五世代ノ腸間膜内發生ノモノヨリ材

圍ト共ニ製作セシ切片ニ於テハ腫瘍細胞ハ滲潤狀ニ其組織內ニ滲潤シ且多數ノ血管ハ充血ヲ呈シ幾分炎症性性質ヲ呈セリ

敍上ノ鏡的所見ニヨリテ考察スルトキハ本腫瘍樣新生物ハ一部炎症性肉芽腫瘍ノ如キ鏡像ヲ呈シ、又他方ニ於テ小圓形細胞肉腫（人類）ニ類似ノ鏡像ヲ呈セル部分アリ、茲ニ於テ余ハ今直ニ肉芽腫瘍ナリヤ將タ眞正腫瘍ナリヤノ判定ヲ下スコトヲ得ズ爲ニ此間幾分ノ興味ヲ以テ次ニ述ブル移植試驗ヲ施行シタリ

尋常移植試驗成績

第二世代　上記家鳩ノ腫瘍狀新生物ヨリ材料ヲ採取シ之レヲ次ノ如ク移植試驗ヲ行フ

一、組織片移植　腫瘍材料ヲリンゲル氏液ニ浸シ嚴重ニ洗滌シ次デ細剪シテ小豆大ノ組織片ヲ同種家鳩ノ皮下組織內ニ移植ス

ⓐ家鳩四羽ノ頸部皮下組織內ニ移植シタルモノハ二十日乃至二十七日間ニシテ悉ク陽性成績ヲ呈シテ胡桃大ニ發育シ、其外觀及斷面所見原發ノモノト全ク類似シ身體ハ腫瘍ノ發育スルニ從テ羸瘦衰弱ヲ來シ遂ニ惡液性ヲ呈シテ斃死ス

ⓑ家鳩三羽ノ胸部皮下組織內ニ移植シタルモノハ何等發育ノ狀ヲ示サズ、約十八日乃至三十日間ニシテ組織片ハ全ク吸收セラレ、或ハ皮膚ト共ニ壞死乾燥シテ痂皮樣トナリテ脫落セリ、悉ク陰性成績ニ終レリ且身體ニハ何等ノ異常ヲ來サズ頗ル健康ナリ

ⓒ家鳩三羽ニ脊部皮下組織內ニ移植シタルモノモ亦前試驗ⓑト同一ノ狀態ヲ呈シテ成績陰性ナリ

二、腫瘍材料ヲ研磨シテリンゲル氏液ヲ以テ稀釋シ乳劑狀トシテ皮下組織內ニ注射シタルモノ

ⓐ頸部皮下組織內ニ注射シタル三羽ノ家鳩ハ其內一羽ノミ陽性成績ヲ示シテ二十八日間ニシテ胡桃大以上ノ發育ヲ營ミ從テ身體著シク羸瘦衰弱シテ

性發育ヲ營メルモノヨリ材料ヲ採取シ、「エーテル」内ニ十五分間浸漬シ嚴重ニ水洗シ、四羽ノ家鳩ノ頸部皮下組織内ニ移植シタルモノ、内一羽ニ於テ四十日餘ヲ經過シテ胡桃大弱ニ發育セル陽性成績ヲ得タリ他ハ全部陰性ニ終レリ

(四) 乾燥試驗　第四世代移植ニヨリ陽性發育シタルモノヨリ材料ヲ採取シ、八十時間硫酸及「クロール」石灰眞空乾燥器内ニ於テ乾燥シ後研磨シテ粉末トシ其粉末一・〇ニ〇・九%ノ食鹽水一〇・〇ヲ加ヘ糜粥狀トナシ其一・〇宛ヲ四羽ノ家鳩ノ頸部皮下組織内ニ注入セシモ全部陰性成績ニ終レリ

(五) 翼靜脈内注射試驗　第四世代移植ノモノヨリ材料ヲ取リ乳劑狀トシタルモノヲ二重「ガーゼ」ニテ濾過シタル濾液ヲ四羽ノ家鳩ノ翼靜脈内ニ注入シタル一羽ニ於テ腸間膜内ニ腫瘍樣新生物三個ヲ發見セリ(前出)

(六) ベルケフエルド氏濾過試驗　第四世代移植ニヨリ陽性成績ヲ得タルモノヨリ材料ヲ採取シ、之レヲ乳劑狀トナシ〇・九%食鹽水ヲ以テ約六倍ニ稀釋シ乳鉢内ニ攪拌シ内ニ靈菌五「エーゼー」ヲ加ヘ式ノ如ク濾過シ此濾液ヲ直ニ四羽ノ家鳩ノ頸部皮下組織内ニ注入シタルモ全部陰性ナリシ

總括及其他

一、移植方法ハ組織片移植ハ乳劑注射移植ニ比シ遙ニ佳良ノ成績ヲ得タリ

二、移植部位ハ頸部皮下組織内ニ移植セシモノ最佳良ノ成績ヲ呈シ、他ノ身體部位ニ於テハ全部成績不良ナリ

三、移植組織片ノ分量ト腫瘍發育狀態トノ關係ハ移植組織片ノ分量大ナルガ爲ニ必シモ大ナル腫瘍發育ヲ營マズ、乳劑移植ニ於テモ亦同一ノ關係ヲ示ス

四、腫瘍發育ノ程度ハ顯ル迅速ニシテ移植後六日乃至七日ニシテ表面稍ミ潮紅シ且膨隆シテ其陽性

料ヲ採取シ其組織片ヲ四羽ノ家鳩ノ頸部皮下組織内ニ移植シ其内三羽ニ於テ陽性成績ヲ得、他ノ一羽ハ陰性ニ終リ次ニ乳劑トシテ頸部皮下組織内ニ注入シタル三羽ハ陰性ニ終レリ、其他乳劑二重「ガーゼ」濾液ノ翼靜脈内注射ノ三羽ハ皆陰性ニ終レリ

以上尋常移植試驗成績ヲ總括スレバ組織片下組織内移植ニ於テ頸部皮下組織内ニ移植セシモノハ各世代ヲ通算シテ二十羽ノ内十九羽ハ陽性成績ヲ呈シ卽チ九十五%ノ陽性成績ナリ、然ルニ頸部以外ノ身體部卽チ胸壁脊部翼肢等ノ皮下組織内ニ移植シタルモノハ各世代ヲ通算シテ十六羽全部陰性成績ニ終リ卽一〇〇%ノ陰性成績ニアリ乳劑注射ニ於テハ頸部皮下組織内ニ注射セシモノ各世代ヲ通ジテ十二羽其内三羽ニノミ陽性成績ヲ認メ、卽チ二五%弱ノ成績ニアリ、同方法ニヨリテ胸壁脊部等ノ皮下組織内ニ注射セシモノハ各世代ヲ通ジ九羽全部陰性成績ニ終レリ、殊ニ第五世代ニ於テ乳劑二重「ガーゼ」濾過液ヲ翼靜脈内ニ注射セシ四羽ニ於テ其一羽ノミ内臟ニ腫瘍樣新生物ノ發生ヲ認メタリ

特別ナル要約ニヨル移植試驗

(一)異種動物移植　第三世代移植ニヨリ陽性發育ヲ營メルモノヨリ材料ヲ採取シ、此腫瘍組織片ヲ幼稚ナル家鷄三羽ノ頸部皮下組織内ニ移植セシモ全部陰性ニ終レリ猶幼弱ナル家兎四頭ノ脊部皮下組織内ニ移植セシモ之亦全部陰性ニ終リ約四十日余ヲ經過シテ吸收セラレタリ

(二)「グリセリン」浸漬試驗　第四世代ノ陽性發育ヲ營メルモノヨリ材料ヲ採取シ細剪シテ尋常「グリセリン」内ニ四十八時間浸漬セシモノヲ嚴重ニ水洗シ四羽ノ家鳩ノ頸部皮下組織内ニ移植セシモ全部陰性ニ終レリ

(三)「エーテル」浸漬試驗　第三世代移植ニヨリ陽

ラム氏法ギムザ氏法レバヂチー氏法其他）然レドモ其著明ナル發育ヲ營ミ潰瘍ヲ形成セルモノニアリテハ表層ニ近ク大小二種ノ桿狀菌ヲ證明シ、或其他ノ雜菌ヲ證明ス、此等ノ細菌ヲ分離培養シテ其各自及混液ヲ家鳩ノ頸部皮下組織内ニ接種セシモ何等ノ反應ヲモ呈セザリシ

十三、腫瘍ノ傳染性有無ヲ觀察セント欲シ移植陽性家鳩ト健康家鳩ノ多數ヲ數十日間同居セシメタルモ傳染性關係ヲ認メザリシ

十四、特別移植ニ於ケル成績ハ殆ンド陰性ナルモ唯一羽ニ於テ組織片「エーテル」浸漬ノモノハ陽性成績ヲ示シタリ

十五、原發腫瘍及移植腫瘍ニ於テ轉移腫瘍發生ヲ認メズト雖モ、乳劑翼靜脈内注射ニヨリテ内臟ニ同一腫瘍ヲ發生セシヲ以テ推考セバ本腫瘍様新生物モ亦轉移ヲ營ミ得ルコトヲ推定ス

十六、他種動物移植ハ全ク陰性成績ヲ呈セリ

十七、移植腫瘍發育ノ家鳩ノ血清ヲ採取シ一定時日間他ノ健康家鳩及移植陽性家鳩ニ注射シタルニ移植ハ陽性成績ヲ呈セリ、猶身體及ビ腫瘍ニハ何等ノ影響ヲモ呈セザリシ

十八、本腫瘍ノ組織片ハ採取後十時間ヲ經過セルモ猶移植性質ヲ失ハズ

十九、敍上ノ成績ニヨリ吾人ハ此腫瘍様新生物ニ對シテ其鏡的所見ニ依レバ之ヲ肉芽性腫瘍ト認ムルヲ穩當トナシ、移植試驗ノ成績ニヨリテハ之ヲ腫瘍ト見做スルヲ穩當トナス、元來動物ノ肉腫若クハ肉腫様腫瘍ト稱セラルヽモノニ於テ其形態竝ニ生物學的性質ガ明ニ人類ノ肉腫ト同一視ス可キ點アルト同時ニ他方寧ロ人類ノ肉芽性腫瘍ト又同様ナル點ヲ具フルコトアリ、學者若シ其性質ノ一ヲノミ觀察シ且唯人類ノ肉腫ニヨリテ經驗シタル所ノミヲ唯一ノ標準シテ遽カニ斷定ヲ下スノモアリトセバ是必シモ常ニ正鵠ニ當ルモノト云フベカ

ナルヲ認メ得可ク十日乃至十五日間ニ於テ著シク増大シテ周圍ニ擴大ス其擴大ノ狀況ハ局限性ニシテ滲潤狀ヲ呈セズ、表面皮膚ノ潮紅ハ全ク消褪シテ蒼色ヲ呈ス、二十五日乃至三十五六日ニ於テ胡桃大乃至鷄卵大ニ達シテ半球形ヲ呈シテ強ク膨隆ス既ニ此時代ニ於テ周圍皮膚ト密ニ癒著シテ全ク移動セズ、表面皮膚ヲ破壞シ潰瘍ヲ形成スルモノ多シ羽毛ハ自然ニ脫落ス

五、動物ノ榮養ト移植腫瘍トノ關係ハ腫瘍ノ發育スルニ從テ著シク榮養障碍ヲ來シ、大抵二十四五日乃至三十七八日ニ於テ惡液性衰弱ニ陷リテ斃死ス

六、剔出シタル腫瘍ノ遺殘片ヨリ又良ク同一ノ腫瘍ヲ發生ス、但シ此場合ニ於テハ其惡液性衰弱ヲ來シテ斃死スル迄ノ生命ハ稍ゝ普通ノ場合ヨリハ延長セラルヽモノヽ如シ

七、動物ノ幼老ト移植ノ關係ハ原發腫瘍ニ於テハ幼稚ナルモノニ發生セシト雖其移植試驗ニ於テハ此間特別ノ關係アルヲ見ズ

八、一動物ニ於テ同一場所ニ同時ニ二個ノ同大ナル組織片ヲ移植スルモ一個ノ腫瘍トシテ發育セリ

九、前回移植ニ於テ陰性ヲ呈シタルモノニ更ニ次回移植セシニ又陽性成績ヲ得タルモノアリ、故ニ動物ニ特別ノ素因關係ナキモノヽ如シ

十、前回移植ニ於テ陽性ヲ呈セルモノニ更ニ一定時日ヲ經過シテ次回他ノ部分ニ移植セシモ其成績陰性ニ終レリ（但シ使用家鳩ハ三羽）

十一、移植腫瘍ノ組織的觀察ハ各世代ヲ通ジテ原發腫瘍ノ所見ト大差ナク、移植回數ヲ重ヌルニヨリ腫瘍ノ形態肉芽腫瘍ノ鏡像ヲ增加シ、且壞疽破壞ノ傾行强キ狀況ヲ呈セリ

十二、腫瘍ノ細菌的檢查　組織切片ニ就テ諸種ノ細菌染色檢查ヲ行シモ遂ニ證明シ得ズ（チール、ガベット氏法ベー、フレンケル氏法リョフレル氏法グ

一程度マデ發育增大セル腫瘍ガ數十日ヲ經過セル後萎小シ或ハ全ク吸收セラルヽコトアリ、此萎小セル者ノ組織的像ハ腫瘍組織裡ニ處々壞死竈現ハレ健體ノ腫瘍細胞群ハ島嶼狀ニ殘存セリ、或ル標本ニテハ明ニ腫瘍細胞群ヲ認メシムルコト無クシテ硬化セル硝子樣結締織ヨリ成リ恰モ肉芽組織ノ觀ヲ呈ス然レドモ兩者全然相異ルモノニ非ズシテ移行的ノモノタルヲ知ルベシ卽チ肉芽的組織像ヲ呈スルモノニテモ或ル標本ニテハ尙其組織裡ニ多少ノ腫瘍細胞群ヲ認メシムルモノアレバナリ

斯ク周邊母組織反應ハ腫瘍細胞ノ進入ニ對スル被移植動物組織細胞ノ防禦作用トノミ目スルコトヲ得ズシテ此反應旺盛ナル部ニハ腫瘍細胞ノ發育佳良ナル部少ナカラズ然レ共素ヨリ母組織反應ガ著シク强盛ナル時ハ腫瘍細胞ノ增殖ヲ妨害ス、之レ腫瘍ノ發育不良ナル例ノ吸收現象ニ於テ腫瘍組織ハ肉芽組織ノ觀ヲ呈スルニヨリテ明カナリ(自抄)

○學會演說

演說第二乃至第八ニ對スル附議

一、　林　直助君

緒方博士ノ御演說ニヨレバ當敎室(東京)ニ於テモベルケフェルド濾過液ニヨリ鷄腫瘍發生シ來ラントスル傾向ヲ表シ來レルハ私ノ衷心喜ビニ堪ヘザル處ナリトス、之レヲ以テ京都大學トノ二敎室ノ成績一致シ來リシ所ナレバナリ、次ニ緒方博士ハ私ガ以前ヨリベルケフェルド濾過器ノ無號ノモノヲ使用セシヲ難ゼラレルガ如ク昨年雜誌上拜見シタルモ、私ガ同器ヲ用ヒ濾過ノ際ニハ必ズ靈菌ヲ混ズルヲ以テ、同菌ノ濾過如何ガ濾過器ノ效力ヲ證明スル次第ニシテ、番號ノ有無ハ問フ處ニアラズト信ズ言ヲ換フレバ余ハベルケフェルド無記號ノ濾過器ヲ用ヒルトモ、其濾液ハ靈菌ヲ通過セザルモノナル故ニ、靈菌ヨリ大ナル細胞ノ通過セザルハ云フ迄モナキ處ニシテ、其濾過シ得ベキ原因

ラズ。蓋シ人體ト下等動物トノ間ニハ其組織ノ構造及性質ノ差異アリ疾病ハ此構造性質ヲ基礎トシテ發現スルモノナレバ人類ノ疾病ト全然同一ナルモノガ必ズ下等動物ニ在ラザルベカラズトナス理由無ク故ニ兩者ノ間ニ幾多ノ差異ヲ示シ來ルコト固ヨリ何等怪ムルニ足ラズ、然レドモ余輩ハ今直ニ此小實驗ヲ根據トシテ果シテ腫瘍ナリ、又肉芽性腫瘍ニアラズト云フ斷定ヲ下スコトニ躊躇スルモノナリ、然レドモ余輩ハ前述ノ移植實驗其他ノ成績ニヨリテ其鏡的所見ノ如何ニ關セズ腫瘍ナリトノ推定ヲ下サント欲スルモノナルモ茲ニ猶幾分ノ疑問ヲ保留シテ其移植實驗ヲ報告シ同好諸士ノ參考ニ資セント欲シ從ヲ後日ノ研究ヲ俟ツモノナリ（自抄）

第八　鼠肉腫ノ發育及ビ吸收ノ組織的所見

京都醫學大學病理學教室
醫學士　藤繩喜代藏　君

鼠肉腫ノ發育初期ノ狀態ヲ知ランガタメ移植後二十四時間乃至十日ヲ經過セルモノニ就テ組織的檢査ヲ行ヘリ、移植後第四日目ノモノニ於テ始メテ確カニ腫瘍組織ノ發生ヲ認メソレヨリ以前ノモノハ炎症性增殖ヲ示スニ止マレリ、插入腫瘍移植片ハ第三日目迄ハ尙生存セルモソレヨリ後ハ全ク壞死ニ陷レリ而シテ被移植腫瘍片周緣部ノ細胞ガ主トシテ增殖スルコトニヨリテ移植腫瘍ハ新生ス此新生セル移植腫瘍周邊部ニハ常ニ淋巴球ノ浸潤、母組織細胞ノ反應性增殖アリテ此部ニ遊走細胞（主トシテ單核ナル生體染色陽性ノ細胞）ノ集簇アル外結締織成形細胞ノ新生アリ、此新生結締織成形細胞ハ母組織血管ヨリ新生セラレタル血管ヲ伴ヒテ腫瘍組織裡ニ進入スルモ腫瘍構成分ノ主要ナルモノニ非ズ

何種ノモノヲ通過スルガ何種ノモノハ通過セナイト云フコトガ實驗セラレテ居ルノデ家鷄肉腫ノ濾過性病原體ノ場合ニモ同樣ナ關係ガ證明セラレルカ否カヲ定メルコトハ濾過性病原體ノ存在ヲ一層確實ニスル爲メニ必要デ有ルト考ヘマス、ルース氏ハ濾過性病原體說ヲ立テタ根據トシテ此事ヲ證明シテベルケフェルドVヲ容易ニ通過スルガNヤWハ其レ程容易ニハ通ラナイト申シテ居リマス、私共ハ林敎授ガ此關係ヲ明カニセラレンコトヲ望ミマシタノデ無記號ノモノヲ使用セラレタノヲ難ジタ積リデハナカツタノデ有リマス

三、 加藤竹男君

私ハソコニ御覽ニ供シアル所ノ可移植性家鷄纖維腫標本ノ說明トシテ、且ツハ昨年私ノ報告セシ可移植性家鷄纖維腫ノ其後ノ經過ニ就キテ一言加ヘマス。昨年報告ノ當時ハ僅カニ第五移植世代迄ノ者ナリシガ今年度ハ只今藤浪先生ノ演說中ニモ一寸現ハレアル如ク自今第十一移植世代ヲ重ヌタルガ、本腫瘍ハ昨年ノ如ク全ク同樣ノ條件ノ下ニ於テ移植サレアルモノナルガ、各世代今ニ至ル迄原發腫ト殆ンド同似ノ形態(肉眼的及鏡檢的)ヲ保持シテオリマス。コハ余等ノ他方ノ軟骨腫ガ移植世代ヲ重ヌタルニ從ヒ纖維肉腫狀ト成リ遂ニハ粘液肉腫狀ト成リタル者ニ相對比シテ本腫瘍ガ比較的尙能ク其特性ヲ維持シツヽアルコトノ事實ヲ事實トシテ一寸補言致シマス尙今後ノ經過ヲ見ル積リデアリマス(標本供覽)

四、 藤浪鑑君

動物腫瘍殊ニ可移植性鷄腫瘍ノ研究ガ我國ニ於テ斯ク興リタルコトハ、誠ニ喜ニ堪ヘズ。之ニ關シテ幾多ノ新キ進步ノ促ガサレタルヲ慶ブ可シ。生活細胞無キ濾過液ニヨリテ移植ノ成功シ得ルコトハ、今年度ニ至リ緒方博士ニヨリテモ亦是認セラレントス。余ハ之ヲ以テ最早ヤ事實ナリト認メ居

物アリトセバ靈菌ヨリ形態小ナリトスル處ナリトス

清野博士ニ答フ

清野博士ハ余ノ鷄卵内癌組織移植ニヨリ發生シ來ル癌腫樣組織ヲ以テ、單ニ刺戟ニヨリテ反應シタルモノヽ如クニ云ハルヽモ、實際ニ於テ然ラズ、其理因ハ表中ニ示セルガ如ク、對照試驗卽チ「ノルマール」ノ卵巢組織ノ移植ノ場合ニハ、結締織增殖モ上皮ノ增殖モ之レヲ認メザルニ、癌組織移植ノ場合ノミニカクノ如キ結節ヲ形成シ上皮ノ增殖ヲ起スハ、何等カ癌組織内ニ於テ特別ノ刺戟物存在スルト稱スルヲ得ベケン。又結締織ノ增殖ガ、單ニ肉芽組織ナリトセバ、私ノ實驗上肉腫鷄卵内移植ノ場合ニ見ル處モ、亦肉芽組織トナルベク、延テハ清野博士ノ肉腫鷄卵内移植試驗モ、亦肉芽組織トナリテ無意義ニ終ラザルヲ得ズ。要ハ實物標本ノ上ニアレバ、私ノ標本ヲ一應御覽ヲ願ヒタシ

二、

緒方知三郎君

「カルミン」デ染色シタ家鷄肉腫片ノ移植後ニ其肉腫片カラ離レタ所ニ肉腫ガ發生シタト云フ藤浪敎授ノ御實驗ハ本腫瘍發生ノ學說ニ向ツテ一新實證ヲ與ヘラレタモノデ有意義ノ御實驗ト存ジマス、私共モ御示敎ヲ願ツテ此實驗ヲ行ツテ見タイト思ヒマス

林敎授ハ御質問ハ私共ガ硅土末ヲ濾過前ニ腫瘍乳劑ニ加ヘタモノト誤解セラレタ爲メカト考ヘマス私共ハ濾過液ニ硅土末ヲ加ヘテ注射シタノデスカラ腫瘍ノ發生ニ向ツテ硅土末ノ存在ガ幾分カ關係シテ居ルラシイノデ有リマス、ルース氏ハ腫瘍ノ發生ヲ容易ナラシムルコトヲ實驗シテ居マス

林敎授ハベルケフェルド無記號濾過器ヲ用ヒテ本腫瘍發生原因トシテ濾過性病原體ヲ認メラレタ樣ニ存ゼラレマス、從來證明セラレタ各種ノ濾過性病原體ハ其ノ大サガ一定シテ居ル爲メニ濾過器ノ

ノ肉腫及一例ノ多發性有莖卵巢囊腫ヲ見タリ十二例中十例ノ癌腫卽チ八三三・%ナル驚ク可キ數字ヲ得タルハ鳥商ノ癌腫性脹滿ヲ他ヨリ良ク鑑別シ得ルニ至レルニヨルナル可シ、癌腫十例中五例ハ卵巢ニ原發セルモノ他ノ五例ハ輸卵管ニ原發セルモノト見ラルヽモノナリ總テ腺腫性癌腫ニシテ處處ニ轉移ヲ作レリ、前者卽チ卵巢原發癌ノ或ル一例ヱ於テハ副卵巢髓索ヨリ腺癌胞巢ヘノ移行像ヲ明ニ見ルヲ得タリ、之レ恐ク副卵巢髓索ヨリ腺癌腫發生ヲ證明シ得タル第一例ニシテ人類卵巢癌腫ノ發生ニ對シ大ニ參考トナル可キモノナリ、後者卽チ輸卵管原發癌ト思ハルヽモノヽ、或ル一例ノ如キハ卵巢ニ著シキ變化無ク輸卵管ニ癌腫ノ原發竈アリ殊ニ珍シキハ著大ナル肝臟轉移ニシテ人類ノ胃癌等ヨリ肝臟轉移ヲ起セルモノト同型ニテ其轉移結節ハ甚多ク血行性轉移ト見ル可ク表面ニ位セルモノハ明ニ癌腫ヲ成セリ

○學會演說

肉腫ノ一例ハ大圓形細胞肉腫ニシテ後腹壁ヨリ發生シタルモヽ如シ（自抄）

第十　犬ノ多發性腫瘍乳房腫瘍（「スプレノーム」）ノ一例及其他

東京醫科大學病理學教室
農學士　市川厚一君

約十歲ノ骨骼强大、榮養可良ナル茶褐色ノ牝犬ヲ剖檢シ鏡檢セルニ次ノ如キ種々ナル興味アル腫瘍ヲ發見セリ卽チ

一、乳房腫瘍（八ケノ乳房ニアリ各原發）

（イ）乳嘴性囊腺腫（左側第三及第六、右側第三及第五乳房）

（ロ）纖維性乳嘴性囊腺腫（右側第四、左側第五乳房）

（ハ）乳嘴性囊腺腫性軟骨肉腫（右側第六乳房）

（ニ）纖維性（乳嘴性囊腺腫）軟骨肉腫（左側第四乳房）

ルナリ。濾過液試驗ニ於テ「キーゼルグール」ヲ加ヘテ良成績ヲ收メタリト云フコトハ、亦其理ノ想像セラレ得ルモノ無キニ非ズ（例之バ、之ニヨリ若干炎性變化ノ生成ヲ助ケ腫瘍組織發育ニ資スル血管ノ生成ヲ好適ナラシムルガ如キ）蓋、本腫瘍ノ移植ニ當リ移植セラレタル細胞其物ノ增殖ト云フガ固ヨリ主要ノコトナリ。然レドモ唯之ノミガ唯一ノ新生方法ニ非ル可キコトハ、無細胞濾過液ニヨリテ、移植腫瘍ノ發生シ得ラルヽ一事ニヨリテモ知リ得可シ。而テ其他ノ移植方法ニ依リタル試驗ニ徵シテモ亦之ヲ揣摩スルニ足ル可シ。然レドモ斯ル際ニ於ケル腫瘍ノ組織的、細胞的發生ノ理ヲ完全ニ捉ヘ得ン爲メニハ、尙多クノ精緻ナル研究ニ待ツ可キモノアリ。蓋、現今ノ所ニテハ、腫瘍ノ意義ニハ漠然タルモノアリ。現今ニ於テハ腫瘍ヲ原因上ヨリシテ之レガ範圍ヲ定メ分類ヲ行フコト能ハズ。肉芽組織ト腫瘍トノ關係ノ如キモ、尙研究ヲ要スルモノ多シ。此等ノ問題ニ對シテモ此鷄腫瘍ハ亦甚興味アル好箇ノ比較研究材料ナリ。此鷄肉腫ハ腫瘍タル態度明白ナリト同時ニ、他方ニハ時ニ人體ノ肉芽腫瘍トモ似通ヒタル性質ヲ示スコト亦無キニ非ズ。但、此際吾人ノ意ヲ用ユ可キモノアリ。卽此種ノ新キ動物腫瘍ヲ研究セムトスルニ當リ、强テ是迄既知ノ人體ノ病理ニノミ拘泥スルコト無キヲ要ス。新シキ研究ニハ新シキ面目ヲ備フ可シ。唯事實ヲ事實トシテ之ヲ採求シ之ヲ基礎トシテ步一步進ム可ナリ

第九　鷄腹腔內腫瘍就中癌腫ノ知見增補

東京醫科大學病理學教室
醫學博士　山極勝三郎君
醫學士　大野精七君

著者等ハ大正四年五月ヨリ九月迄デノ間ニ於テ鳥商ヨリ脹滿トシテ得タル十二例中十例ノ癌腫一例

ノ高度ナルモノアルニ由リ此ノ多發セルハ慢性囊胞性乳房炎ノ母地ニ發セルニ由ルモノト考フルモノニシテ此多發セル事及間質ガ次第ニ軟骨肉腫ニ變ゼル事ハ蓋シ注意スベキ事ナリ、コレ乳房ニ見ル混合腫瘍ノ發生ニ對シ興味アル所見ナリト信ズ

（自抄）

第十一　人工的皮角ノ發生ニ就テ

東京醫科大學病理學教室
農學士　市川厚一君

從來人類及ビ動物ニ於テモ其頭部、前額、上下肢、眼瞼又ハ陰莖龜頭等ニ皮角ヲ發生セリトノ報告ナキニアラザリシト雖比較的稀有ナルモノナリ然レドモ人工的故意ニ皮角ヲ發生セシメタル報告ハ未ダ之レ無キガ如シ然ルニ山極博士ノ指導ノ下ニ癌發生試驗ニ共同從事中多數ニ發生セシメ得タル「パピローム」ヨリ皮角ノ發生スルヲ經驗シ且ツ如何ナル「パピローム」ヨリ發生スルヤヲ實驗シ角化性ノ大ナル廣基底及細莖ノ「パピローム」ヨリ一定時日後ニ於テハ皮角トナリ得ルモノナル事ヲ知レリ、其一定時日前ニ於テハ一時皮角樣ニナルモ次第ニ縮小ス卽チ「テール」ヲ一乃至二日置ニ兎耳翼ニ塗擦スル事ニヨリ上述ノ如キ「パピローム」ヲ多數發生セシメ得ルモ其反復持續スル「テール」ノ刺戟ニヨリ次第ニ局所上皮ハ惡性―腫瘍性能ヲ獲得スルモノニシテ一定時日前ニ於テハ一時皮角樣トナルモ「テール」塗擦中止ト共ニ縮小シ一定時日後ニ於テハ其中止後益〻發育增大シテ約三百日ニ至ル今日尙縮小セザル皮角ヲ發生スルヲ得タル所以ナリト信ズ

皮角ノ形ハ圓錐形、犀角形、牡羊角形、椎實狀等實ニ種々ナリ、大サハ長徑大ナルハ一寸七分小ナルハ一二分其基部ノ周圍大ナルハ二寸餘小ナルハ二三分ニシテ種々ナリ

皮角ハ「テール」塗擦ノ中止後ニ上述ノ如キ「パピ

（ホ）軟骨肉腫ノ轉移（右側鼠蹊淋巴腺內）
（ヘ）乳嘴性囊腺腫ノ轉移（左側肺臟內）
二、「スプレノーム」——櫻實大
三、甲狀腺腫（左側）——小雀卵大
四、膣筋腫——小雞卵大
五、輸卵管筋腫——大豆大
六、卵巢囊腫——粟粒大ヨリ小雀卵大囊胞ヨリナリ小雞卵大
七、「ポリープ」狀纖維性上皮腫——大豆大內外十個
八、「ポリープ」狀腺腫（腸）——豌豆大
九、粘液腺肥大ニヨル異常環狀瘤形成（食道上部）
以上ノ內殊ニ「スプレノーム」ハ萎縮脾ノ一部ニアリシ限界明瞭ニシテ脾材ニヨリテ圍繞セラレ腫瘍內ニハ脾材ト認ムベキモノ殆ンド無ク、唯脾質及濾胞ノ肥大シタルモノ及ビ擴張セル脾竇ヨリナル、他臟器等ニハ之ニ類スル結節狀物ナシ故ニ著者ハ以テ肝臟ノ結節狀肥大又ハ「ヘパトーム」又ハ「リンホーム」ニ比スベク又 Schridde ガ一例全ク同一性狀ノモノヲ人脾ニ發見シ「スプレノーム」ト命名セルガ如ク以テ「スプレノーム」ト本腫瘍狀結節ヲ命名セルナリ

乳房腫瘍ハ皆原發腫瘍ニシテ殊ニ左右兩側ノ後方ニ位スルモノ八個四對ニアリ、大サハ種々ニシテ性狀ハ八個ヲ通ジテ乳房嘴性囊腺腫ナリ然シ其間質結締織ヲ見ルニ或ルモノニ於テハ纖維腫狀——紡錘狀細胞肉腫狀——軟骨肉腫トナリ全ク間質結締織ノ反應ナキモノモアリ而シテ其內囊腺腫及軟骨肉腫ハソレゾレ轉移ヲ形成セリ依ッテ著者ハ其多發ナル事大サノ種々ナル事等又其上皮及結締織ノ關係ヲ見ルニ恰モ著者等ガ「テール」ヲ兎耳ニ塗擦シテ皮角及癌腫ヲ發生セル際ノ所見ニ徵シアル慢性炎性ノ刺戟ニ由ル上皮又ハ結締織ノ反應ニ類スルヲ以テ殊ニ或ルモノニ於テハ今日モ細胞浸潤

「人工的「パピローム」ノ發生ニ就テ」報告シ、昨年九月ニハ「人工的癌腫ノ發生ニ就テ」(第一報)ト題シ豫備及第一回本試驗ノ成績殊ニ多數多種ノ「パピローム」及二例ノ癌腫性浸潤性發育ヲナセルモノヲ發生セシメ得タル事ヲ發表セリ、此癌腫性ノ二例ニ於テハ其組織的像ハ勿論其一例(第一例)ニ於テハ癌索ト認ムベキ者淋巴隙內ニ侵入シ居レルアリ又他ノ一例(第二例)ニ於テ腫瘍細胞ハ靜脈內ニ侵入發育シ爲ニ該部ニ腫瘍血栓ヲ作リ且ツ其軟骨層ヲ突破シテ反對側ニ向ヒテ發育浸潤セル部アリキ。卽未ダ嘗テ兎耳ニハ癌腫ノ報告ナキ或ハ素因ト認ムベキモノナキ部位ニ上述ノ如キ癌腫ヲ發生シタルナリ、然シ其「パピローム」ヨリ如何ニシテ發生セルカノ問題ニ對シテハ其中間型ト認ムベキ少數ナリシ故詳述セザリシモ、其後多數ノ「パピローム」ヨリ標本ヲ作成シ檢索セルニ癌腫ノ初期ト見ルベキモノ四例及同上ニ移行セントシツツアルガ如キモノ(移行型)三例ヲ得タリ今後尙叅「パピローム」ヲ檢スレバ他ニモ上述ノ如キモノナルベシ、又目下實驗中ナル第二回本試驗ノ成績モ甚ダ第一回ノソレニ類シ次ノ如キ結果ヲ得タリ

試驗	「パピローム」ヲ發生セル兎耳數	移行型	癌腫初期	癌腫
第一回	三二	三	四	三
第二回	五三	五	八	二
合計	八五	八	一二	五

以上ノ實驗成績ニ由リ癌腫ハ長期間反復持續セル「テール」ノ塗擦ニ由リ其ノ局所上皮殊ニ毛囊上皮ハ先ヅ違型的ノ增殖ヲ起シ次ニ「パピローム」ヲ生ジ其或者ノ上皮細胞ガ惡性——癌性化シ次第ニ其細胞ハ浸潤性發育ヲナス性能ヲ獲得シ遂ニ上記十二例ノ癌腫初期又五例ノ如キ浸潤性ノ發育盛ニナルモノヲ得タル事明ナリトテ多數ノ標本殊ニ顯微鏡標本及同上寫眞ヲ供覽セリ

著者等ハ又第一回及第二回試驗成績ヲ表示シ比較シ六月乃至十月間ニ實驗ヲ開始セル第二回ノ試驗

ローム」ヨリ發生セルモノニシテ其中止後短時日ナルハ三十餘日ナルモノアルモ既ニ百三十五日目ニ死セル者一疋及二百九十九日ナル今日ニ至ルモノ二疋アリ殊ニ百三十日以上ノモノハ合計三疋六ノミニテ其各ニ多數上述ノ如キ皮角ヲ發生セシメ殊ニ刺戟中止後ニ於テモ長時日間縮少セザルモノヲ發生セシメ得タルナリ

以上ヲ綜合スルニ皮角ハ廣基底及ビ細莖「パピローム」中ノ殊ニ角化性强キモノヨリ發生セシメ得タルナリ然シ偶發的ニ發生セルニ非ズシテ長時日間反復持續セル「テール」ノ刺戟ニヨリ局所上皮ハ所謂違型的增殖ヲ起シ順次腫瘍——惡性化シテ遂ニ山極博士ノ持論タリ著者ノ所信ノ如ク「ハウゼル」ノ所謂一新細胞種ト認ムベキモノ卽チ刺戟物ナル「テール」ヲ拭去シ塗擦ヲ中止セルモ尙其後約三百日ノ今日ニ至ルモ殆ンド縮小セズシテ反ツテ增大シツヽアルモノ又ハ其後肉眼的ニハ殆ンド變化ナカリシ表皮ノ一部ヨリ次第ニ新生增大シテ皮角ヲ發生セルモノアルニ由リ此皮角ハ以テ一時的ノ上皮ノ違型的增殖ヲ超越セル異性腫瘍ノ性能ヲ獲得セルモノタルヤ疑ナキモノト信ズ

從來ノ此種ノ實驗的研究ニ於テ此皮角ノ如キ刺戟ヲ中止シ約三百日ニ至ルモ尙如斯者ヲ發生セル報告ナキト同時ニ比較的稀有ナルモノト信ゼラレタル皮角ガ人工的故意ニ兎耳ニ多數ニ一ケ年內外ノ反復持續セル「テール」ノ刺戟ニヨリ發生セシメ得タリ（動物及標本ヲ供覽）　（自抄）

第十二　人工的癌腫ノ發生ニ就テ

（第二報）

東京醫科大學病理學教室
醫學博士　山極勝三郎君
農學士　市川厚一君

著者等ハ人工的癌發生試驗ニ著手以來第四回病理學會ニ於テ「違型的上皮增殖ニ就テ」同五回ニハ

ノ得ラレタル如キ好結果ヲ得ナイノデアリマス、木「テール」及ビ「コールテール」ヲ塗布スルコト已ニ百五十日位ニナリマスガ、只「パピローム」丈ケシカ出來ナイノデアリマス、勿論家兎ノ固性ニヨルモノデモアリマセウガ、或ハ又「テール」ノ種類ニモヨルモノデハナイカト思ッテ居マス

次ハ今オ述ベニナッタ轉移様ノ腫瘍ノ發生デアリマスガ之ハ實際ノ轉移ヲ作ッタトカ或ハ片方ノ耳ニアル腫瘍ノ液汁ガ附著シテ、其處ニ新ラシキ腫瘍ヲ作ッタトカ考フルノ外ニ尚一ッ其耳ノ裏面ニハ矢張「テール」ガ塗ッテアルノデアリマスシ、又他方ノ耳ヨリ「テール」ガ常ニ其處ヘ附キ得ルノデアリマスカラ此等ノ「テール」ノ直接刺戟ニヨリテモ腫瘍ノ出來得ルコトヲモ考ヘチバナルマイト考ヘマス

二、

市川厚一君

「テール」ノ種類及ビ個體ニヨリテ「パピローム」又ハ癌腫ノ發生ニ差アルデアラウトノ事デアリマスガ私共モ已デニ先日講演ノ際又ハ雜誌ニアル通リ確ニ左様ナ事モアラウト思ッテ居リマス

他方ノ耳ヘ出來タモノヲ私モ勿論轉移ダトハ申サナカッタノデアリマス只丁度ソノ部分ガ——癌第四例ノ外面ガ内面ノ様ナ性狀トナリ潰瘍狀ニナッタ其部ニ接スル部デアッテ又芳我君ハ内面ヘ塗ッタ「テール」ガソノ外面ヘトカ又其方ノガ他方ノ耳ヘ附著シテ云々ト云ハレマスガ私共ノ今回ノ「テール」ノ塗リ方デハ殆ンド左様ナ事ハナク又左様ナ例ハナカッタノデアルカラ時々接觸シタ爲メデナカラウト申シタ計リデアリマス

三、

藤浪鑑君

「テール」塗抹ヲ中止シタル後、尚何日間程、癌性上皮細胞增殖ヲ繼續シタルモノ最モ長カリシヤ腫瘍ノ命名ハ(臟器ヨリモ寧ロ)之ヲ構成スル細胞ニヨリテスルヲ以テ可ナリトスル持說ナリ。此「ス

ハ主トシテ冬期ニ開始セル第一回ノモノヨリ其「パピローム」ヲ發生スル事一般ニ遲カリシハ之レ季節ト其發生ノ間ニ關係アルモノナラントセリ、然シ其ノ長期間持續セルモノニ於テハ供試兎耳ノ殆ンド何レノモノニモ「パピローム」ヲ發生スル事ヲ得タルハ第一及第二回ニ於テモ同樣ナリト報告シ終リニ著者等癌ノ第四例トナセル癌腫ヲ有スル生存セル兎ニ就キ癌腫ノ發生ニ就キ次ノ如ク說明セリ

癌第四例ハ試驗開始後百三十三日目ニ廣基底「パピローム」發生——發育旺盛——百九十七日ニハ二・三仙迷ノ直徑ヲ有スルモノトナリ肉眼的ニモ顯微鏡的ニモ癌腫ノ性狀ヲ呈ス、故ニ移植試驗ヲ二十疋(四十個所)ノ家兎ニ行フ——(移植試驗成績ハ從前ノモノヨリ有望ナリシモ發育增大セルモノナシ)——移植セン爲メ大部分ヲ又當該部軟骨層ノ一部ヲ切除セルニソノ殘存セル部ハ一時縮小ニ傾キシモ約一ケ月後ニ於テハ再ビ發育旺盛トナリ二百七十三日ナル三月十五日ニ於テハ直徑三仙迷ニ達シ其大部分ヲ切除セル當時ヨリ大ナル侵蝕性潰瘍狀トナリ且ツ反對側ニモ同樣ナル性狀ヲ有スル潰瘍ヲ生ジ且ツ此ノ潰瘍狀部ノ時々接觸セル反對側ノ兎耳ニ同樣ノ性狀ヲ有スル「パピローム」狀物ヲ生ゼリ之レ果シテ接觸セル爲カ斷言シ得ザルモ該動物ハ尙健在ナレバ次回ニハ轉移ヲ生ゼシメ得ベキ一縷ノ望ヲ屬シツヽアルモノナリ、(現ニ耳根部淋巴腺腫大セリ)該部ヘハ上述ノ如クナレバ三月十五日來「テール」塗擦ヲ中止セリ然ルニ(四月六日)今日尙發育シツヽアリ(動物供覽)

(自抄)

演說第十乃至十二ニ對スル附議

一、　芳我石雄君

私モ此問題ニ關シテハ已ニ長ク研究シテ居ルモノデアリマスガ、不幸ニシテ未ダ山極先生、市川君

家ノ卵黄、腦、「コレステリン」等ヲ以テ持續シテ飼養セル實驗ニ於テハ全ク如此事實ノ記載ヲ見ズ元來「ラノリン」ハ羊毛脂ニシテ「アルコール」トシテハ「コレステリン」ヲ主トシ其他數種ノ「アルコール」アリ脂肪酸ノ種類モ亦數種アリ、家兎ニハ毎日其五瓦宛ヲ與ヘ（體重ニ拘ラズ）最長二百五十四日ニ及ビシガ之ニヨリ起ル血管系肝臟脾臟其他身體諸部ニ於ケル脂肪及類脂肪質ノ沈著ハ大體ニ於テ卵黄肝粉又ハ「コレステリン」ヲ以テセルト大差無ク唯一般結締織系ニ於ケル沈著特ニ顯著ナルガ如シ胃ニ於ケル所見ハ甚ダ特異ニシテ百八十日以上ニ亙レル者九例中七例ニ於テ一定ノ變化ヲ顯ハシ其中二例（百八十一日及二百二十二日）ニアリテハ幽門部ニ於テ散在性ニ粟粒大乃至麻實大ノ結節ヲ數個發生セルノミナルモ三例（百八十二日、百八十九日及百九十日）ハ殆ンド同樣幽門小彎部ニ卵圓形乃至「クローバ」葉狀限局性扁平ノ隆起ヲ生ジ其

直徑一・三乃至二糎ニ及ビ表面腦廻轉狀細皺襞ヲ呈スルヲ見タリ此部粘膜ノ厚サ二乃至三・五粍ニ及ブ殘餘ノ二例（二百四十七乃至二百五十四日）ニ於テハ病變最モ顯著ニシテ共ニ幽門部ニ於テ胃底腺部ト判明ニ境界ヲ劃シテ灰白色乃至灰白黄色ヲ呈シ各所ニ不正疣狀乃至乳嘴狀ノ增殖ヲ呈ス二例共ニ幽門ニ接シ小彎部ニ於テ最モ著シク甲ニアリテハ直徑一・二糎ノ不正形結節狀膨隆ヲ呈シ乙ニアリテハ同樣二・五糎ノ直徑ヲ有シ粘膜ノミノ厚サ八粍ニ及ベル乳嘴樣隆起アリ爲ニ幽門ノ狹窄ヲ來シ胃擴張ヲ伴フ此大結節ノ附近ニ於テ尙大小種種ノ疣狀乃至乳嘴狀增殖アリ鏡檢上各例粘膜肥厚部ニアリテハ固有粘膜及粘膜下組織ニ於テ組織球ニヨリテ攝取セラレタル重屈性類脂肪質「コレステリンエステル」ノ沈著ヲ來シ而シテ一方腺管ノ迂曲延長ヲ來スト同時ニ腺間固有粘膜結締織ハ表面ニ向テ複雜ニ分岐增殖シ腺管ノ延長セル者又類

プレノーム」ハ果シテ眞ノ腫瘍ナリヤ、將タ組織畸形ナリヤ

四、

市川厚一君

私共ハ上皮ノ癌性化スルノハ次第々々デアルト信ジマスノデ今日迄ハ鏡檢上ハ癌腫ト認メ得ベキモノニテモ一層惡性化セシメ樣ト思ヒ「テール」塗擦ヲ中止シナカッタノデアリマス勿論癌ガ澤山出來レバ中止モシテ見タイト思ッテ居リマス現存スル癌第四例ハ表面潰瘍狀デ塗擦スルモ附著シテ居リマセンカラ又發育モ盛ンデアリマスカラ先月ノ十五日カラ「テール」塗擦ヲ中止シテ居リマス然シ少シモ發育ハ衰ヘテナイ樣デアリマス

「スプレノーム」ハ私ハ肝臟ニ見ル結節肥大又ハ「ヘバトーム」ニ比較スベキモノデ本來ハ或ハ組織畸形ト考フベキ母地ヨリ發生シタ眞ノ腫瘍樣ノモノト信ズルノデ「スプレノーム」トシタノデアリマス。其ノ命名ニ關シテハ私ハ第一ニコノ種ノ報告ハ人類動物ヲ通ジテ Schridde ガ一例人脾ニ發見シタル事ガアル許リデアリマスカラ又氏ガ「スプレノーム」ト命名シマシタ故上述ノ次第デ私モ兎ニ角其ノ命名法ヲ用ヒテ置クノデアリマス

第十二「ラノリン」ヲ以テ飼養セル家兎ノ胃ニ發生セル腺腫ニ就テ

東京慈惠醫學專門學校病理學教室
醫學博士　今　裕君

演者ハ類脂肪質新陳代謝障碍ノ研究ヲ目的トシ多量ニ「コレステリンエステル」ヲ含有スル無水「ラノリン」ヲ以テ長時日間家兎ノ飼養ヲ試ミシガ百八十日以上ニ亙レル者ノ大多數ニ於テ胃幽門部ニ於テ腺腫性增殖物ノ發生ヲ發見シ其大要ヲ報告セリ、演者ハ前年卵黃ヲ以テ飼養セル家兎胃幽門部ニ固有粘膜ニ「リポイド」ノ沈著ヲ來シ多少疣狀ヲナセル不正ノ隆起ヲ見タルヲ報告セシガ從來諸

二、初生兒又ハ胎兒ノ皮膚ヲ細片トシ其ノ母體又ハ同種他動物ノ皮下ニ移植ス試驗數四三內陽性三六(八三・五%)

此兩實驗ニ於テ陽性ナルモノハ移植後十日乃至二週ニシテ其局所ニ米粒大ノ結節ヲ觸レ漸々增大シ一ケ月ノ後ニハ豌豆大ニ達シ其儘久シク止マルコトアルモ漸々縮小シテ遂ニ失ハル、ヲ常トス豌豆大結節ヲ摘出シテ檢スルニ一般ニ數個ノ囊腫ヨリ成リ內容ハ毛皮脂等ヨリ成ル組織的處見ハ全ク表皮樣囊腫ニ一致シ時トシテ皮脂腺毛囊ノ茂生甚シキコトアリ一般ニ周圍ハ炎性浸潤ヲ伴フ

三、胎兒細片ヲ其母體又ハ同種他動物ノ皮下又ハ腹腔內ニ移植ス試驗數(皮下)三〇內陽性十三(四三・三%)(腹腔內)五七內陽性三二(五六・二%)

陽性ナルハ十日乃至二週ニシテ何レモ局所ニ結節ヲ觸レ漸々增大ス殊ニ腹腔內ニ於テハ鳩卵乃至鷄卵大ニ達スルコトアルモ數ケ月ノ後ニハ小トナリ遂ニ失ハル、ヲ常トス

其發生物殊ニ腹腔內ノモノハ結節囊腫ノ混成ニシテ甚シク大ナルモノハ壞死物ヲ內容トスル囊腫ナリ組織的處見ハ「テラトーム」ニ一致ス卽骨、軟骨、骨髓腔(骨形成骨吸收ノ像ヲ見ルコトアリ)腺囊腫(消化器呼吸器又ハ生殖腺ヲ現ハスモノ)皮膚囊腫又ハ單ニ扁平上皮細胞囊腫、齒牙發生、滑平筋、胎生結締織、胎生肝臟形態又ハ神經節等

尙コノ試驗ニ於テ

一、其母體ニ移植セシト其同種他動物ニ移植セシト比較スレバ前者ノ方多少ノ良結果ナリ

二、雌雄ニ於テハ雌ノ方良ク若キモノハ老ヒタルモノヨリ良結果ナリ

三、一ケ月乃至二ケ月ノ間ニ於テ最モ發育大ナリ

四、胎兒ノ大サハ却テ大ナル方良結果ヲ得

五、腫瘍ノ發育ヲ增大セシムベキ法トシテ四%「エーテル」水寒冷等ノ前處置ハ何タル效果ヲ認メ

脂肪質ヲ含メル所謂假性「キサントーム」細胞ニヨリテ變位シ造構益〻複雜トナリ全然腺腫ト比較スベキ像ヲ呈スルニ至ル但シ固有粘膜內ニ於ケル粘膜筋ト腺管トノ關係ハ甚ダ複雜ナレドモ未ダ腺管ノ確實ニ粘膜下組織ニ侵入セルモノ無ク腺管ニ於ケル核分剖像ヲモ證明スルニ至ラズ演者ハ上述ノ所見ヨリシテ之ヲ類脂肪性物質ノ沈著ニ因スル腺腫ト做シ從來ノ卵黃又ハ「コレステリン」飼養試驗ニテ斯ノ如キ報告ニ接セザル點ヨリ見テ「コレステリンエステル」以外別ニ「ラノリン」中ニ含マルル物質ノ作用ニアラザルヤヲ疑ヘリ而シテ演者ハ其發生部位ノ關係常ニ略〻一定シ潰瘍及胃癌好發部ニ一致スルコトハ最注意ス可キ顯象ニシテ長與博士ノ證明セルガ如キ血管分布ノ關係ニヨルモノ可キヲ述ベタリ

（自抄）

演說第十三ニ對スル附議

一、藤浪鑑君

頃日、白鼠ノ前胃ニ自然的ニ發生シタリシ乳嘴腫、若クハ腺腫狀組織增殖ヲ見タルコトアリ。此動物モ其レ亦腫瘍發生ノ試驗ニ適スルモノナランカ

二、村田宮吉君

余ハ實驗的胃ノ出血性「エロジオン」形成ニ關スル實驗ノ際英人某ノ白鼠ヲ多數同一圓筒內ニ飼養スル事ニヨリテ白鼠ノ前胃ニ潰瘍ヲ生ジ是レヨリ「パピルローム」ヲ發生スルコト多シトノ記載アルヲ見タリ右追加ス

第十四　胎兒組織移植試驗

傳染病研究所病理部

醫學士　松山陸郎君

余ハ昨年以來白鼠ヲ用ヒテ胎兒組織ノ移植試驗ヲ行ヒタリ

一、初生兒ノ乳腺原基ヲ細片トシ其母體又ハ同種他動物ノ乳腺內ニ移植ス試驗數十一內陽性七（六三・六%）

髓質部ニ原發セシ約拇指頭大ノ胎生的「シンパトーム」ニシテ其肝臟ニ於ケル轉移狀態ハ頗ル特異ニテ腫瘍細胞ハ殆ンド全ク瀰蔓性ニ浸潤シ其間到ル所粟粒乃至麻仁大ノ灰白色小結節アリ、一見徵毒性燧石肝ノ觀アリ、之レ此報告アル所以ナリ尙ホ他側副腎、兩側肺臟、心臟及脾臟等ノ血管中ニモ腫瘍細胞血栓アリシガ骨髓及腎臟ニハ之ヲ認ムルコト能ハザリキ（自抄）

第十七　硬變肝ニ於テ二種ノ腫瘍（「ヘパトーム」紡錘形細胞肉腫）ヲ發生シタル實例標本供覽

東京三井慈善病院　今村隼稻君

四十七歲ノ男子、肝硬變ト診定サレタルモノ、屍後剖檢ニ於テ、定型的輪狀硬變ニ陷レル肝臟ニ於テ二個ノ略ゝ同大ナル（鷲卵大）異種ノ腫瘍ヲ認メタルモノニシテ組織的所見ニヨルニ一ハ「ヘパトーム」ニシテ一ハ紡錘形細胞肉腫ナリ組織檢査ニヨルニ大凡到ル所門脈枝腔內ニ「ヘパトーム」ノ腫瘍栓塞アリ更ラニ右肺上葉ニ於テ一個ノ約拇指頭大ノ「ヘパトーム」轉移腫瘍アリ、而シテ腹膜面ニハ多數ノ球狀ヲナセル肉腫ノ轉移アリトス、要スルニ本例ノ肝ハ定型的輪狀硬變ノ著明ナルモノニ於テ、以上二種ノ比較的初期ノ腫瘍存在スルハ肝臟ノ硬變性病機ノ基礎ニ發生シタルモノト解シ得ルモノ、如シ而シテ「ヘパトーム」ガ硬變肝ニ發生セルハ其事例ニ乏シカラズ然レドモ肉腫ガ硬變肝ニ發生シタル事實ハ、一汎肝臟肉腫ガ稀有ナルト一樣甚稀レナルガ如ク余ノ知レル範圍ニ在リテハ Dominici u. Merle 氏等ノ例ニ於テ然ル如シ然モ氏等ノ例ハ同時ニ實質肝癌ヲ兼子タルモノニシテ余ノ例ト能ク類似セルモノナルヲ知ル（自抄）

ズ又「シャッラッハ」油四%「エーテル」水針刺等ノ後刺戟ハ却テ縮小ヲ速カナラシム

六、皮下ヨリモ腹腔内移植ノ方良結果ノミナラズ甚シキ大サニ達ス

七、第二移植ハ第一移植陽性又ハ陰性ノ何レニ於テモ移植困難ナリ即多少ノ移植免疫ヲ認ム（自抄）

第十五　膵臓癌

東北醫科大學病理學教室
醫學士　木村男也君

大庭國紀氏研究ヲ代リテ演說セルモノニシテ膵臓尾部ニ胡桃大ノ原發癌アリテ肝ニ小兒頭大ノ轉移アリ横隔膜ノ下面ニハ林檎大ノ散芽性結節累々トシテ相疊重シ腹膜一般ニ散芽アリ肺ニ小轉移アリ檢鏡ハ一見圓形細胞肉腫ノ如キモ精細ニ見レバ癌腫タルコト疑モナク、膵ニ於テハ一般ニ輕度ノ結締織增殖ト特ニラ氏島ノ肥大增殖アリ、癌細胞ハ形態的ニラ氏島細胞ニ酷似スルノミナラズ大庭ノ研究セルラ氏島特殊染色法ニテモ兩者相一致ス可キ點アリ、若シ此ノ點ヨリシテ本腫瘍ヲラ氏島ニ發セルモノトスルトキハ其ノ轉移竈ニ於テ定型的ノ圓柱形細胞トナレルモノヲ發見スル故此ノ點ヨリシテ或ハラ氏島細胞ノ本態乃至ハ之レト膵腺細胞トノ關係ヲ闡明ス可キ一助トモナルベシ、臨牀的ニハ膵ノ機能ノ增大乃至減退ヲ想像セシムベキ症候缺如ス

本例ニハ尙、腎ノ「マルクフィブローム」、腎ノ腺腫、胸腔内軟骨腫（氣管乃至肋骨等ト關係ナシ）肋骨ノ軟骨疣贅等ヲ合併セリ（木村抄）

第十六　一汎性肝臟轉移ヲ來セル副腎惡性髓質腫瘍ノ一例

東京醫科大學病理學教室
醫學士　藤森雄平君

本例ハ生後三十五日ヲ經過セシ一少女ノ右側副腎

雜報

◎社團法人癌研究會第九回定期總會竝第八回學術集談會記事

大正五年四月六日午前十時東京帝國大學醫科大學病理學教室ニ於テ本會第九回定期總會竝第八回學術集談會ヲ開催シタリ定刻其開會ヲ報ズルヤ青山會頭先ヅ開會ノ辭ヲ述ベ次ニ澁澤副總裁病氣ノ爲臨席セラレザルヲ以テ長與理事長告辭ヲ代讀シ（別項參照）續テ細野理事ノ前年中ニ於ケル庶務會計ノ報告（別項參照）ヲ終リ懸賞論文授賞式ニ移リ青山會頭ハ授賞者醫學博士山極勝三郎、市川厚一兩氏ニ賞記及授賞金參百圓ヲ授與シ直チニ學術集談會ニ移リ清野博士ノ「鳥類腫瘍ノ孵化鳥卵内ニ於ケル移植ニ就テ」ヲ初メトシテ約二十ノ演說ヲ了ヘ散會シタルハ正ニ午後六時當日出席セラレタル重ナル諸氏ハ三宅、青山、岡田、佐多、藤浪、富士川、長與、今、清野、林（春）、平山、草間、緒方、川村、杉本、伊丹、林（直）、高木（兼二）、中原、細野等ノ諸士無慮三百餘名ニシテ頗ル盛會ナリキ終リニ左ニ演說者ノ氏名及演題ヲ揭ゲ謹デ其勞ヲ深謝ス

○鳥類腫瘍ノ孵化鳥卵内ニ於ケル移植ニ就テ　醫學博士　清野　謙次君　川上　漸君（京都）

○哺乳類腫瘍ノ孵化鳥卵内ニ於ケル移植ニ就テ　醫學博士　清野　謙次君　川上　漸君（京都）

○家鷄組織（家鷄肉腫）體外培養法ニ就テ　醫學博士　緒方知三郎君　石橋　松藏君（東京）

○家鷄肉腫ノ研究（第二報告）　醫學博士　緒方知三郎君　石橋　松藏君（東京）

第十八　胃ノ「カルチノザルコムー」ノ一例標本供覽

東京三井慈善病院
齋藤次六君

石井某女　二十七歳

臨牀上診斷不明ナリシモノ、死後剖見ニ際シ偶然發見シタルモノニシテ、胃小彎ニ於テ、一方ハ幽門輪マデ一方ハ噴門ノ近クマデ、後壁ハ前壁ヨリ強ク發育シテ其中央ヲ越エ大彎ノ近クマデ瀰蔓性ニ滲潤シ、其長徑約十五仙迷、橫徑十仙迷ヲ算シ、粘膜ハ略ゝ普通ニ見ユルモ處々多少ノ凸隆アル腫瘍アリ

檢鏡上全壁ヲ通ジテ粘液肉腫ト膠樣癌トノ親密ナル混合ヲ示スモノニシテハンゼマン、ヘルクスハイメル氏等ノ云フ眞ノ「カルチノザルコーム」ト云フヲ得ベキモノナリ。由來「カルチノザルコーム」ノ報告ハ非常ニ稀有ナリ、殊ニ胃ニ於テハ余ノ寡聞ナル、一九〇四年クエッケンステット氏ノ五十四歳女ノ一例、同年リップマン氏ノ二十九歳女ノ一例、一九〇八年リンデマン氏四十六歳男ノ一例ヲ見タルノミ　（自抄）

ル可キモノアルニ至リタルハ學界ノ爲慶賀ニ堪ヘザル所ナリ然リト雖モ癌ノ本態ヲ研究スルノ方法ニ於テ深ク思ヲ致シ、或ハ研究補助規程ヲ設ケテ專門學者ノ癌ニ關スル研究ヲ幇助シ、或ハ懸賞論文規程ヲ設ケテ此範圍ニ於ケル學術的研究ヲ奬勵シ、又ハ學術雜誌ヲ刊行スル等ノ事業ニ著手スル等其成績年ヲ逐フテ見ルベキモノアルニ至リタルハ學界ノ爲メ慶賀ニ堪ヘザル處ナリ然リト雖モ本會重要ノ事業タル癌治療院ニ至リテハ、數年來ノ懸案ニ止マリ未ダ實施ノ機運ニ達セザルハ頗ブル遺憾トスル所ナリ、余ハ諸君ト共ニ益〻努力シテ、以テ、本會ノ目的ノ速カニ達セラレム事ヲ希望ス

大正五年四月六日

社團法人 癌研究會副總裁男爵 澁澤 榮一

◎大正四年度庶務報告

（自大正四年一月一日 至同四年十二月三十一日）

○開 會

定期總會 一回

理事會 四回

○會報發行

「癌」業報第九年自第一册至第三册 三回

○寄附金

金六千九百圓

內譯

金五百圓 第一回年賦金 茂木惣兵衛君

金貳百圓 濱田捷彦君

金貳千圓 第一回年賦金 男爵 岩崎久彌君

金貳千圓 同 男爵 三井八郎右衛門君

金貳千圓 服部金太郎君

金貳百圓 第一回年賦金 西脇濟三郎君

○會 員

東京市內會員 百四名

地方會員 百二十七名

計 二百三十一名

○移植シ得ベキ鷄ノ肉腫（武藤系）ニ就テ（第二報告）　武藤　昌知君（名古屋）

○移植シ得ベキ鷄ノ腫瘍ニ就テ（第六報告）　（醫學博士）藤浪　鑑君　加藤　竹男君（京　都）

○動物腫瘍ニ就テ二三ノ新實驗　（醫學博士）林　直助君　向山　孝之君（名古屋）

○鳩ノ腫瘍狀新生物ノ移植ニ就テ　梅原　信正君（京　都）

○鼠肉腫ノ發育及吸收ノ組織的所見　藤繩喜代藏君（京　都）

○鷄腹腔內腫瘍就中癌腫ノ知見補遺　（醫學博士）山極勝三郎君　大野　精七君（東　京）

○犬ノ多發性腫瘍（乳房腫瘍「スプレノーム」及其他）ノ一例　市川　厚一君（東　京）

○人工的皮角ノ發生ニ就テ　市川　厚一君（東　京）

○人工的癌腫ノ發生ニ就テ（第二報告）　（醫學博士）山極勝三郎君　市川　厚一君（東　京）

○胎兒組織ノ移植試驗　松山　陸郎君（東　京）

○膵臟癌ニ就テ　木村　男也君（仙　臺）

○肝臟一汎性轉移ヲ來セル副腎隨質惡性腫瘍ノ一例　藤森　雄平君（東　京）

○硬變肝ニ於テ二種ノ腫瘍（「ヘパトーム」紡錘狀細胞肉腫）ヲ生ジタル實例標本供覽　今村　集稻君（東　京）

○胃ノ「カルチノ・ザルコーム」ノ一例標本供覽　齋藤　次六君（東　京）

◎告　辭

今玆ニ第九回癌研究會定期總會ヲ催フシ、會員諸君ガ研鑽攻究セラレタル業績ノ發表ニ兼テ本會當來ノ發展ヲ協議スルコトハ余ノ欣喜ニ堪ヘザル所ナリ

惟フニ、癌ノ病タル、廣ク文明國民ノ間ニ蔓延シ、年年幾多ノ同胞ハ之ガ爲ニ其命ヲ奪ハル、ニ拘ラズ、其病因未ダ明ナラズ、從テ吾人ハ未ダ之ヲ全治スルノ方法ヲ知ラズ、是ニ於テカ、文明各國、相競テ癌研究ノ機關ヲ設ケ、專門ノ學者相集マリテ、其本態ヲ闡明シ、其治方ヲ發見センコトヲ努ム、我ガ癌研究會モ創立以來既ニ八年其成績年ヲ逐フテ見

北村　精造君　醫學博士　三浦　謹之助君
醫學博士　宮本　叔君　平井　政道君
醫學博士　平山　金藏君　醫學博士　樋口　繁次君

理事長　醫學博士　長與　又郎君
理事　細野　順君
理事　醫學博士　高木　兼二君
理事　文學博士　醫學博士　富士川　游君
監事　朝吹　英二君

(三)大正四年四月十日理事任期滿了ニ付長與、細野、富士川、高木ノ四氏ヲ新タニ登記シ且資產ノ總額ヲ九千四百四拾參圓參拾九錢ニ變更登記ヲ了シタリ

(四)大正四年四月十三日本會研究囑託規程ニ依リ左記ノ通リ引續キ癌ニ關スル研究ヲ囑託セラレタリ

醫學博士　緒方　知三郎君

(五)大正四年四月十三日同上ニ對スル研究材料費トシテ金參百圓(半ケ年分)迄ヲ限リ支出スルコトニ理事會ニ於テ決定シタリ

(六)大正四年五月二十日第七回學術集談會ニ於テ報告セラレタル演說論文審查ノ爲メ會頭ヨリ左ノ通リ委員ヲ囑託セラレタリ

醫學博士　本多　忠夫君　醫學博士　山極勝三郎君
醫學博士　藤浪　鑑君　醫學博士　佐多　愛彦君
醫學博士　長與　又郎君　醫學博士　今　裕君

(七)大正四年五月二十二日本會癌研究補助規程ニ依リ左記ノ諸氏ニ各頭書ノ金額ヲ補助シタリ

金五百圓　醫學博士　山極勝三郎君
金四百圓　醫學博士　藤浪　鑑君
金參百圓　醫學博士　林　直助君

(八)大正四年九月二十五日本會評議員兼編輯委員山極博士ノ「人工的癌腫ノ發生」ト題スル講演ヲ東京帝國大學醫科大學病理學教室ニ於テ開會ニ付出席方在京會員ニ通知シタリ

(九)本年度中ニ於ケル理事會協議事項左ノ如シ

第一回理事會　(二月九日於錦水)

(一)第八回定期總會竝ニ第七回學術集談會ニ關スル件
(二)會員募集ニ關スル件

○雜　報

ニシテ之ヲ前年度末現在會員數百六十一名ニ比スレバ七十名ノ增加ヲナセリ今本年度中ニ於ケル入會、退會、死亡數ヲ左表ニ示ス

大正三年度末現在	入會	退會	死亡	大正四年度末現在
一六一名	七五名	二名	三名	二三一名

○雜　事

（一）大正四年四月六日午前十時ヨリ東京帝國大學醫科大學病理學教室ニ於テ第八回定期總會竝第七回學術集談會開催シタリ其擧行順序左ノ如シ

（一）開會之辭　會頭

（二）前年中會計庶務報告

（三）懸賞論文審査報告及授賞式

（四）役員選擧

（五）學術集談會演說

（六）閉會之辭　副會頭

（二）大正四年四月六日役員改選ノ結果靑山會頭、本多副會頭重任ニ付靑山會頭ノ推選ニ依リ副總裁ヨリ左記ノ諸氏ニ評議員、監事、理事長、理事ヲ囑託セラレタリ

評議員（イロハ順）

醫學博士	入澤　達吉君	岩井　禎三君	
醫學博士	伊丹　繁君	林　睥君	
醫學博士	林　春雄君	西山　信光君	
醫學博士	本田　雄五郎君	土肥　慶藏君	
醫學博士	遠山　椿吉君	男醫學博士	岡　玄卿君
醫學博士	岡田　和一郎君	緒方　正規君	
醫學博士	大森　英太郎君	金杉　英五郎君	
醫學博士	吉本　清太郎君	吉河　爲久藏君	
醫學博士	田代　義德君	男醫學博士	高木　兼寬君
醫學博士	高木　喜寬君	醫學博士	高木　兼二君
醫學博士	鵜田　禎次郎君	醫學博士	中濱　東一郎君
醫學博士	宇野　朗君	醫學博士	栗本　東明君
醫學博士	草間　滋君	醫學博士	久保　德太郎君
醫學博士	山極　勝三郎君	醫學博士	今　裕君
醫學博士	近藤　次繁君	醫學博士	朝倉　文三君
醫學博士	吾妻　勝剛君	醫學博士	阿久津　三郎君
醫學博士	佐藤　三吉君	醫學博士	佐藤　達次郎君
醫學博士	木下　正中君	醫學博士	木村　德衞君

收入之部

一金壹萬七千六百八拾八圓參拾壹錢收入總高

內譯

金九千四百四拾參圓參拾九錢　前年度繰越金
金六千九百圓　寄附金
金六百五拾壹圓　會費

內

金六百貳拾壹圓　普通會費
金參拾圓　特別會費
金六百八拾參圓九拾貳錢　預金利子

內

金六百九圓八錢　定期預金利子
金七拾四圓八拾四錢　當座預金利子
金拾圓　雜收入

內

金拾圓　雜誌賣切代

支出之部

一金貳千八百四拾壹圓八錢　支出總高

內譯

金千七百九拾四圓貳錢　研究事業費

內

金九百五拾圓六拾貳錢　研究補助費
金參百六拾圓　研究囑託手當
金四百八拾參圓四拾錢　研究材料費
金百拾八圓六拾壹錢　集會費

內

金參拾參圓拾參錢　總會費
金八拾五圓四拾八錢　理事會費
金四百九圓貳拾錢　雜誌費及配送費

內

金參百貳拾八圓九拾八錢　雜誌印刷費
金五拾五圓五拾錢　原稿料及編輯費
金貳拾四圓七拾貳錢　郵稅及配達費
金參百八圓參拾錢　常務費

內

金貳百拾七圓　給料及手當

(三)癌業報第九年第一册發行ニ關スル件
(四)大正三年度本會計庶務報告ニ關スル件
(五)研究費補助者及囑託者ニ對スル大正三年度中ノ事業成績報告徵收ノ件

第二回理事會（四月十二日於錦水）

(一)緒方囑託ニ對スル研究材料費支出ノ件
(二)本年度ニ於ケル研究事業方針決定ノ件
(三)書記俸給增給ノ件

第三回理事（五月八日於北野屋）

(一)研究補助費支出ノ件
(二)癌業報第九年第二册發行ニ關スル件
(三)懸賞論文審査委員囑託ノ件

第四回理事會（十月二十日於北野屋）

(一)緒方囑託研究材料費追加豫算ノ件
(二)雜誌編輯ニ關スル件
(三)資產利殖ニ關スル件
(四)懸賞論文審査ニ關スル件
(十)本年度中ニ於テ本會ノ趣旨ヲ贊成セラレ癌研究費中ニ金員ヲ寄附セラレタル諸氏ノ芳名ヲ左ニ揭ゲ本會ハ謹ンデ其厚意ヲ謝ス

金貳千五百圓（五ヶ年賦）　橫濱　茂木惣兵衞君
金貳百圓　東京　濱田　捷彦君
金壹萬圓（五ヶ年賦）　東京男爵　岩崎　久彌君
金壹萬圓（五ヶ年賦）　同　男爵　三井八郎右衞門君
金貳千圓　東京　服部金太郎君
金貳百圓　新潟　西脇濟三郎君

(十一)大正四年十二月十四日本會評議員岩井禎三君逝去ニ付會頭ハ本會ヲ代表シ弔詞ヲ呈シタリ
(十二)本年度中ニ於ケル會員死亡者氏名ヲ左ニ揭ゲ本會ハ謹ンデ弔意ヲ表ス

東京府　醫學博士　濱田玄達君
佐賀縣　醫學博士　大黒安三郎君
東京府　岩井禎三君

◎大正四年度社團法人癌研究會收入支出總決算書

蓋シ、尋常ノ體組織ニ一定ノ『刺戟』ヲ持續性ニ加ヘ、之ニヨリテ形成セラルヽ體組織細胞增殖ノ理ニ就テ考察スルコトハ固ヨリ腫瘍組織發生論及原因論ヲ究明スル上ニ重要ナルヤ論無シ。而シテ斯クシテ生ゼル體組織細胞增殖ガ若シ終ニ腫瘍性形像ヲナスニ至リ、或ハ更ニ進デ癌腫性ヲ呈スルニ至ランカ、其試驗ハ腫瘍殊ニ癌腫發生ノ要約ヲ實驗的ニ闡明スルモノト謂フ可シ

著者ハ敢テ胎生組織ノ如キ特殊ノ體組織ヲ用ヰルコト無ク又敢テフイビゲル氏鼠胃腫瘍ニ於ケルガ如キ特殊ナル生物ノ寄生ニ賴ルコトモ無ク、唯單ニ一定ノ刺戟性物質ヲ尋常ノ體組織ニ加フルコトニ依テ、著者ノ試驗ヲ遂ゲタルナリ。著者試驗ノ特色實ニ玆ニ存リ。是レ恰モフイシエル氏ノ「シャルラハ・ロート」油皮下注射ニ依ル上皮細胞增生試驗ニ比スベキモノニシテ而モ是迄「シャルラハ・ロート」油注射等ニ因テ眞ノ上皮性腫瘍ノ發生シタルモノ未ダ之無キガ如シ

著者ノ試驗ハ「テール」ヲ用ヰ家兎耳殼ノ外皮面ニ塗擦スルニアリ。而シテ多數ノ試驗動物ニ付キ之ヲ持久反復シ多數ノ時日ヲ費シテ施行セリ。又皮下ニ「シャルラハ・ロート」油ノ注射ト「テール」塗擦トヲ併セ行ヒタルモノモアリ。此試驗ノ結果、著者ハ其多數試驗動物ニ於テ終ニ塗擦部ニ「パピローム」ノ發生シタルモノヲ得タリ。斯カル「パピローム」ノ大多數ハ家兎耳殼內面ニ反復「テール」塗擦スルニ因テ七十乃至百日ノ後ニ多發シタルモノニシテ其ノ形ハ有基「ポリープ」狀ヲナスニ至ル。著者ハ此「パピローム」ニ就キ肉眼的檢查ノ外鏡檢ヲ行ヒ之ヲ以テ少クトモ皮膚ノ諸慢性炎等ニ見ル「パピローム」ト同一列ニ數フ可キモノナリトシ、又其組織發生ニ就テハ毛嚢上皮ノ主働的增殖ニ在ルコトヲ認メ依テ本來ハ「毛嚢上皮性上皮腫」ト謂フ可キモノナリトセリ

蓋此ノ如キ實驗ニ依リテ「ポリープ」狀「パピローム」ヲ家兎耳殼ニ作リ出シタル成績ハ他人ノ未ダ擧ゲザリシモノナリ。而カモ之ヲ人體ノ「テール」癌等ノ所見ニ鑑ミテ、斯カル成績ノ敢テ奇性ニ非ルヲ知ルト同時ニ此「パピローム」性增殖ヲ以テ此種皮膚癌ノ初期狀態ト比肩對照セシムルニ足ル可シ。サレバ著者ハ此研究ヲ續行シ、本業績發表

○雜　報

金四拾圓七拾五錢　通信運搬費
金四拾錢　諸印刷費
金五圓七拾錢　消耗品費
金拾七圓五拾錢　集金費
金貳拾六圓九拾五錢　雜費
金百八拾參圓九拾錢　備品費
內
金百八拾參圓九拾錢　器具器械費
金貳拾七圓五錢　臨時費
內
金貳拾七圓五錢　會務擴張費
差引金壹萬四千八百四拾七圓貳拾參錢
內譯
金壹萬參千五百圓　定期預金
內
金七千五百圓　前年度定期預金
金六千圓　本年度同上
金壹千百四拾圓七拾九錢　銀行特別當座預金
金貳百六圓四拾四錢　郵便振替貯金

右之通相違無之候也

大正五年四月六日　〃

理事細野順
監事朝吹英二

◎大正四年度懸賞論文審査ノ要旨

人工的「バピローム」發生ニ就テ

醫學博士　山極勝三郎
市川厚一

大正四年四月六日東京ニ於テ開カレタル第七回癌研究會學術集談會ニテ報告セラレタル業績ノ數十八アリ。其中ニ就テ最優秀ナルモノヲ山極、市川兩氏共著ノ『人工的「バピローム」發生ニ就テ』ナリト認メタリ

著者ハ癌腫ノ發生要約ヲ探知センガ爲ニ夙ニ之ニ關スル特殊ノ實驗的研究ヲ企テ、大正三年既ニ其第一回報告ヲ出シタリ。本業績ハ其第二回報告ニ當ル

セシムルモ妨ナシ

第三條　賞金ハ五百圓以内トス

第四條　審査委員ハ若干名トシ會頭之ヲ囑託ス

第五條　賞金ヲ與フベキ業績ハ選定ノ時ニ公表シ授賞式ハ次回ノ學術集談會ニ於テ擧行ス

大正五年三月二十八日竹葉亭ニ於テ第二回理事會開會協議事項左ノ如シ

(一)山極、林兩博士ニ對スル本年度研究補助ニ關スル件

(二)懸賞論文授賞ニ關スル件

(三)今博士ニ對スル研究補助ニ關スル件

(四)研究用動物飼養場新設ニ關スル件

◎雜件

○癌研究補助　本會癌研究規程ニ依リ理事會ノ決議ヲ經左記ノ通リ補助金支出ノ事ニ決定シタリ

金參百圓　自一月至六月　醫學博士　藤浪鑑君

金貳百七拾圓自四月至十二月　醫學博士　林直助君

金參百六拾圓自四月至十二月　醫學博士　山極勝三郎君

○雜報

金參百圓　自四月至十二月　醫學博士　今裕君

○癌研究囑託ノ再囑及研究材料費支出　本會癌研究囑託緒方知三郎氏ニ本年度半期間之ヲ再囑シ其材料費トシテ金參百圓支出スルコトニ決定シタリ

○懸賞論文ノ授賞　大正五年四月六日第九回定期總會ニ於テ左記ノ通リ授賞シタリ

賞記

醫學博士　山極勝三郎

市川厚一

第七回學術集談會ニ於テ報告セラレタル論文「人工的「パピローム」發生ニ就テ」ニ對シ本會懸賞論文規程ニ依リ賞金參百圓ヲ授與ス

大正五年四月六日

社團法人癌研究會會頭　醫學博士　青山胤通

○法人登記ノ變更　大正三年度本會資產ノ總額九千四百四拾參圓參拾九錢ヲ大正四年度末資產壹萬四千八百四拾七圓貳拾參錢ニ變更登記ヲ四月十一日之ヲ了シタリ

但本人疾病其ノ他ノ差支アルトキハ他人ヲシテ演說

以後ニ於テ擧ゲタル成績ニ據レバ此「パピローム」性增殖ヨリ終ニ癌腫狀上皮細胞增殖ノ像ヲ得ルニ至リシコトヲ示シタリ

本研究ハ腫瘍ノ病理ニ關シテ吾人ノ知見ヲ擴充スルコト尠少ニ非ズ殊ニ著者ガ平生ノ持說ニ基キテ此實驗ヲ計畫シ而カモ能ク堅忍不撓長時間ニ亙リテ之ヲ實行シ終ニ前人ノ未ダ得ザリシ成績ヲ得ルニ至リシナリ。又之ニ據リテ單簡ナル持續性組織刺戟ニヨリテ此ノ如キ腫瘍性上皮細胞增殖ヲ生ジ得ルヲ示シタルコトハ腫瘍發生ノ要約ヲ闡明スル上ニ新シキ經驗ヲ開キタルモノトテ吾人ハ知見ヲ補益スルトコロ多シト謂フ可シ

大正五年三月

審査委員

醫學博士　佐多　忠夫　醫學博士　藤浪　鑑
醫學博士　佐多　愛彥　醫學博士　今　裕
醫學博士　長與　又郎

◎評議員會及理事會記事

大正五年二月二十三日第一回評議員會ヲ萬世橋「ミカドホテル」樓上ニ於テ開會決議事項左ノ如シ

(一)本會懸賞論文規程中改正ノ件

原案可決

(二)名譽會員推薦ノ件

原案可決

(三)大正四年度庶務會計報告之件

原案可決

終ツテ第九回定期總會竝第八回學術集談會開會準備ニ關スル協議ヲナシタリ

本會懸賞論文規程中第三條ヲ左ノ通リ改正ス

第三條「賞金ハ貳百圓トス」ヲ「賞金ハ五百圓トス」ニ改ム

◎社團法人癌研究會懸賞論文規程

第一條　癌ニ關スル業績ニシテ學術上有益ト認ムルモノヲ選ビ審査委員ノ審査ヲ經テ規定ノ賞金ヲ授ク

第二條　此規定ニヨリテ賞金ヲ受クベキ業績ハ本會學術集談會ニ報告セルモノニ限ル

但本人疾病其ノ他ノ差支アルトキハ他人ヲシテ演說

○雜　報

○大正五年四月七日　本會ニ寄附セラレタル篤志家及新聞竝ニ醫事雜誌記者諸士ヲ招待シ醫科大學病理學教室ニ於テ癌研究ニ關スル經過報告ヲ兼テ其成績及狀態等標本ヲ供覽シ長與理事長之ガ說明ノ勞ヲ取レリ

○動物飼養場新設　癌研究用動物飼養場ヲ醫科大學病理學教室敷地内ニ新設スルコトニ決シ金貳百圓支出スルコトト成レリ

◎會員異動

○入　會

芝區三田二ノ一四　松山陸郎

○轉　居

芝區三田小山町三七　高橋信

久留米市田町尾關病院　尾關正惠

名古屋市東區南武平町四ノ七　小島浦三郎

大阪府東成郡墨江村字長峽五五　高洲謙一郎

麹町區富士見町二ノ四五　平賀精次郎

朝鮮龍山鐵道病院　佐々木四方志

神田區駿河臺鈴木町五　小畑惟清

東北醫科大學外科　松村七太郎

○死　亡

大阪市西區江戸堀上通　服部哲

橫濱市日ノ出町二ノ四一　西尾祐一

謹　告

本會會費未納ノ諸君ハ來六月三十日迄ニ本會振替貯金口座東京第三〇〇七一番ヘ御拂込相成度謹告候也

大正五年六月

社團法人　癌研究會

電話本局二四七番